



『あいさつ表現儀礼全国地図』の 解釈研究及び国際交流

(課題番号 15520291)

平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費 (基盤研究 (C) (2))

研究成果報告書

平成 17 年 5 月

研究代表者 **江 端 義 夫**

広島大学図書

広島大学大学院教育学研究科 教授)

0130509283



はしがき

はじめに

本報告書では、独立行政法人日本学術振興会による平成 15・16 年度科学研究費補助金の支援をいただいて実施した基盤研究(C)(2)の研究実績の概略を報告する。

研究組織

研究代表者：江端義夫（広島大学大学院教育学研究科教授）

交付決定額(配分額)

(金額単位:千円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 15 年度	1300	0	1300
平成 16 年度	800	0	800
総計	2100	0	2100

研究発表

(1) 学会誌など

- 江端義夫 「文学的文章指導」から「鑑賞文指導」へ、そして、「説明的文章指導」から「説得文指導」へ 『誰にでも書ける小論文の指導』所収 平成 16 年 2 月 29 日
- 江端義夫 小論文即説得文指導の実践 『誰にでも書ける小論文の指導』所収 平成 16 年 2 月 29 日
- 江端義夫 国語 高等学校国語科教材開発研究 『高等学校における教科指導研究』所収 平成 16 年 3 月 20 日
- 江端義夫 渥美半島方言助詞の研究(Ⅱ) 広島大学大学院教育学研究科紀要 II-52 平成 16 年 3 月 28 日
- 江端義夫 備後方言における「シェ」「ジェ」の消長 『広島民俗』第 61 号 平成 16 年 3 月 31 日
- 江端義夫 地理言語学の時代 『山形方言』第 36 号 平成 16 年 3 月 31 日
- 江端義夫 教育実習からはじまる「国語授業自分史」の習慣 『はじめてな国語授業自分史を書く』所収 平成 17 年 3 月 22 日
- 江端義夫 渥美半島方言助詞の研究(Ⅲ) 広島大学大学院教育学研究科紀要 II-53

平成 17 年 3 月 28 日

江端義夫 中等学校における教科内容指導研究 『広島大学大学院教育学研究科 共同研究プロジェクト報告書』所収 平成 17 年 3 月 28 日

江端義夫 高等学校における国語教育内容の展開 『中等教育における教科内容指導研究』所収 平成 17 年 3 月 28 日

(2) 口頭発表

なし

(3) 出版物

江端義夫 『誰にでも書ける小論文の指導』 広島大学教育学部国語文化教育学研究室
平成 16 年 2 月 29 日

江端義夫 『はじめてな国語授業自分史を書く』 広島大学教育学部国語文化教育学研究室
平成 17 年 3 月 22 日

研究報告

広島大学図書

0130509283



目 次

	頁
I. 本研究の目的、研究経過及び本報告書の概要	1
II. 『あいさつ表現儀礼全国地図』の全地点一覧及び臨地調査による『あいさつ表現儀礼全国地図』地点一覧	6
1. 『あいさつ表現儀礼全国地図』の全地点一覧	
2. 臨地調査による『あいさつ表現儀礼全国地図』地点一覧	
III. あいさつ表現儀礼全国地図資料一覧	25
IV. W.Viereck 博士による言語地図の解釈技術の提供について	65
V. 今後の課題	83

I. 本研究の目的、研究経過及び本報告書の概要

1. 本研究の目的

本研究の目的は以下の a から h までの 8 つに集約される。

- a. 文表現以上の言語単位を研究対象にした、世界最初の言語地図を目指す。
- b. 音韻・文法・語彙を包括した総合的な言語地図を目指す。
- c. 国民の創造的な発想法を事実として記録した言語地図を目指す。
- d. 全国 500 地点余についてのあいさつコミュニケーション言語地図を目指す。
- e. 「あいさつ行動」を地図に表現して、「あいさつ表現儀礼」の国民的文化を明らかにする。
- f. 年中行事にかんするあいさつをも取り入れて、伝統と文化と習俗との関係を明らかにする。
- g. 地域の民俗・習俗に関する「あいさつ」儀礼を項目にとりいれ、それらの実態を明らかにする。
- h. 資料地図と解釈地図との調和を考えた言語地図を目指す。

以上の目的のもとに、全国あいさつ表現儀礼の研究を推進している。

2. 研究経過

本研究にかんして、日本学術振興会から科学研究費補助金の支援を賜っている。感謝しつつ、記させていただく。

平成 6 年度一般研究 C 「全国ネットワーク網によるあいさつ表現儀礼の研究」

課題番号 06610397 助成金額 150 万円 研究者名 江端義夫

平成 7 年度一般研究 C 「全国ネットワーク網によるあいさつ表現習俗の研究」

課題番号 07610419 助成金額 170 万円 研究者名 江端義夫

平成 8 年度一般研究 C 「全国ネットワーク網によるあいさつ表現意匠の研究」

課題番号 08610430 助成金額 170 万円 研究者名 江端義夫

平成 11 年度基盤 C 「『あいさつ表現儀礼の全国地図』の完成及び国際交流」

課題番号 11610435 助成金額 80 万円 研究者名 江端義夫

平成 12 年度基盤 C 「『あいさつ表現儀礼の全国地図』の完成及び国際交流」

課題番号 11610435 助成金額 50 万円 研究者名 江端義夫

平成 13 年度基盤 C 「『あいさつ表現儀礼の全国地図』の完成及び国際交流」

課題番号 11610435 助成金額 50 万円 研究者名 江端義夫

平成 14 年度基盤 C 「『あいさつ表現儀礼の全国地図』の完成及び国際交流」

課題番号 1160435 助成金額 50万円 研究者名 江端義夫
平成15年度基盤C 『あいさつ表現儀礼全国地図』の解釈研究及び国際交流
課題番号 15520291 助成金額 130万円 研究者名 江端義夫
平成16年度基盤C 『あいさつ表現儀礼全国地図』の解釈研究及び国際交流
課題番号 15520291 助成金額 80万円 研究代表者 江端義夫

過去9年間にわたり、一貫して「あいさつ表現儀礼」についての討究を執拗に行ってきた。全国47都道府県で各一地点ずつ、筆者自身の臨地調査によるあいさつ儀礼調査も行った。同時に、フィールドワークを依頼して同じ調査票により通信依頼実地調査も行った。合計で506地点の全国資料を収集することが出来た。成果の一部を、2000年にポーランドで開催された国際会議において招待講演発表をさせていただき、一定の義務を履行することができたと思っている。

ところで、基礎図をゴム印符号で押印していく方法の言語地図では、物理的な時間がかかり、大変な重労働を伴う。そこで、労働の軽減が課題となった。

3. 本研究の着想に至った経緯と経過

貴重なデータを機械化により、何とか早く処理をして、『あいさつ表現儀礼全国地図』という名前の本を世の中に出さなくてはならない。これが、私の責務である。手作りでは、とても間に合わない。コンピュータを使って、公刊することが課題であり義務である。

資料の9割を電子化し終えた。今後、残りの1割を電子化した後、凡例の作成、地図化、解釈へと進めていく。

ポーランドでの国際会議(2000年度)では、手書き地図により、スケールの大きな研究発表を行い、一定の反響があった。平成14年度末の科研費報告書では、ポーランドでの国際会議での英文発表稿を載せたところ、アメリカの専門誌の GEOLINGUISTICS が書評で取り上げ、江端の伝播理論として注目されたのは、幸いであった。

本研究課題が総合的で文明論に関わる面を持つために、解釈が容易ではなく、しかも、従来の言語地理学の方法では解釈が不可能であることが判明した。そこで、社会言語学の方法をも援用する必要性が生まれた。ひとまず、GISソフトの利用を本気で考えることとなり、その方面の専門家の指導も受けたりした。

本研究は、全国の村へ江端が一人で臨地調査して実際の「あいさつ表現儀礼」方言を収集する全国行脚を初めとして、半分専門家である人に通信依頼実地調査をお願いするという根気の要る仕事も実施した。私の臨地調査では、ダンボール一箱の録音テープが収録できた。自然傍受法に近い形での質問調査なので、無駄な会話も収録されている。1500時間以上の生テープを聞き直して、音声記号に移し替える作業は、想像を絶する仕事である。しかも、通信依頼実地調査の資料と対等に取り扱うことにしたので、国際音声記号で書い

たものを、さらに、カタカナ記号に直す作業も必要になる。こうして、通信依頼実地調査の資料水準と同列にする変換事務が別に要ることとなる。質の違う資料を同列に扱うための細心の注意が必要になってきている。

臨地調査で得た方言資料と通信依頼実地調査で得た方言資料との間には、どんなに言葉を尽くして説明しても、そこには、歴然とした差異がある。方言は、唇の働きとか面倒臭そうに應えとか、視線の動きとか、傍らの人への気遣いとか、回答された事象の生産場面が持つ必然性というものに、深く関わるものなのである。そんな方言の場面依存性に配慮するようになったのが、語用論なのであろう。方言の場面依存性をひしひしと感じている私は、語用論に「地域生活科学」の視点が入れば、そのまま、方言研究に直結すると考えている。会話の立地条件の必然性が問われるのが、方言だからである。社会言語学や語用論や談話研究、或いは、地理情報システムの活用など、いろいろの学問や技術が本研究に縦横に絡まることになった。「あいさつ表現儀礼」という人間生活の基礎であり、かつ、結末である文明的価値の追究には、時間が必要であった。本研究にのみ、一日中関わっていることなど出来なくて、もどかしい思いをしつつ、いたずらに、時間とお金を浪費してきた慚愧の念にもかられる。技術を直ぐに取り入れなくて、機械に遊ばされている疲労感にさいなまれることもあった。有意義な結論が想定できているのに、そこまでの道程には、茨やぬかるんだ泥道が遮っていて、直進を阻んだりした。こつこつと9年間を、諦めずに、一つの道を歩んできたが、しかし、まだ、公表できる手筈は整っていない。

本研究の斬新さや成果の国際的な応用面の大きさなどは、初めの企画から、全く本研究の重要さは失われていない。むしろ、どんどん、本研究の価値が高まってきている。当然、国際化に伴い、「あいさつ儀礼」の実態が事実として知りたいとの要求は増している。言うまでもなく、出会いと別れは、コミュニケーションの組織であり、そこに異なる文化・文明に裏打ちされた「あいさつ表現とあいさつ儀礼」が醸し出される。そこを、比較研究に持っていくことが必至な課題であろう。かかる現代の課題に回答を出すべきテーマなのだという事は、十分に心得ている筈である。

本研究を、「地理言語学」に関する日本での最初の成果として公表するつもりではある。本研究により、日本における地理言語学(地理方言学)が、今後大きく発展することが期待される。もう暫く、猶予をいただきたいと、お願いするところである。

4 本報告書の概要

本報告書の目次は五部で構成される。

「Ⅰ、研究の目的、研究経過及び本報告書の概要」

「Ⅱ、『あいさつ表現儀礼全国地図』の全地点一覧及び臨地調査による『あいさつ表現儀礼全国地図』地点一覧

「Ⅲ、あいさつ表現儀礼全国地図資料一覧

「IV、W. Viereck 博士による言語地図の解釈技術の提供について」

「V、今後の課題」

先にも、述べたが、W. Viereck 博士が主催する『ヨーロッパ言語地図』は、既に 60 年以上も、言語地図作製にかかりきっている。彼は五代目のリーダーである。ドイツのマールブルク大学で戦後に開始された地図作りが、XY プロッターで本格的に作動したのが、1982 年である。その後も、責任者が代わり、補充調査も実施されたり、主導権争いもあったりして、解散騒ぎもあった。長い年月をかけなくてはならない仕事には付き物の軋轢である。初代のリーダーである A. Weijnen には、私は 1982 年にベルギーに訪ねて親交を得たことがある。それ以降、23 年が経過した。まだ、それらの仕事は、果てしなく続けられている。EU が統合し、気運は高まっている。ただし、ヨーロッパの経済的な景気が翳りを見せた現在、言語地図を継続して作り続けることは至難のわざである。W. Viereck 博士も 2006 年には、定年を迎える。時間とお金のかかる言語地理学は、避けられるようになった。簡便に、Variations の結果が得られる社会言語学へ、人々の関心が移って行った。やむをえないことである。労多くして、成果が直ぐには得られない言語地理学などに拘ってられないのも当然である。早く成果を得たいという人々の欲求が透けて見える。

確かに、Trudgill が指摘するように、社会言語学にも限界がある。地理言語学の掌に抱かれた中でしか動き回れない「孫悟空」のような存在が、現在の社会言語学であろう。私も、そのことは十分に了解している。

たとえば、社会言語学が新しさを求めて、どんどん地域差に触手を伸ばせば伸ばすほど、地理言語学にならざるを得ないからである。いまのところ、社会言語学がグラフや図表や統計的数値を用いているので、共時的な側面が維持されている。しかし、次第に GIS などの利用が盛んになれば、社会言語学の意味が薄れる。そうなった時に、社会言語学は、地理言語学の一部だという指摘が、当然なこととなる。地理的な図面は、歴史的な解釈を許すものである。そうなれば、共時態とばかりは言っておられず、通時態のこととして解釈しなくてはならなくなるであろう。地域差だけが残り、瞬時に情報が伝わる時代だ、と言う人がいる。地域差は無い、と言い切る人もおられる。そうだろうか。移動にはお金が要る。そのお金を、誰もが自由自在に使えるとは思えない。集団を形成して生きる動物なので、地域社会という枠組みは、学校教育場面を考えれば、避けて通れないものだという事は理解されよう。恐らく、昭和 20 年代のような電気の行き渡らない村社会がまだ、全国の各地に見られたころには、一生を村の中だけで過ごす人も少なくなかったし、方言の純粋性も固く守られた。そのころから比べれば、現在の高学歴社会化による国内の移動、就職のための移動、会社の出張による移動、遠隔通勤による移動など、限りなく、人は自分の生活圏を固辞しなくなっている。そのような文明化による条件が人間の方言にどのような影響を与えるのか、という視点で研究するのに、恰好な課題が「あいさつ表現儀礼全国地図」の解釈研究なのである。日本のように、近代化が著しく早く進んだ国だからこ

そ、実験的に研究して、モデルを作ることが求められるのだと私は、考えているところである。世界に先駆けて、この研究を行う意味は、極めて大きいと自覚している。

参考文献:

J.K.CHAMBERS, PETER TRUDGILL: Towards geolinguistics, " Dialectology " , Cambridge University Press, 1980

Yoshio Ebata: A New Interpretation of Dialect Atlas Data of Two Age Groups in Japan, DIALECTOLOGIA et GEOLINGUISTICA , International Society for Dialectology and Geolinguistics , 7/1999

Wolfgang Viereck, Karin Viereck und Heinrich Ramish: dtv-Atlas Englische Sprache, München, Deucher Taschenbuch Verlag, 2002

II. 『あいさつ表現儀礼全国地図』の全地点一覧及び「臨地調査による「あいさつ表現儀礼全国地図」地点一覧について

1. 『あいさつ表現儀礼全国地図』の全地点一覧

(臨地調査地点及び通信依頼実地調査地点)

全国の都道府県 47 地点について、「村」を探して、一地点ずつ、臨地調査した結果がある。筆者が一人で訪ねて調査した。もう一つは、多くの協力者の力で、被調査者の家を訪ねていただき、実地調査をしていただいたものである。

全国で合計、506 地点を数える。これらの地点には、複数の被調査者がいるので、実際は 1000 人を越える人が、資料を提供してくださったことになる。一地点に一人の被調査者という例も無いわけではない。私が探していく場合には、個別の訪問になるので、ご自宅を訪問することになり、必然的に、被調査者は一人になる。しかし、村の教育委員会社会教育課のお世話になる場合には、複数の人が参集くださっていることが少なくなかった。

「村」のあいさつ表現儀礼という場合に、条件の統一を図る必要があるだろう。被調査者を男に限定するなどということはしなかった。人に人選を頼む場合には、必ずしも厳しい条件を設けることはできにくい。その村の生まれで、70 歳くらいで、3 年以上、他村での生活が無い人、話好きで余り学歴の高くない人、などいろいろな条件をつけると嫌がられる。仮にお集まりいたいた人について、世間話をしている内に、条件に合わないことが分かる場合がある。しかし、せっかく休みを作って来て下さったのに、「あなたは結構です」と言って、帰っていただくことなど、失礼で、できはしない。結局、多数の人が集まってくださった時には、生え抜きの人に多くの質問を集中する工夫をして、調査をやりとげるしかない。

次の頁の一覧は、全地点の図である。よく眺めてみると、北海道には、もっと地点を多くしても良かった。網走などは、空白である。明治以降の開拓地だからというイメージが先行して、地点を多くはとらなかったように思う。

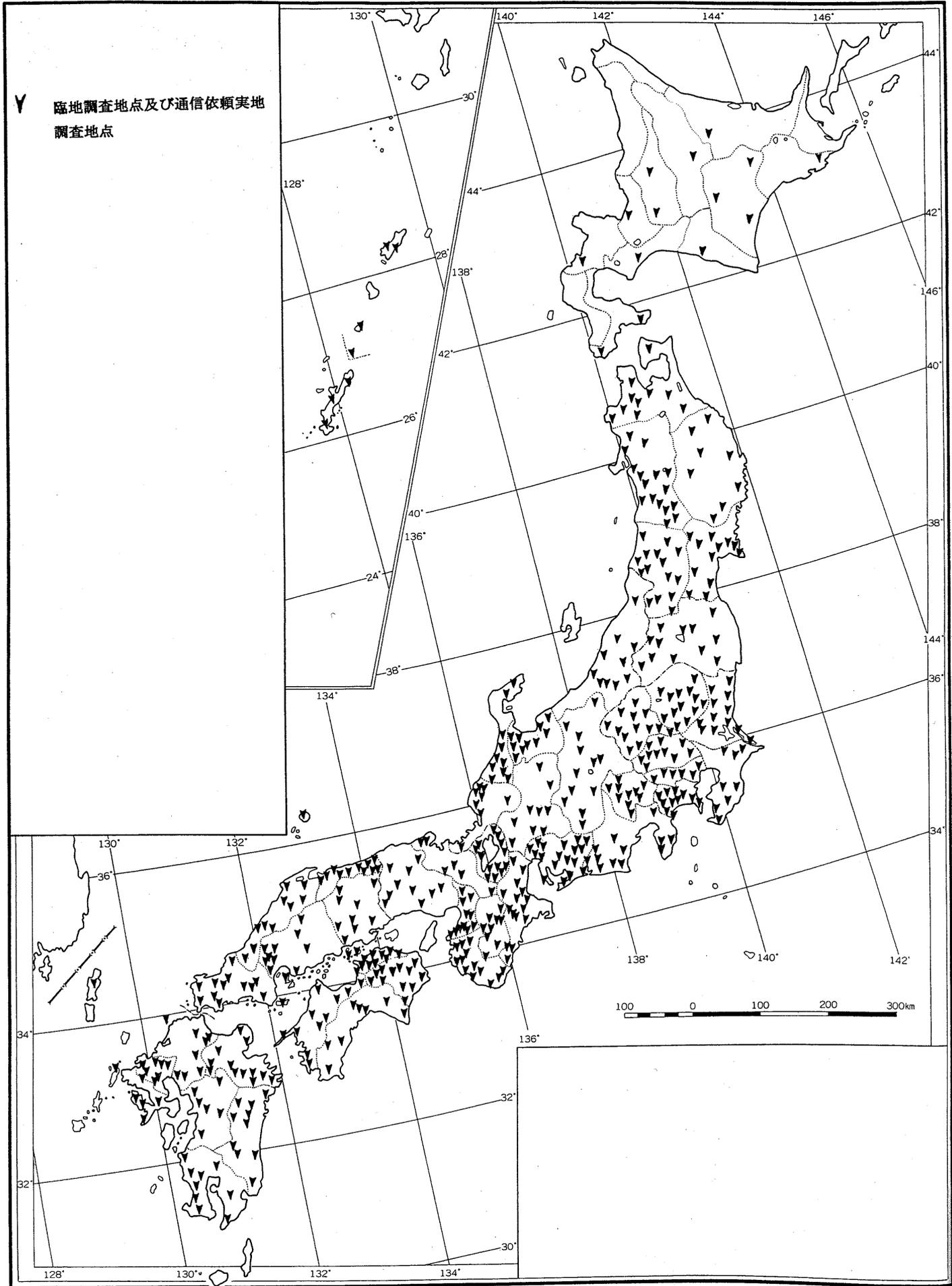
岩手県の地点も少ない。県下に満遍なく地点を設けても良かったが、通信依頼の困難さもあったように思われる。佐渡島や八丈島など、方言の有名な島も敢えて、調査地点に含めていない。瀬戸内海の多くの島々も避けた。いわば、言語の古い状態を調べる意図を優先していないということである。今までの方言研究では、方言に古語を求めて、きひたすら、僻地や孤島に調査地点を設けたものである。それは、それとしての意図が明確であり、肯ける。方言の区画とか方言圏論の追認だとかを目的にすれば、きっと、私も、八丈島とか佐渡島とか、秋山郷とか、沖縄諸島とかをどんどん調査地点に入れていたことであろう。しかし、今回の目的は、従来の方言研究の目的とは違っていた。古語と方言というような対立で方言を考えているわけではない。日本列島全体を押さえて、地理的、文化的、地勢的条件の差によって、どのようなあいさつ表現儀礼が見られるか、総合的な観点から日本列島全体を分析したいと考えていた。

したがって、村と都市との対立や、地勢的な優位性と劣悪性とに関心があったのである。地図上の地点にあいさつ表現儀礼を記述し、その上に、GIS による国勢調査資料を重ねて

いく。地勢性と人勢性(江端の造語)との絡み合いにより、どうして、あいさつ表現というコミュニケーションの機構がここで、こんな形で成立するのか、ということを考えたい。そのメカニズムを考究することにしたいものである。これこそ、社会言語学と言語地理学との融合による新しい地理言語学的研究だと考えられるからである。

最近では、地理言語学 Geolinguistics に飽き足りなくて、地勢言語学という用語で、Geolinguistics にあてた方が適切に筆者の目指すところを言い表せるようにも思うようになってきている。しかし、地理言語学 Geolinguistics という用語さえ、まだ日本では普及していないのに、それを言いだした本人が、すぐに、次の用語に変えてしまっただけでは人々を不安におとしめることになるかと思案し、地勢言語学 Geolinguistics という用語にしたいのを我慢しなくてはならないかと自己に言い聞かせているところである。

『あいさつ表現儀礼全国地図』の全地点一覧
 (臨地調査地点及び通信依頼実地調査地点)



2. 臨地調査による「あいさつ表現儀礼全国地図」地点一覧

平成 17 年 4 月 1 日付けで、全国の村の多くが無くなった。他の村や町と合併して、小さな単位の村が消えた。私が全国を歩いて調査したころは、まだ、東京都にも檜原村という村があった。各県に一つくらいは村が残っていたのである。十年くらい前には、それらの村を選んで、調査していた。しかし、九州や四国には、その当時でさえ、村が無くて、町である地点が多かった。しかたが無くて、町にしたことがある。その県に村が一つでもあれば、その村を訪ねたものである。もう、これからの方言調査では、こんなことは望むべくもないであろう。静岡市のように、海岸ら北端の県境まで、一つの市であるというマンモス都市がまだ、十年前は、不自然に映った。もう、誰も大きな市を不自然だという人はいない。

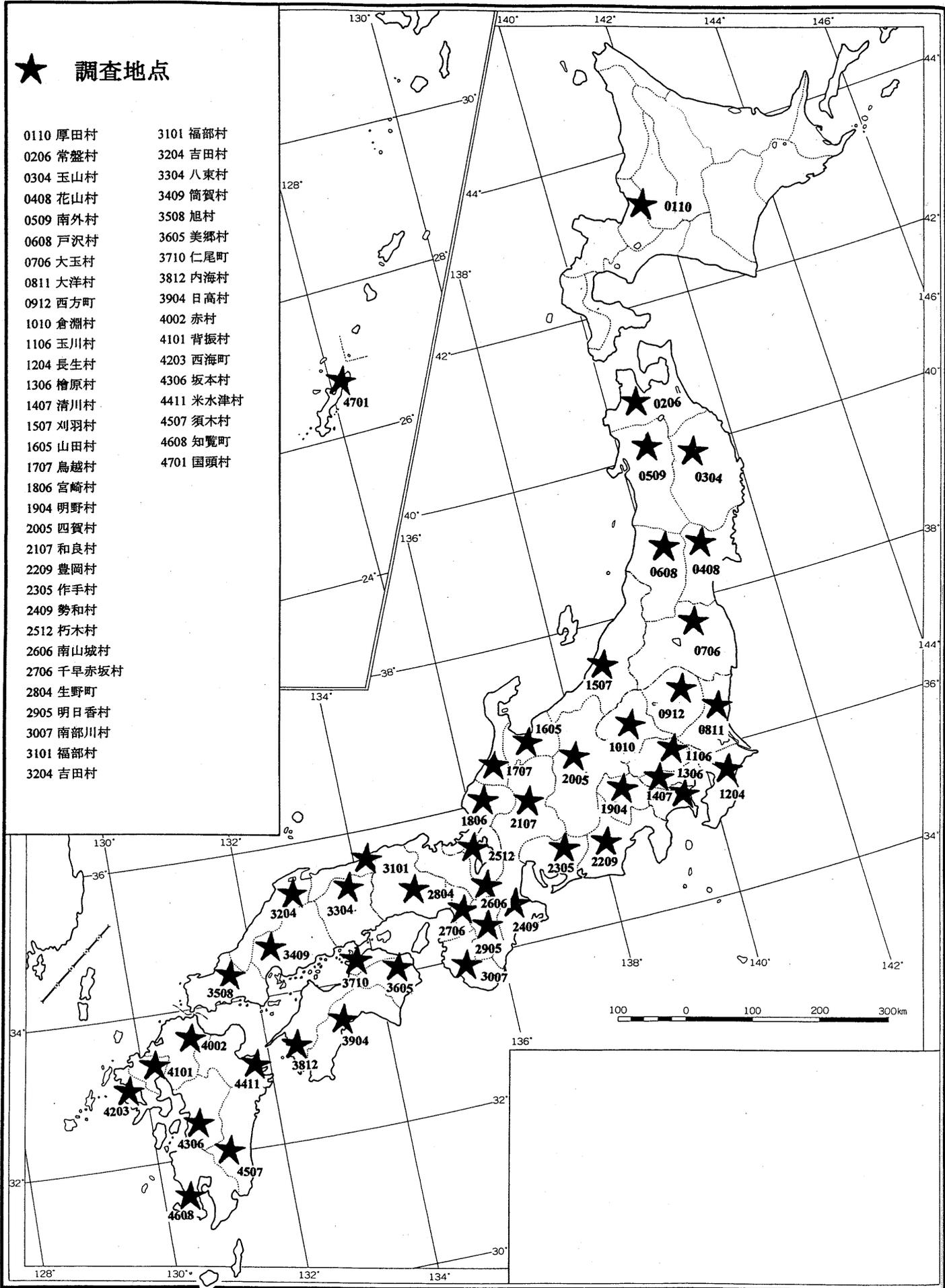
私には、村と都市との間には、寄り合いの習俗を初めとして、人間と人間との関わり合いに、違いがあるものとの仮説がある。いわば、都市には、合理性が求められ、せっちな人が多い。ものの決め方にしても、多数決によりがちである。村社会は、多数決の論理では、「しこりが残る」と思われている。異議が無くなるまで、膝を突き合わせ、酒を酌み交わし、何度も足を運んで、気持をほぐしていかなくてはならない。そうした説得というものは、村八分にならない為の工夫であり、生活の知恵である。今度、世話になる時にも、快く応じてもらわなくてはならない。多数決なんて、もつての外というのが、村社会の論理である。だから、村には、統一したあいさつ表現儀礼がある、共通の摂理がある、と私は信じている。都会的で一般的なあいさつ儀礼ではないものが、村人に共有されている、と信じていた。そういう共有の財産、一貫した村の言語倫理とでも言うべきものを記録しておきたかったのである。

しかし、そのような根源的な精神は、簡単には把握しがたい。また、体系的な説明が困難である。それでも、あきらめずに、資料を収集しつづけてきた。たとえば、村に電気が来るようになって言語生活が変わったのか、隣村との境にトンネルが通じてから村の方言が変わったのか、インフラの整備によって言葉が変わったのか、通勤圏の範囲が鉄道から自家用車が変わったから言葉が変わったのか、その他の文化的・経済的・政治的な要因との関連で、あいさつ表現儀礼地図の分布を解釈していきたいと考えている。

栃木県と兵庫県と香川県と長崎県と鹿児島県とには、1994 年当時、「村」が無かった。これらの五県には、村が無くて町以上しか無かった。しかたがなくて、これらの五県については、「町」について調査をした。

以下の地図には、調査地点の一覧が掲載されている。

臨地調査による「あいさつ表現儀礼全国地図」地点



3. 調査番号・調査地点名・調査者・被調査者生年・調査年の一覧

全 506 地点の全情報を、調査地点、調査者、被調査者生年、調査年に限って、以下に掲載する。

実は、被調査者のお名前も、職業も全部、記述しなかったのだけれども、それはさしひかえた。個人情報保護を保護しなくてはならない。下記の情報で個人を特定できなくはない。厳密に探していけば、調査に協力してくださったお方を突き止めることは容易にできよう。ただし、好意的な対応にさせていただいたのである。資料提供者の親切を尊く待遇したいと思っている。余計な不都合を避けなくてはならない。迷惑の及ばないように対応したいと思っている。種々思案した結果、方言調査に協力してくださったお方のお名前は、感謝を込めて記載させていただくことにした。被調査者の生年も記すことにした。資料の性格を知るための大切な情報だからである。

しかし、調査者名を挙げるのには、少しためらいもある。これだって、この人でなくて、他の誰々さんだったら、もっと、土地勘があったであろうから、他の人に頼めば、もう少し、詳細な報告ができたかも知れない、などと言われ兼ねない。この人は、土地に不案内な余所の土地からの教員だということが分かれば、資料の信頼性が危ぶまれる場合なども危惧される。お名前を出せば、出したで、きっとプラスとマイナスの効果が現れる。

覚悟を決めよう。これは、協力者と私との信頼関係が基本になる。方言の調査は、大変に労力を要する仕事である。それを引き受けて、快く、最後までやってくださったということを大切に思い、全幅の敬意を表すつもりで、お名前を掲げさせていただくことにした。

地点番号	調査地点	調査者	被調査者生年	調査年
0110	北海道厚田郡厚田村大字厚田村	江端義夫	1921	1995
0108	北海道滝川市西2条北	金子忠司	1937	1999
0104	北海道上川郡上川町新町	高橋良弘	1927	2000
0103	北海道紋別郡白滝村東区	小栗法韶	1937	1997
0109	北海道夕張郡栗山町角田	森若一治	1919	1999
0105	北海道上川郡新得町西3条南	秋山秀敏	1951	1999
0102	北海道足寄郡陸別町栄町	北村正利	1923	2000
0112	北海道島牧郡島牧村字江ノ島	北島一	1951	1997
0111	北海道白老郡白老町字杜台	有江則雄	1926	1999
0107	北海道三石郡三石町字美野和	小野寺聡	1927	1999/2000
0106	北海道中川郡豊頃町茂岩末広町	塚崎明久	1934	1999
0101	北海道厚岸郡浜中町霧多布西4条	舟橋正誉	1930	1999
0113	北海道松前郡松前町字福山	村松勲	不明	2000
0114	北海道亀田郡楸法華村字浜町	山本潤一	1930	1997
0207	青森県西津軽郡深浦町大字北金ヶ沢字塩見	伊東信	1933	1999
0208	青森県西津軽郡森田村大字森田字駒ヶ淵	山谷敬二	1932	1997
0209	青森県北津軽郡金木町大字喜良市字平苅	奈良健司	1926	1999
0210-2	青森県東津軽郡蓬田村大字広瀬字坂元	越田茂弘	1916	1997
0210-1	青森県東津軽郡蓬田村大字中沢字浪返	越田茂弘	1924	1997
0206	青森県南津軽郡常盤村大字常盤字西田	江端義夫	1930	1995
0205	青森県南津軽郡平賀町大字平田森字稲村	相馬光徳	1931	2000
0204	青森県東津軽郡平内町大字小湊字後范	後藤久志	1934	1999
0203	青森県上北郡天間林村大字天間館字森ノ上	甲田美喜雄	不明	1997
0201	青森県下北郡風間浦村大字蛇浦字新釜谷	柴垣弘美	1929	1997
0202	青森県三戸郡倉石村大字又重字館町	中村竹徳	1925	1997
0301	岩手県九戸郡種市町平内	堀米繁男	1923	2000
0302	岩手県九戸郡九戸村大字長興寺	古館保男	1934	1997
0304	岩手県岩手郡玉山村大字川又字小沢	江端義夫	1952	1995
0303	岩手県下閉伊郡岩泉町岩泉字下宿	大原亜希子	1938	1999
0305	岩手県岩手郡雫石町上町	佐々木正志	1929	1999
0306	岩手県気仙郡三陸町越喜来字所通	及川ハマ子	1918	2000
0307	岩手県東磐井郡室根村折壁字大洞	力雄	1907	1997
0308	岩手県東磐井郡藤沢町藤沢字八沢	畠山洋	1921	1999
0408-1	宮城県栗原郡花山村字本沢御堂	江端義夫	1923	1995
0407	宮城県栗原郡一迫町北沢平林	菅原金昌	1908	2000
0404	宮城県栗原郡志波姫町堀口宮中	曾根堅哉	1940	1997
0405	宮城県遠田郡涌谷町字	櫻井信	不明	1999
0403	宮城県桃生郡河北町相野谷字本屋敷	安齋寛	1929	1999
0401	宮城県牡鹿郡女川町旭が丘	木村善行	1927	2000
0402	宮城県牡鹿郡牡鹿町大字小網倉浜字小網倉	中村兵衛	1924	1997
0406	宮城県宮城郡松島町幡谷字原ヶ沢	佐々木淑子	1926	2000
0411	宮城県柴田郡川崎町大字支倉字堀ノ内	佐藤貞二	1933	1997
0412-1	宮城県刈田郡七ヶ宿町字関	佐藤繁	1952	1999
0412-2	宮城県刈田郡七ヶ宿町字関	佐藤繁	1952	1999
0409	宮城県亶理郡亶理町字裏城戸	宍戸一郎	1924	1999
0410	宮城県伊具郡丸森町字田町北	渋谷清	1916	1997
0408-2	宮城県栗原郡花山村大字本沢字久保	江端義夫	1920	1995
0501	秋田県山本郡藤里町藤琴字三ツ谷脇	福司満	1935	2000

0502	秋田県北秋田郡鷹巣町綴子字東館	五代儀節子	1927	2000
0503	秋田県山本郡八竜町鶴川東鶴川	近藤克彦	1933	1999/2000
0504	秋田県南秋田郡五城目町大川字ウ川フケ	伊藤憲明	1933	1998
0506	秋田県河辺郡河辺町北野田高屋字榊表	榊正	1925	2000
0507	秋田県仙北郡協和町荒川字下中野	進藤康平 不明		1999
0508	秋田県由利郡岩城町亀田最上町	岩城町教育 不明		1999
0505	秋田県仙北郡西木村問屋字六本松	新山修生	19	1997
0509-1	秋田県仙北郡南外村字上中宿	江端義夫	1918	1995
0510	秋田県仙北郡仙南村飯詰字南西法寺	半田裕幸	1927	1997
0511	秋田県平鹿郡大雄村字東四津尾	小松田文夫	1932	1997
0513	秋田県平鹿郡増田町増田字本町	高橋道明	1957	2000
0512	秋田県平鹿郡十文字町十文字新田字下佐吉	佐々木志朗	1928	1997
0514	秋田県雄勝郡皆瀬村川向字向野	沼倉浩一	1926	1997
0515	秋田県雄勝郡雄勝町横堀字白銀町	江畑富士也	1925	1999
0509-2	秋田県仙北郡南外村字薬師堂	江端義夫	1916	1995
0604	山形県鶴岡市双葉町	鈴木晃	1922	2000
0602	山形県最上郡真室川町大字新町	佐藤貢	1923	1999
0601	山形県最上郡最上町大字黒沢	最上町教育	1921	2000
0603	山形県飽海郡平田町大字砂越字上川原	佐藤春吉		2000
0607	山形県東田川郡立川町狩川楯下	長南寿一	1938	2000
0608-1	山形県最上郡戸沢村大字古口字古口上台	江端義夫	1928	1995
0609	山形県最上郡大蔵村大字清水	早坂松一	1922	1997
0605	山形県西田川郡温海町大字湯温海甲	五十嵐要一	1935	1999
0606	山形県東田川郡朝日村大字大鳥字高岡	宮崎清男	1911	1997
0610	山形県西村山郡河北町谷地乙	矢作春樹	1931	1997
0611	山形県東根市東根丙	ハヤサカミノ	1937	1999
0612	山形県上山氏皆沢	木村清三郎	1933	2000
0615	山形県西置賜郡小国町大字緑町	高橋和衛	1939	1997
0614	山形県西置賜郡飯豊町中	長岡實	1928	1999/2000
0613	山形県米沢市太田町	鈴木たみ子	1943	1999
0608-2	山形県最上郡戸沢村古口字古口	江端義夫	1929	1995
0608-3	山形県最上郡戸沢村大字古口	江端義夫	1928	1995
0708	福島県耶麻郡熱塩加納村大字宮川字八反田	長瀬谷広之	1922	1997
0709	福島県耶麻郡西会津町	根本一 不明		2000
0713	福島県南会津郡只見町只見新町	新国勇	1957	1999
0710	福島県河沼郡柳津町大字柳津字諏訪町甲	土橋諭	1980	2000
0712	福島県大沼郡昭和村大字佐倉	馬場勇伍	1919	1997
0711-1	福島県南会津郡下郷町大字音金字蛇口	室井初子	1926	1999
0707	福島県耶麻郡猪苗代町大字三ツ和字五十軒	兼田芳宏	1918	1999
0706-1	福島県安達郡大玉村大字大山字三合目	江端義夫	1925	1995
0701	福島県相馬郡飯館村草野字本町	細川亨	1927	1997
0702	福島県田村郡小野町大字夏井字太子堂	阿部兆	1919	1999
0705	福島県石川郡玉川村大字川辺字館	田子国夫	1924	1997
0704	福島県石川郡石川町字当町	丹内春夫	1949	1999
0703	福島県東白川郡鮫川村大字赤坂中野字道少	山本治三郎	1927	1997
0706-2	福島県安達郡大玉村大字大山字三合目	江端義夫	1924	1995
0711-2	福島県南会津郡下郷町大字沢田字前田乙	室井初子	1919	1999
0711-3	福島県南会津郡下郷町大字栄富字下毛平甲	室井初子	1924	1999
0801	茨城県北茨城市大津町	黒澤利康	1924	2000
0802	茨城県多賀郡十王町大字友部	大友寿 調査当時80代		1999
0804	茨城県那珂郡美和村大字高部	大森良太郎	1925	1997

0805	茨城県東茨城郡桂村阿波山	三村敏男	1919	1997
0803	茨城県那珂郡東海村大字村松	塙勝美	1927	1997
0806	茨城県西茨城郡岩瀬町大字友部	安達徹	1934	1999
0807	茨城県真壁郡大和村大曾根	小川精道	1930	1997
0808	茨城県東茨城郡茨城町木部	野口邦夫	1925	1999
0809	茨城県鹿島郡旭村大字勝下	飛田寿	1946	1997
0810	茨城県東茨城郡小川町宮田	立村よし枝	1927	2000
0811-1	茨城県鹿島郡大洋村	江端義夫	1912	1995
0811-2	茨城県鹿島郡大洋村	江端義夫	1915	1995
0811-3	茨城県鹿島郡大洋村	江端義夫	1918	1995
0812	茨城県鹿島郡波崎町	佐藤新司	1929	1999
0901-1	栃木県那須郡那須町寺子丙	橋本巖	1930	1996
0901-2	栃木県那須郡那須町芦野	那須町教育	1927	1997
0901-3	栃木県那須郡那須町湯本	阿久津勉	1932	1997
0902	栃木県那須郡湯津上村湯津上	佐藤充	1929	1997
0908	栃木県今市市森友	半田勇	不明	1999
0903	栃木県那須郡烏山町	西原トミ		2001
0907-2	栃木県河内郡河内町中岡本	野上直子	1932	1999
0907-1	栃木県河内郡河内町下田原	加藤吉三	1926	2000
0907-4	栃木県河内郡河内町大字古田	藤井伸一	不明	2000
0907-3	栃木県河内郡河内町大字逆面	藤井伸一	調査当時65/9	2000
0906-1	栃木県塩谷郡高根沢町桑窪	斎藤久子	1921	1997
0906-2	栃木県塩谷郡高根沢町桑窪	斎藤久子	1923	1997
0909	栃木県宇都宮市篠井町	増山孝之	1939	2000
0904	栃木県芳賀郡茂木町小山	河原道男	1938	1999
0912-1	栃木県上都賀郡西方町大字元	江端義夫	1929	1996
0905	栃木県芳賀郡益子町益子	山口孟	1934	1997
0913	栃木県安蘇郡田沼町大字田沼	片柳茂	1919	1997
0911	栃木県下都賀郡大平町榎本	猿山幸子	1949	1999
0910	栃木県芳賀郡二宮町大字下大曾	柴山宮子	1920	1999
0912-2	栃木県上都賀郡西方町大字元	江端義夫	1935	1996
1007	群馬県利根郡川場村大字天神	宮内たみ	1924	2000
1009	群馬県吾妻郡草津町大字草津	宮原泰三	1935	1999
1008	群馬県吾妻郡高山村尻高	松井正八	1924	2000
1006	群馬県勢多郡赤城村津久田	須田波平	1929	1999
1004	群馬県勢多郡東村大字座間	高草木広司	1938	1997
1005	群馬県勢多郡富士見村田島	鈴木清茂	1929	1997
1010-1	群馬県群馬郡倉淵村大字権田	江端義夫	1915	1996
1011	群馬県群馬郡箕郷町大字西明屋	大塚實	1958	2000
1003	群馬県吾妻郡東村大字岡崎	横田芳衛	1926	1997
1002	群馬県新田郡新田町市野井	小宮俊久	不明	1999
1001	群馬県邑楽郡明和村大字中谷	不明	1921	1997
1013	群馬県甘楽郡南牧村大字羽沢	市川文三郎	1903	1999
1010-2	群馬県群馬郡倉淵村大字川浦	江端義夫	1924	1996
1012	群馬県多野郡万場町麻生	新井正治	1930	2000
1108	埼玉県児玉郡美里町	桜井穂積	不明	2000
1109	埼玉県秩父郡皆野町大字国神	橋本賢伸	1914	2000
1107	埼玉県秩父郡東秩父村安戸	浅見雄一	1934	1997
1106-1	埼玉県比企郡玉川村玉川	江端義夫	1917	1996
1105	埼玉県北埼玉郡川里村大字新井	藤村和幸	1919	1997
1101	埼玉県北葛飾郡杉戸町倉松	斎藤浩太郎	1930	1999

1110	埼玉県秩父郡荒川村鷺川	二ノ宮完二	1935	1997
1104	埼玉県比企郡川島町大字三保谷宿	大野恵司	1950	2000
1103	埼玉県入間郡三芳町大字藤久保	松本仲治	1928	1999
1102	埼玉県吉川市大字小松川	吉川市教育	1923	1999
1106-2	埼玉県比企郡玉川村五明	江端義夫	1920	1996
1106-3	埼玉県比企郡玉川村字玉川	江端義夫	1913	1996
1106-4	埼玉県比企郡玉川村玉川	江端義夫	1928	1996
1106-5	埼玉県比企郡玉川村字玉川	江端義夫	1927	1996
1106-6	埼玉県比企郡玉川村玉川	江端義夫	1916	1996
1106-7	埼玉県比企郡玉川村大字玉川	江端義夫	1918	1996
1106-8	埼玉県比企郡玉川村玉川	江端義夫	1913	1996
1203	千葉県香取郡下総町猿山	江尻和正	1924	1999
1201	千葉県香取郡小見川町小見川	増田利夫	1914	1997
1202	千葉県香取郡山田町仁良	安原寿和	1926	1999
1205	千葉県長生郡長南町今泉	志関さちこ	1927	1999
1204-1	千葉県長生郡長生村字小泉	江端義夫	1920	1996
1206	千葉県夷隅郡御宿町須賀	御宿町教育 不明		1997
1207	千葉県安房郡三芳村山名	樋口正規	1921	1997
1208	千葉県安房郡千倉町瀬戸	千倉町教育 不明		1999
1204-2	千葉県長生郡長生村字小泉	江端義夫	1926	1996
1301	東京都台東区浅草	渋澤克己		1999
1306	東京都西多摩郡檜原村	江端義夫	1926	1996
1305	東京都西多摩郡瑞穂町大字箱根ヶ崎	村山美春		1999
1303	東京都調布市深大寺南町	調布市教育	1927	1999
1307	東京都利島村	前田清一	1929	1997
1302	東京都杉並区高円寺北	大河原章雄	1908	2000
1304	東京都立川市西砂町	宮崎光一		1999
1404	神奈川県津久井郡相模湖町与瀬	中里利夫	1916	1997
1406	神奈川県津久井郡津久井町青山	津久井町教	1932	1999
1407-1	神奈川県愛甲郡清川村煤ヶ谷	江端義夫	1915	1996
1403-1	神奈川県海老名市社家	川村志保	1951	1999
1403-2	神奈川県海老名市今里	関口貴子	1937	2000
1410	神奈川県南足柄市和田河原	渡辺治美	1927	2000
1408	神奈川県足柄上郡松田町松田惣領	矢野康雄	1928	1997
1405	神奈川県津久井郡藤野町吉野	吉野甫	1921	1997
1411	神奈川県足柄下郡湯河原町福浦	湯河原町教	1917	1999
1402	神奈川県逗子市小坪	草柳庄一	1922	2000
1401	神奈川県横須賀市上町	大内順子	1934	2000
1407-2	神奈川県愛甲郡清川村煤ヶ谷	江端義夫	1918	1996
1407-3	神奈川県愛甲郡清川村	江端義夫	1916	1996
1407-4	神奈川県愛甲郡清川村煤ヶ谷	江端義夫	1921	1996
1409	神奈川県足柄上郡大井町金子	大井町教育	1919	1999
1501	新潟県岩船郡関川村大字蛇喰	安久昭男	1917	1997
1503	新潟県中蒲原郡村松町大字下大蒲原	桐生俊和	1922	2000
1502-2	新潟県東蒲原郡上川村大字広谷甲	長谷川昭平	1920	1997
1502-1	新潟県東蒲原郡上川村大字豊川甲	長谷川昭平	1912	1997
1502-3	新潟県東蒲原郡上川村大字豊川甲	長谷川昭平	1921	1997
1506	新潟県三島郡寺泊町	八重樫由美	1973	1999
1507-1	新潟県刈羽郡刈羽村大字井岡	江端義夫	1919	1996

1504	新潟県北魚沼郡守門村大字西名	酒井良一	1925	1997
1505	新潟県北魚沼郡広神村大字中家	桜井清博	1925	2000
1507-2	新潟県刈羽郡刈羽村大字割町新田	江端義夫	1927	1996
1509	新潟県東頸城郡大島村大字菖蒲	飯田義郎	1922	1997
1510	新潟県東頸城郡松之山町橋詰	村山悦夫	1931	2000
1511	新潟県中魚沼郡中里村貝野戊	南雲昭治	1931	1997
1508	新潟県中頸城郡柿崎町芋島	玉井秀一	1932	2000
1610	富山県西砺波郡福岡町沢川	日和祐樹	1917	1997
1609	富山県小矢部市浅地	橋本良太	1916	1999
1608	富山県西礪波郡福光町西町	定村武雄	1926	1999
1605-2	富山県婦負郡山田村湯	江端義夫	1925	1996
1606-2	富山県東砺波郡井波町院瀬見	前川正夫	1925	2000
1606-1	富山県東砺波郡井波町谷	前川正夫	1921	2000
1605-1	富山県婦負郡山田村湯	江端義夫	1922	1996
1604	富山県中新川郡立山町泉	水野元雄	1930	2000
1602	富山県下新川郡入善町小摺戸	杉沢禎子	1948	2000
1601	富山県下新川郡朝日町東草野	金森喜一	1920	1997
1603	富山県下新川郡宇奈月町	宇奈月町教	1914	1999
1607	富山県東砺波郡城端町大工町	大平奈央子	1944	
1701	石川県珠洲市野々江町	寺井一也	1948	2000
1702	石川県鳳至郡能都町真脇	八幡美雪	当時41歳	2000
1703-1	石川県河北郡高松町字高松	丹羽又平	1928	1996
1703-2	石川県河北郡高松町字高松	丹羽又平	1928	1996
1703-3	石川県河北郡高松町字高松	丹羽又平	1926	1996
1703-4	石川県河北郡高松町字高松	丹羽又平	1929	1996
1703-5	石川県河北郡高松町字高松	丹羽又平	1926	1996
1704	石川県河北郡津幡町川尻	洞庭由美子	1915	1999
1705	石川県松任市米永町	小中和也	1928	1999
1706	石川県能美郡辰口町徳山	山田省祖	1926	1999
1707	石川県石川郡鳥越村字神子清水	江端義夫	1929	1996
1708-1	石川県石川郡吉野谷村下吉野地区	吉野谷村教育委員会		1997
1708-2	石川県石川郡吉野谷村市原地区	吉野谷村教育委員会		1997
1708-3	石川県石川郡吉野谷村木滑地区	吉野谷村教育委員会		1997
1708-4	石川県石川郡吉野谷村中宮地区	吉野谷村教育委員会		1997
1709	石川県石川郡尾口村字尾添	林源常	1925	1997
1710	石川県江沼郡山中町中田町	家田穰一	1942	1999
1803	福井県坂井郡三国町黒目	天井和峰	1929	1999
1801	福井県坂井郡金津町櫛	宗石健一	1958	2000
1802	福井県坂井郡坂井町下新庄	辻恵志	1928	1997
1804	福井県福井市下江守町	坂手一成(表)	1916	2000
1806-1	福井県丹生郡宮崎村大字小曾原	江端義夫	1923	1996
1806-2	福井県丹生郡宮崎村八田	江端義夫	1922	1996
1807	福井県南条郡河野村河野	玉村ひろ美	1950	1997
1805	福井県今立郡池田町魚見	堀口修一	1928	1997
1808	福井県遠敷郡名田庄村中	粟谷行男	不明	1997
1903	山梨県北巨摩郡大泉村西井出	中澤徹也	1926	1997
1905	山梨県北巨摩郡白州町台ヶ原	杉本充	1932	1999
1904	山梨県北巨摩郡明野村上手	江端義夫	1918	1996
1901-1	山梨県北都留郡小菅村	田中祀計	1918	1997

1901-2	山梨県北都留郡小菅村	守重洋作	1909	1997
1902	山梨県東山梨郡大和村日影	天野勝博	1917	1997
1906	山梨県中巨摩郡檜形町下市之瀬	杉山人歳	1915	1999/2000
1907	山梨県東八代郡豊富村大鳥居	岡野秀典	1928	1997
1908	山梨県東八代郡芦川村鶯宿	古屋利文	1921	1999
1909	山梨県西八代郡下部町常葉	馬場たき	1930	2000
1910	山梨県南巨摩郡南部町内船	森田一	1918	1999
2002	長野県北安曇郡小谷村北雨中	元村なか(手)	1927	1997
2003	長野県上水内郡鬼無里村大字鬼無里	北沢正則	1936	2000
2004	長野県更埴市大字森南殿入	堀内美和	1919-1930	2000
2005	長野県東筑摩郡四賀村板場	江端義夫	1922	1996
2007	長野県小県郡和田村	遠藤八郎	1918	1997
2006	長野県北佐久郡望月町布施	土屋宗雄		1999
2013	長野県木曾郡王滝村	大家幸雄	1933	2000
2010	長野県木曾郡木祖村藪原	相渡良好	1926	1997
2008	長野県上伊那郡辰野町	三浦孝美	1950	1999
2009	長野県上伊那郡長谷村大字溝口および市野	小松正人	不明	1997
2011	長野県上伊那郡飯島町七久保	丸山浩隆	1937	1999/2000
2012	長野県下伊那郡高森町下市田	尾畑智勇	1937	1999
2001	長野県下水内郡栄村大字堺	斉藤文成	1958	1999
2101	岐阜県吉城郡神岡町高原町	鈴木幹宏	1915	1999
2102	岐阜県大野郡高根村日和田	遠藤厚志	1939	1997
2109	岐阜県本巣郡根尾村水鳥	所美千敏	1916	1999/2000
2108-1	岐阜県郡上郡八幡町	高橋教雄	不明	1999
2108-2	岐阜県郡上郡八幡町	八幡町役場	不明	1999
2107-1	岐阜県郡上郡和良村上京	江端義夫	1912	1996
2103	岐阜県加茂郡東白川村	田口博	不明	1997
2110	岐阜県不破郡垂井町平尾	渡辺隆	1924	1999
2106	岐阜県武儀郡武儀町下之保	山岡透	1925	1999
2105	岐阜県可児郡御嵩町中切	佐賀松彦	1905	1999/2000
2104	岐阜県恵那郡串原村	三宅勝彦	1949	1997
2107-2	岐阜県郡上郡和良村宮地	江端義夫	1947	1996
2211	静岡県磐田郡佐久間町佐久間	森田俊和	1919	2000
2210	静岡県磐田郡龍山村戸倉	鈴木公廣	1937	1997
2209-1	静岡県磐田郡豊岡村字新開	江端義夫	1918	1996
2212-1	静岡県引佐郡三ヶ日町都筑	名倉三郎	1925	1997
2212-2	静岡県引佐郡三ヶ日町都筑	久米偉夫	1925	1997
2213	静岡県湖西市吉美	湖西市教育	不明	1999
2206	静岡県榛原郡中川根町下長尾	藤田幸男	1927	2000
2205	静岡県志太郡岡部町	藪崎悦男	調査当時65歳	1999
2207	静岡県小笠郡菊川町堀之内	後藤一日	1925	1999
2208	静岡県榛原郡御前崎町御前崎	植田一	1953	1997
2204	静岡県賀茂郡賀茂村安良里	村松敦	1927	1997
2203	静岡県賀茂郡松崎町岩科南側	田口宣	1927	1999
2202-2	静岡県賀茂郡東伊豆町稲取	鈴木正彦	1926	1999
2202-1	静岡県賀茂郡東伊豆町稲取	山口博	1925	2000
2209-2	静岡県磐田郡豊岡村字新開	江端義夫	1922	1996
2201	静岡県駿東郡小山町中日向	矢後智夫	1910	1997
2314	愛知県葉栗郡木曾川町大字玉ノ井字新屋敷	岩田衛子	不明	1999

2313	愛知県春日井市廻間町	伊藤浩	1916	1999
2317	愛知県海部郡立田村大字雀ヶ森字郷中	深田久美子	1932	1997
2316	愛知県海部郡佐屋町須依須賀割	吉田トキ子	1926	2000
2315	愛知県海部郡飛鳥村大宝	成田安夫	1930	1997
2312-1	愛知県知多郡南知多町大字内海字北向	中村祥	1931	1997
2312-2	愛知県知多郡南知多町大字豊浜字六面	澤田武男	1926	1997
2306	愛知県東加茂郡足助町中之御所植田	成瀬常雄	1921	1999/2000
2302	愛知県北設楽郡津具村字見出	伊藤清子	1932	1997
2301	愛知県北設楽郡豊根村大字下黒川字蕨平	村松稔	1965	1997
2307	愛知県東加茂郡下山村大字小松町字由ヶ入	加藤東	1928	1997
2304	愛知県北設楽郡設楽町大字西納庫字岡田浜	金田喜兵衛	1955	2000
2303	愛知県北設楽郡東栄町下田野中	東栄町教育	1937	2000
2305-1	愛知県南設楽郡作手村清岳	江端義夫	1910	1996
2311	愛知県安城市井杭山町家下	石川則子	1928	2000
2308	愛知県額田郡額田町大字牧平字大門	宇佐美正子	1926	1999
2310	愛知県渥美郡赤羽根町大字越戸字中嶋	鈴木隆広	1926	2000
2305-2	愛知県南設楽郡作手村中河内字広畑	江端義夫	1914	1996
2305-3	愛知県南設楽郡作手村大字中河内井戸向	江端義夫	1913	1996
2309	愛知県豊橋市杉山町字東谷	寺田博隆	1930	2000
2401	三重県員弁郡北勢町大字瀬木	伊藤宗幸	1936	1997
2402	三重県桑名市新町	伊藤延夫	1946	1999
2404	三重県阿山郡伊賀町大字柘植町	余野共子	1927	2000
2403	三重県亀山市西丸町	亀山隆	不明	2000
2405	三重県安芸郡美里村	谷口竜二郎	調査当時50代	1997
2406	三重県津市大里窪田町	園田純子	1913	2000
2407-1	三重県一志郡嬉野町下之庄	和氣清章	1928	1999
2407-2	三重県一志郡嬉野町下之庄	和氣清章	1926	1999
2407-3	三重県一志郡嬉野町大字一志	和氣清章	1925	1999
2408-3	三重県一志郡美杉村八知	藤田欽哉	1920	1997
2408-1	三重県一志郡美杉村八知	山中吉明	1915	1997
2408-2	三重県一志郡美杉村八知	登知貞	1929	1997
2409-1	三重県多気郡勢和村大字朝柄	江端義夫	1937	1996
2409-2	三重県多気郡勢和村大字片野	江端義夫	1930	1996
2409-3	三重県多気郡勢和村大字丹正	江端義夫	1931	1996
2409-4	三重県多気郡勢和村大字波多瀬	江端義夫	1928	1996
2412	三重県多気郡宮川村大字神滝	山下晃	1926	1997
2411	三重県度会郡大内山村	中井求	1920?	1997
2410	三重県度会郡南島町大方竈	浅井正道	1929	1999
2413	三重県南牟婁郡御浜町阿田和	泉八郎	1906	2000
2414-1	三重県南牟婁郡鷺殿村	大野草介	1917	1997
2414-2	三重県南牟婁郡鷺殿村	大野草介	1923	1997
2512-1	滋賀県高島郡朽木村大字市場	江端義夫	1921	1996
2512-2	滋賀県高島郡朽木村市場	江端義夫	1922	1996
2512-3	滋賀県高島郡朽木村大字市場	江端義夫	1928	1996
2511	滋賀県高島郡高島町大字勝野	横田三千太	1920	2000
2513	滋賀県高島郡マキノ町牧野	青谷恭一	1923	1997
2509	滋賀県草津市木川町	生涯学習課	1946/1916	2000
2508	滋賀県野洲郡中主町	吉田芳行	1955	1999
2510	滋賀県甲賀郡信楽町大字長野	奥田利明	不明	1997
2507	滋賀県蒲生郡竜王町大字鏡	小西實	1924	1997
2506	滋賀県甲賀郡水口町宮ノ前	森井優香里	1929	1999
2505	滋賀県甲賀郡土山町北土山	桑田美佐登	1917	1997
2504	滋賀県犬上郡多賀町藤瀬	小泉周一	1933	1997

2501	滋賀県伊香郡高月町井口	高橋正泉	調査当時65	1999
2502-1	滋賀県坂田郡伊吹町上坂並	高橋順之	1967	1997
2502-2	滋賀県坂田郡伊吹町上坂並	高橋順之	1953	1997
2503	滋賀県坂田郡米原町番場	酒井美実	1912	2000
2602	京都府竹野郡丹後町間人	東要助	1911	1997
2601	京都府与謝郡伊根町字蒲入	泉本明	1933	1999
2604	京都府天田郡三和町字芦洲	三和町教育	1934	1999
2603	京都府船井郡和知町字下乙見小字木戸本	堀郁太郎	1922	1997
2605	京都府船井郡園部町栄町	辻健二郎	1929	1997
2606-1	京都府相楽郡南山城村大字田山字堂山	江端義夫	1912	1996
2606-2	京都府相楽郡南山城村大字北大河原北垣内	江端義夫	1915	1996
2606-3	京都府相楽郡南山城村田山字小本出	江端義夫	1922	1996
2701	大阪府豊能郡豊能町余野	小嶋均	1932	1997
2703	大阪府池田市城南	田上雅則	不明	1999
2702	大阪府茨木市真砂	宮里健三	1925	2000
2704	大阪府大東市卸供田	平松汎之	1940	1999
2705	大阪府富田林市富田林町	濱野啓一	1931	1999
2707-2	大阪府河内長野市加賀田	河内長野市	1925	2000
2707-1	大阪府河内長野市上田町	竹鼻康次	1940	2000
2712	大阪府泉南郡岬町淡輪	川村治雄	1941	1997
2711	大阪府阪南市自然田	阪南市教育	1960	2000
2708	大阪府泉南郡熊取町野田	大野廣介	1931	1997
2706-1	大阪府南河内郡千早赤阪村大字森屋	江端義夫	1915	1996
2706-2	大阪府南河内郡千早赤阪村大字森屋	江端義夫	1921	1996
2706-3	大阪府南河内郡千早赤阪村大字森屋	江端義夫	1922	1996
2709	大阪府泉南郡田尻町大字吉見	谷口穎璋	1918	1997
2710	大阪府泉南市幡代	向井俊生	1910	1999
2804-1	兵庫県朝来郡生野町円山	江端義夫	1932	1996
2804-2	兵庫県朝来郡生野町円山	江端義夫	1925	1996
2801-1	兵庫県多紀郡篠山町大野	前川澄夫	1906	1996
2801-2	兵庫県多紀郡篠山町日置	篠山町教育	1927	1997
2801-3	兵庫県多紀郡篠山町小立	貫井三男	1934	1997
2806	兵庫県出石郡但東町	中井良興	不明	1997
2805	兵庫県養父郡養父町広谷	藤原弘幸	1916	1997
2807	兵庫県美方郡温泉町田中	馬場正男	1921	1997
2808	兵庫県宍粟郡波賀町安賀	宮田隆広	不明	1997
2810	兵庫県赤穂郡上郡町西野山	丸山一馬	1932	1997
2802	兵庫県多紀郡今田町市原	貫井三男	1911	1997
2803	兵庫県加古郡稲美町加古	本岡一郎	1929	1999
2809	兵庫県佐用郡佐用町口金近	田邊博	1919	2000
2905-1	奈良県高市郡明日香村字岡	江端義夫	1912	1996
2905-2	奈良県高市郡明日香村野口	江端義夫	1925	1996
2901	奈良県山辺郡山添村大字広瀬	今本俊二	1956	1997
2902	奈良県宇陀郡室生村大字向瀬	小谷耕平	1927	1997
2903-1	奈良県宇陀郡御杖村	御杖村教育	不明	1997
2903-2	奈良県宇陀郡御杖村	御杖村教育	不明	1997
2909	奈良県吉野郡十津川村大字湯之原	大野壽男	1912	1997
2904	奈良県宇陀郡榛原町母里	西田俊也	1905	2000
2910	奈良県吉野郡下北山村浦向	田ノ下美津代	1901	1999

2908	奈良県吉野郡西吉野村平沼田	八幡甚蔵	1938	1999
2906	奈良県吉野郡下市町立石	井片克司	1940	1999
2907	奈良県五條市今井	五條市教育	1934	2001
3007-1	和歌山県日高郡南部川村大字谷口	江端義夫	1920	1996
3007-2	和歌山県日高郡南部川村大字谷口	江端義夫	1922	1996
3014	和歌山県東牟婁郡北山村下尾井	小西出	1933	1997
3011	和歌山県西牟婁郡串本町串本	浪昭三	1902	1997
3008	和歌山県日高郡龍神村福井	田ノ岡君男	1929	1997
3006	和歌山県日高郡中津村高津尾	林信輝	1933他	1997
3002	和歌山県那賀郡打田町北勢田	貴多橋一仁	1918	1997
3009	和歌山県西牟婁郡中辺路町	小森修	不明	1999
3012	和歌山県東牟婁郡古座川町高池	根木直温	1914	1999
3005	和歌山県日高郡由良町	岩崎芳幸	調査当時70/8	1999
3003	和歌山県伊都郡かつらぎ町佐野	木村佳和	1932	2000
3004	和歌山県有田郡清水町久野原	二沢久雄	1935	2000
3010	和歌山県西牟婁郡白浜町堅田	箱嶋岩夫	1920	1999
3001	和歌山県那賀郡粉河町粉河	稲垣千香	1965	1999
3013	和歌山県新宮市橋本	前岡克弥	1954	不明
3101-1	鳥取県岩美郡福部村高江	江端義夫	1919	1996
3101-2	鳥取県岩美郡福部村大字八重原	江端義夫	1924	1996
3102	鳥取県岩美郡国府町高岡	津川ひとみ	1956	2000
3105	鳥取県八頭郡若桜町若桜	岡崎正雄	1932	1997
3103	鳥取県八頭郡郡家町郡家	中川義隆	1917	1997
3106	鳥取県八頭郡佐治村大字古市	中島嘉吉	1923	1997
3109	鳥取県東伯郡東伯町三保	田中知子	1948	1997
3111	鳥取県西伯郡日吉津村富吉	高森彰	1925	1997
3107	鳥取県東伯郡三朝町西小鹿	石原伸二	不明	1999
3110	鳥取県西伯郡大山町所子	伊勢田洪	1921	2000
3108	鳥取県東伯郡関舎町堀	松之舎文雄	1926	1999
3104	鳥取県八頭郡八東町北山	西山忠実	1921	1999
3204-1	島根県飯石郡吉田村大字吉田村字川原町	江端義夫	1923	1996
3204-2	島根県飯石郡吉田村大字吉田村字川原町	江端義夫	1927	1996
3205	島根県出雲市上塩冶町	今岡清	1911	2000
3201	島根県隠岐郡布施村大字布施	升崎広次	1926	1997
3202	島根県八束郡八雲村大字東若坂	山根邦男	1912	1997
3210-1	島根県美濃郡匹見町大字紙祖	栗田美文	1916	2000
3210-2	島根県美濃郡匹見町大字紙祖	栗田美文	1919	2000
3206	島根県簸川郡佐田町	安食照雄	不明	2000
3207	島根県邑智郡石見町大字日貫	山崎武	1909	1999
3203	島根県仁多郡横田町大字横田	永濱順子	1919	1999
3208-2	島根県那賀郡金城町大字宇津井	遠藤正俊	不明	1999
3208-1	島根県那賀郡金城町大字七条	浅野克巳	1929	2000
3211	島根県鹿足郡日原町大字日原	中井将胤	1931	1999
3209	島根県浜田市長沢町	花田俊雄	1917	2001
3304	岡山県真庭郡八束村大字下見	江端義夫	1915	1996
3301	岡山県英田郡西粟倉村大字坂根	内藤善晴	1967	1997
3307	岡山県都窪郡山手村西郡	守安眞之	1926	1997
3306	岡山県御津郡加茂川町上田東	岸本久夫	1931	1999
3302	岡山県備前市西片上	備前市教育	1926	1999

3305	岡山県真庭郡湯原町大字社	伊井玉江	1937	2000
3303	岡山県苫田郡鏡野町河本	小原将步	1927	1999
3308	岡山県川上郡川上町地頭	浅野三郎	1918	2000
3309	岡山県笠岡市七番町	清水友美	1921	2000
3409-1	広島県山県郡筒賀村大字中筒賀字松原	江端義夫	1922	1996
3409-2	広島県山県郡筒賀村上筒賀	江端義夫	1912	1996
3402	広島県双三郡君田村	君田村教育:不明(調査当		1997
3410-1	広島県佐伯郡吉和村	栗栖知代子	1926	1997
3410-2	広島県佐伯郡吉和村	栗栖知代子	1929	1997
3410-3	広島県佐伯郡吉和村	栗栖知代子	1935	1997
3406	広島県佐伯郡沖美町三吉	迫田一行	1915	1997
3404	広島県豊田郡木江町	木江町教育:不明(調査当		1997
3403	広島県世羅郡世羅西町上津田	寺田保人	1930	1999
3412	広島県佐伯郡佐伯町浅原	三田充	1924	1999
3405	広島県豊田郡安浦町大字内海	岡谷ふみ子	1920	1999
3401	広島県比婆郡高野町上湯川	高野町教育:	1936	1999
3408	広島県山県郡芸北町字荒神原	高野文治	1928	2000
3407	広島県山県郡豊平町戸谷	圓山龍溪	1942	2000
3411	広島県佐伯郡湯来町大字多田小字志井	佐々木博好	1926	不明
3508-1	山口県阿武郡旭村明木字下市	江端義夫	1913	1996
3508-2	山口県阿武郡旭村大字明木牛地	江端義夫	1907	1996
3501	山口県大島郡大島町大字西三蒲	田和智博 不明		1997
3505	山口県佐波郡徳地町堀	赤木森	1929	1997
3507	山口県阿武郡福栄村大字福井下	鈴木和夫	1922	1997
3512	山口県豊浦郡豊北町角島	森本長史	1930	1997
3513	山口県豊浦郡菊川町下岡枝	古井忠視	1929	1999
3504	山口県都濃郡鹿野町西河内	増田早苗	1937	1999
3506	山口県阿武郡田万川町江崎	松井勝太郎	1928	2000
3511	山口県吉敷郡阿知須町小古郷西	松岡茂	1919	1999
3510	山口県美祢郡秋芳町大字嘉万	桑原章光	1911	2000
3503	山口県玖河郡美川町	吉原宏昌 不明		1999
3509	山口県大津郡三隅町沢江	三隅町教育:	1933	1999
3502	山口県柳井市大字伊睦	松岡睦彦	1939	2000
3605-1	徳島県麻植郡美郷村字木屋浦	江端義夫	1912	1996
3605-2	徳島県麻植郡美郷村大字木屋浦	江端義夫	1914	1996
3609	徳島県三好郡東祖谷山村字檉尾	竹本正一	1960	1997
3606	徳島県那賀郡上那賀町小浜	加藤雅史	1924	1999
3612	徳島県三好郡山城町	西幸代 不明		1999
3601	徳島県板野郡板野町犬伏字大坪	佐藤貴子	1931	1999
3607	徳島県海部郡穴喰町穴喰	住友久恵	1934	2000
3608	徳島県那賀郡木頭村大字出原字カワシマ	近藤久美子 調査当時70歳		2000
3602	徳島県徳島市国府町観音寺	三宅良明	1936	2000
3603	徳島県阿南市才見町三本松	遠藤績	1937	1999
3611	徳島県三好郡三好町大字屋間	真鍋清春	1935	1999
3604	徳島県阿波郡市場町	長江博子 不明		1999
3610	徳島県三好郡三加茂町中庄	前田安夫	1934	1999
3710-1	香川県三豊郡仁尾町大字仁尾甲	江端義夫	1926	1994
3710-2	香川県三豊郡仁尾町大字仁尾甲	江端義夫	1933	1994
3701	香川県大川郡引田町	安倍順子 不明		1997

3707	香川県仲多度郡多度津町東浜	岡敦憲	1955	1997
3709	香川県仲多度郡琴平町榎井	木村陽子	1957	1997
3705	香川県仲多度郡琴南町勝浦	藤原道広	1931	1999
3703-1	香川県木田郡三木町大字上高岡	石井健一	1932	2000
3703-2	香川県木田郡三木町大字井戸	石井健一	1932	2000
3703-3	香川県木田郡三木町大字井戸	石井健一	1933	2000
3703-4	香川県木田郡三木町大字井戸	石井健一	1935	2000
3703-5	香川県木田郡三木町大字井戸	石井健一	1942	2000
3706	香川県丸亀市金倉町	後藤幸理	1917	2000
3702	香川県大川郡志度町	宮脇かおり	1951	2000
3704	香川県高松市香西南町	太田文佳	1958	2000
3708	香川県善通寺市中村町	石村萩枝	1919	2000
3801-1	愛媛県伊予三島市上柏町	伊予三島市	1922	2000
3801-2	愛媛県伊予三島市寒川町	妻鳥和教	1924	2000
3812-1	愛媛県南宇和郡内海村柏	江端義夫	1924	1996
3812-2	愛媛県南宇和郡内海村柏	江端義夫	1918	1996
3812-3	愛媛県南宇和郡内海村柏	江端義夫	1915	1996
3812-4	愛媛県南宇和郡内海村柏	江端義夫	1920	1996
3803	愛媛県宇摩郡別子山村甲	近藤和豊	1919	1997
3804	愛媛県越智郡岩城村	児島公尊	1929他	1997
3806	愛媛県上浮穴郡面河村若山	菅和繁	1944	1997
3807	愛媛県上浮穴郡柳谷村大字柳井川	稲田稔久	1910	1997
3808	愛媛県伊予郡双海町	赤尾章司	不明	2000
3811	愛媛県北宇和郡津島町岩松甲	梶原和秋	1934	2000
3805	愛媛県越智郡菊間町浜	原正憲	1939	1999
3802	愛媛県宇摩郡土居町蕪崎	山内四郎	調査当時平均	1999
3810	愛媛県八幡浜市五反田	菊池治歳	1916	1999
3809	愛媛県西宇和郡三崎町井野浦	塩崎満雄	不明	2000
3904	高知県高岡郡日高村本郷	江端義夫	1921	1996
3902	高知県香美郡物部村	凡内啓二郎	不明	1997
3907-3	高知県幡多郡十和村広瀬	宗海弘	1941	1997
3907-1	高知県幡多郡十和村小野	蕨川正重	1927	1997
3907-2	高知県幡多郡十和村口大道	竹内清治	1935	1997
3908	高知県幡多郡三原村下長谷	沖本重富	1923	1997
3901	高知県安芸郡東洋町大字野根丙	原田英祐	1946	1999
3903	高知県吾川郡春野町芳原	中山朋之	1929	1999
3906	高知県高岡郡窪川町茂串町	荒川伸雄	不明	1999
3905-1	高知県土佐郡土佐町宮古野	西村将和	1930	2000
3905-2	高知県土佐郡土佐町土居	西村将和	1927	2000
3905-3	高知県土佐郡土佐町地藏寺	西村将和	1926	2000
4002-1	福岡県田川郡赤村大字赤	江端義夫	1917	1996
4002-2	福岡県田川郡赤村大字赤	江端義夫	1921	1996
4002-3	福岡県田川郡赤村大字赤	江端義夫	1913	1996
4002-4	福岡県田川郡赤村大字赤	江端義夫	1926	1996
4002-5	福岡県田川郡赤村大字赤	江端義夫	1921	1996
4001	福岡県宗像郡大島村東区	河辺治	不明	1997
4003	福岡県築上郡新吉富村宇野	久保田賢治	1922	1997
4004	福岡県築上郡大平村	藤井較一	不明	複数年
4005	福岡県朝倉郡小石原村大字鼓	小林辰則	1931	1997
4006	福岡県八女郡矢部村字稲付	斉藤辰喜	1912	1997
4007	福岡県山門郡瀬高町	与田喜之	不明	2000

4008	福岡県柳川市大字恵美須町	木原隆文	1931	1999
4101-1	佐賀県神埼郡背振村広滝	江端義夫	1901	1996
4101-2	佐賀県神埼郡背振村広滝	江端義夫	1908	1996
4103	佐賀県東松浦郡七山村	小形富久美	1956	1997
4104	佐賀県東松浦郡北波多村大字竹有	陣内康光	1921	1997
4105-1	佐賀県伊万里市黒川町塩屋	荒谷義樹	1936	2000
4105-2	佐賀県伊万里市東山代町滝川内	荒谷義樹	1937	2000
4105-3	佐賀県伊万里市東山代町滝川内	荒谷義樹	1939	2000
4105-4	佐賀県伊万里市二里町大里甲	荒谷義樹	1928	2000
4105-5	佐賀県伊万里市東山代町里	荒谷義樹	1937	2000
4106	佐賀県西松浦郡西有田町山谷	空閑尊一	1931	1997
4102	佐賀県佐賀郡富士町大串	富士町教育	1923	2000
4107	佐賀県藤津郡塩田町大字馬場下乙	森敏治・森力	1922	2000
4108	佐賀県藤津郡嬉野町大字下宿乙	大町孝代	1918	1999
4203	長崎県西彼杵郡西海町中浦南郷	江端義夫	1927	1996
4201	長崎県上県郡上対馬町西泊	菅野俱吉	1920	1997
4202	長崎県北松浦郡大島村前手	米村伍則	1924	1997
4206	長崎県西彼杵郡野母崎町野母	井上久男	1933	1997
4205	長崎県北高来郡小長井町井崎名	川野福美	1924	1997
4204	長崎県西彼杵郡西彼町大串郷	石丸賢一	1929	1999
4306-1	熊本県八代郡坂本村田上	江端義夫	1913	1996
4306-2	熊本県八代市大村町	江端義夫	1939	1996
4306-3	熊本県八代郡坂本村大字久多良木	江端義夫	1937	1996
4303	熊本県阿蘇郡西原村大字鳥子	坂田正	1924	1997
4305	熊本県上益城郡清和村郷野原	川口泰介	1909	1997
4301	熊本県玉名郡南関町小原	坂本重義	1915	1999
4302	熊本県鹿本郡植木町	宮崎喜一	不明	2000
4304	熊本県阿蘇郡小国町上田	坂本昭和	1944	1999
4411-1	大分県南海部郡米水津村大字浦代浦	江端義夫	1914	1996
4411-2	大分県南海部郡米水津村大字浦代浦	江端義夫	1924	1996
4404	大分県日田郡前津江村大野	津江治士	不明	1997
4401	大分県東国東郡国見町竹田津	三重野悌次	1922	1997
4407	大分県大野郡千歳村漆生	広瀬靖	1926	1997
4408	大分県南海部郡本匠村井ノ上	本匠村教育	1927	1997
4409	大分県南海部郡直川村大字下直見	橋迫又右衛門	1926	1997
4402	大分県東国東郡国東町大字鶴川	福田克彦	1937	1999
4410	大分県佐伯市中山区	宇目町教育	不明	1999
4405	大分県日田郡中津江村大字栃野	水野英男	1938	2000
4403	大分県下毛郡耶麻溪町大字中畑	野村真	1922	2000
4406	大分県直入郡直入町大字長湯	穴見要明	1925	2000
4507-1	宮崎県西諸県郡須木村大字鳥田町	江端義夫	1928	1996
4507-2	宮崎県西諸県郡須木村大字鳥田町	江端義夫	1923	1996
4503	宮崎県南那珂郡北郷町大字郷源乙	早田秀穂	1938	1997
4502	宮崎県東臼杵郡諸塚村大字七ツ山	甲斐弘昭	1955	1997
4504	宮崎県東臼杵郡西郷村大字田代	池内孝之	1925	1997
4506	宮崎県東臼杵郡椎葉村大字下福良	椎葉高男	1932	1997
4505-1	宮崎県東臼杵郡南郷村大字鬼神野	岩原勲	1912	1997

4505-2	宮崎県東臼杵郡南郷村大字鬼神野	土田芳美	1914	1997
4505-3	宮崎県東臼杵郡南郷村上渡川	松田哲雄	1924	1997
4505-4	宮崎県東臼杵郡南郷村水清谷	甲斐正晶	1926	1997
4509	宮崎県宮崎郡清武町大字船引	九平忠義	1928	2000
4508	宮崎県西諸県郡野尻町東麓	平水賢一	1921	1999
4501-2	宮崎県東臼杵郡北浦町大字古江	兒嶋宗次	1923	1999
4501-1	宮崎県東臼杵郡北浦町市振	兒嶋宗次	1925	1999
4510	宮崎県日南市大字平山	的場文明	1931	2000
4608-1	鹿児島県川辺郡知覧町東別府	江端義夫	1929	1996
4608-2	鹿児島県川辺郡知覧町郡	江端義夫	1919	1996
4609	鹿児島県曾於郡輝北町市成	堀切育雄	1936	2000
4604	鹿児島県始良郡吉松町川西	宮越立子	1912	1997
4605	鹿児島県薩摩郡入来町浦之名	満園房子	1909	1997
4610	鹿児島県肝属郡佐多町伊座敷	野村友章	1925	1997
4601-1	鹿児島県薩摩郡里村里	里村教育委	1931	1997
4601-2	鹿児島県薩摩郡里村里	里村教育委	1928	1997
4612	鹿児島県大島郡宇検村宇検	津田義秋	1921	1997
4613	鹿児島県大島郡知名町住吉	平良清義	1917	1997
4614	鹿児島県大島郡与論町麦屋	土持俊秀	1925	1997
4602	鹿児島県阿久根市山下	河北篤司	1935	1999
4606-1	鹿児島県日置郡松元町福山	児之原博寿	1930	1999
4606-2	鹿児島県日置郡松元町春山	別府重成	1923	1999
4603	鹿児島県川内市宮崎町	道川内丁	1931	1999
4607-1	鹿児島県日置郡金峰町尾下	金峰町教育調査当時60代		1999
4607-2	鹿児島県日置郡金峰町尾下	金峰町教育調査当時61代		1999
4611	鹿児島県大島郡住用村西仲間	森田豊範 不明		2000
4701-1	沖縄県国頭郡国頭村字奥間	江端義夫	1909	1997
4701-2	沖縄県国頭郡国頭村字半地	江端義夫	1918	1997
4701-3	沖縄県国頭郡国頭村字奥間	江端義夫	1918	1997
4701-4	沖縄県国頭郡国頭村字辺土名	江端義夫	1963	1997
4701-5	沖縄県国頭郡国頭村字辺土名	江端義夫 不明		1997
4702	沖縄県名護市城	鈴木歩	1929	2000
4703	沖縄県中頭郡中城村字泊	中村弘光	1938	1997

III. あいさつ表現儀礼全国地図資料一覧

本章では、全国 506 地点のデータのうち、質問文の(1)から(3)までの項目について、生のデータを掲載する。ただし、江端の臨地調査に基づく 47 地点については、録音テープとの照合に手間取り、電子化処理を完璧には済ませていないので、ここには載せない。47 地点に空白部分が生じていることを、お断りしなくてはならない。

はじめに、全地点番号を掲げて、北海道の 0101 地点 から沖縄の 4703 地点までのデータであることを紹介している。実際の調査で使用した質問をそのまま、質問文の形で掲げた。たとえば、次のとおりである。

(1) 朝の家族どうしの挨拶

質問文: 朝起きたとき、家族どうしで、どのような挨拶をしますか。年上へと年下へとの言い方に区別がありますか。

(2) 早朝訪問の挨拶

質問文: 朝早く、朝食用の味噌汁の味噌がないことに気づいて、隣の家はその味噌を少し分けて貰いに行くとすれば、どのような挨拶になりますか。

(3) 朝、家を出るときの挨拶

質問文: 朝、家をでかけるとき、玄関先で見送りの家族に向かって、どのような挨拶のことばを言いますか。

以上の三つの質問文についての回答を、全国の地点ごとに、北から南に地点番号を付けて、エクセルに読み込んだのが、標記のデータである。今後、これらの電子化されたデータを使って、言語地図を作っていくことになる。

他方で、大型の白地図も作っているの、ゴム印による手作業の言語地図も同時に作成していくことになる。ゴム印による手作業の地図は、符号の重ね掛けが自在にできるので、多彩で豊富な事象の併存する事実を狭い地点で符号化する際に、極めて有利な方法だと思われる。だから、何回も凡例を作り直して、やっとのことで、満足のできる地図に至りつくという苦労はあるものの、ゴム印地図というものの長所も捨てがたいのである。手作り地図というのは、一種の職人技が必要である。数十年も言語地図ばかりを作り続けてきた筆者にとっては、明瞭な地図を描き出す符号の選択に、いわゆる勘が働くことがある。符号の大きさを組み合わせて、分布の明瞭な言語地図を作り、明晰な言語史を浮かびあがらせたい。何度も作り替えて、分布がはっきりと出る言語地図を作りたいものである。それは、言うまでもなく、言語史がはっきりと描かれた地図のはずである。そのためには、贅沢に何枚も地図を作るという方法をとらずに、一枚の言語地図に、全ての情報を盛り込んで、それで完結という地図が理想である。補注も凡例も全部、一枚の地図の中に書き込まれた地図が良い。書き込みが豊富にあるような手書き地図というのが、望ましい。他方に、機械化が進んで、音声言語地図も、世界中で一般化してきている。しかし、世界は、まだ筆者の地図のように、文という大きな単位の事象を扱う水準には至っていない。今後、技術が向上して、補注も地図から飛び出すようになれば再考しても良いと思う。筆者は、技術よりも高度な学問的営為をこそ、展開させたいと考えている。したがって、今は、欲張らないで、通信依頼実地調査のデータを、三項目に限定して、以下に掲げるにとどめる。

(1) 朝の家族どうしの挨拶

質問文: 朝起きたとき、家族どうして、どのような挨拶をしますか。年上へと年下へとの
言い方に区別がありますか。

0101	0504	0812	1208	1501	2001	2316	2801-1	3001	3503	3906	4502
0102	0505			1502	2002	2317	2801-2	3002	3504	3907-1	4503
0103	0506			1503	2003		2801-3	3003	3505	3907-2	4504
0104	0507	0901-1	1301	1504	2004		2802	3004	3506	3907-3	4505-1
0105	0508	0901-2	1302	1505	2006	2401	2803	3005	3507	3908	4505-2
0106	0509	0901-3	1303	1506	2007	2402	2804-	3006	3509		4505-3
0107	0510	0902	1304	1507-1	2008	2403	2804-	3007-1	3510		4505-4
0108	0511	0903	1305	1507-2	2009	2404	2805	3007-2	3511	4001	4506
0109	0512	0904	1307	1508	2010	2405	2806	3008	3512	4003	4508
0110	0513	0905		1509	2011	2406	2807	3009	3513	4004	4509
0111	0514	0906		1510	2012	2414	2808	3010		4005	4510
0112	0515	0907-1	1401	1511	2013			3011		4006	
0113		0907-2	1402					3012	3601	4007	
0114		0907-3	1403-1			2501		3013	3602	4008	4601-1
	0601	0907-4	1403-2	1601	2101	2502-1		3014	3603		4601-2
	0602	0908	1404	1602	2102	2503			3604		4602
0201	0603	0909	1405	1603	2103	2504			3606	4102	4603
0202	0604	0910	1406	1604	2104	2505		3102	3607	4103	4604
0203	0605	0911	1408	1606-1	2105	2506		3103	3608	4104	4605
0204	0606	0912	1409	1606-2	2106	2507	2809	3104	3609	4105-1	4606-1
0205	0607	0913	1410	1607	2108-1	2508	2810	3105	3610	4105-2	4607-1
0206	0608		1411	1608	2108-2	2509		3106	3611	4105-3	4607-2
0207	0609			1609	2109	2510		3107	3612	4105-4	4609
0208	0610	1001		1610	2110	2511	2901	3108		4105-5	4610
0209	0611	1002				2512	2902	3109		4106	4611
0210-1	0612	1003					2903-1	3110	3701	4107	4612
0210-2	0613	1004		1701	2201		2903-2	3111	3702	4108	4613
	0614	1005		1702	2202-1	2601	2904		3703		4614
	0615	1006		1703-1	2202-2	2602	2905-1		3704		
0301		1007		1704	2203	2603	2905-2	3211	3705	4201	
0302		1008		1705	2204	2604	2906		3706	4202	
0303	0701	1009		1706	2205	2605	2907		3707	4204	4702
0304	0702	1010		1708	2206	2606-1	2908	3301	3708	4205	4703
0305	0703	1011		1709	2207	2606-2	2909	3302	3709	4206	
0306	0704	1012		1710	2208	2606-3	2910	3303			
0307	0705	1013			2210			3305			
0308	0706				2211			3306	3801-1	4301	
	0707			1801	2212	2701		3307	3801-2	4302	
	0708	1101		1802	2213(1,	2702		3308	3802	4303	
0401	0709	1102		1803		2703		3309	3803	4304	
0402	0710	1103		1804					3804	4305	
0403	0711	1104		1805	2301				3805		
0404	0712	1105		1807	2302			3401	3806		
0405	0713	1106		1808	2303			3402	3807	4401	
0406		1107			2304			3403	3808	4402	
0407		1108			2306	2704		3404	3809	4403	
0408	0801	1109-1		1901-1	2307	2705		3405	3810	4404	
0409	0802	1109-2		1901-2	2308	2706-1		3406	3811	4405	
0410	0803	1110		1902	2309	2706-2		3407		4406	
0411	0804			1903	2310	2706-3		3408		4407	
0412-1	0805	1201		1905	2311	2707-1		3410	3901	4408	
0412-2	0806	1202		1906	2312-1	2707-2		3411	3902	4409	
	0807	1203		1907	2312-2	2708		3412	3903	4410	
	0808	1204		1908	2313	2709			3905-1		
0501	0809	1205		1909	2314	2710			3905-2		
0502	0810	1206		1910	2315	2711		3501	3905-3	4501-1	
0503	0811	1207				2712		3502		4501-2	

オハヨーゴザイマス・オハヨー
オハヨー
オハヨー
オハヨー
オハヨーゴザイマス・オハヨー
トーサンオハヨー・オハヨーゴザイマス
オハヨーゴザイマス・オハヨー
オハヨーゴザイマス・オハヨー
オハヨー
オハヨー
オハヨーサン、キョウモイイテンキダノー(夫婦)ホレハヤグマンマクエ(親から子へ)
オハヨーゴザイマス・オハヨー・オハヨーサン
オハヨー

オハヨーゴザイマス。オハヨー。
男:オギダガー/オース/ヤー/オー/ハエナー女:(嫁が姑など年上に対して)オハヨーガザイマス(子供
オハヨーゴザイマス・ハイオハヨー
オハヨーゴザイマス。オハヨー。オハヨーサン。
オハヨーサン(年上)オハヨー(年下)

オハヨー
オハヨー
オハヨー(区別なし)

ケサマタハヤイノー。キノウノシゴトノコツテイルカラ。

大人と子どもの間では、オハヨー(大人)・オハヨーゴザイマス(子ども)のあいさつがあるが、大人同士
オハヨー(区別なし)

オハヨーガンス
オハヨーガンス・オハヨサン・オハヨーゴザリヤンス
オハヨー・オハヨーゴライマス
特にしない

オハヨーゴザイマス・オハヨーサン・オハヨー
オハヨー・ハヤイナー(孫たちへ)
オハヨー(区別なし)
オハヨー

オハヨー
オハヨウ、オハヨウゴザイマス。特別な言葉はないようです。

(年上へ)オハヨーゴザリス(年下へ)オハヨー
オハヨ

オハヨーサン(年上年下の区別なし)

オハヨー・オギダガ
オハヨ
オハヨーサン・オハヨ(年上年下の区別なし)
オハヨーサン・オハヨ(子供)
オハヨー

オハヤンシ(年上)オハヨ(年下)
オハヨー(現在はこう言いますが、30年ほど前まで決まったあいさつはしなかった)
ハヤガタ、ゴド
オハヤンシ、ハヤガッタンシナ(年上)オハヨ、オギダガ(年下)
オハヨー
オハヨー・オハヨーゴザイマス

オハヨー、オハヨーサン(小さい子供に)
オハヨウ(家庭内では区別なし)
オハヨー。メサメタカ。
オハヨ
オハヨ
特にない
年上へオハヨーゴザイマス、年下へオハヨーサン

オキダガア
オハヨー・ハセイナー
オハヨー・オハヨーゴザイマス・オハヨーサン
年上へ、オハヨッスー・オハヨーゴザイマス。年下へ、オハヨー
オハヨー
普通の家で普通の場合は特に定型とてない
目下…オハヨーゴザイマス、目上…オハヨー

オハヨーゴザイマス
オハヨーゴザイマス。ハイ、オハヨー。
オハヨー(区別はない)
年上へ:オハヨーゴザイマス、年下へ:オハヨー
年上へ:オハヨーゴザイマス、年下へ:オハヨー

年上へはオハヨーザイマス * 付け加える事オテンキヨガッタナシ・年下へはオハヨー
年上:オハヨーゴザイマス、年下:オハヨーゴザイヤス(オハヨー)
子「オハヨーゴザイマス」父「アイ、オハヨー」
オハヨーサン
年上 オハヨーゴザイマス 年下 オハヨー・オハヨーサン
オハヨー、ハイオハヨー
オハヨー(注)このようなあいさつ言葉は昭和30年代以前は交わされなかった。他人ならオハヨーとも

年上にはオハヨーゴザイマス。年下にはオハヨー、オハヨーサン
オハヨー
夫:オハヨー、妻:オハヨコザイマス
年下へ:オハヨー、年上へ:オハヨーゴザイマス
オハヨーゴザイマス・オハヨー
オハヨー、オハヨーゴザイマース
オハヨー
年上:オハヨーゴザイマス、年下:オハヨー/ハイ
オハヨーゴザイマス(年上に対し) オハヨー(年下に対し)
オハヨーゴザイマス・オハヨー

オハヨー、ハヤイネー(オソカッタネー)・オハヨーゴザイマス(目上に)

オハヨーゴザイマス(オハヨー)・オハヨー、ハイオハヨウサン
オハヨウー。

オハヨーゴザイマス

オハヨー区別なし

オハヨーゴザイマス、ハイオハヨー

男オハヨー 女オハヨーゴザイマス

オハヨー

オハヨーゴザイマス。オハヨー。オハヨ。

オハヨー/オハヨー

オハヨーゴザイマス、オハヨーサン、オハヨー 老人:オハヨーゴザンス 若者:オハヨース

オハヨー

(下)オハヨー(上)オハヨーゴザイマス

(オハヨー)(オハヨーゴザイマス)

(年上へ)オハヨーゴザイマス(年下へ)オハヨー

オハヨウゴザイマス(目上へ)オハヨウ(目下へ)

オハヨー、オハヨーサン

オハヨー・オハヨウゴザイマス(年下へと年上への区別があります)

年上へオハヨーゴザイマス 年下へオハヨー

現代人は殆ど挨拶はないらしい

オハヨーゴザイマス

オハヨー(年上、年下とも同じ)

オハヨー(上下の区別なし)

オハヨーゴザイマス、オハヨー

オハヨー(子供や孫どうし)オハヨーゴザイマス(嫁が主人の親に言う)それ以外はオハヨー

オハヨー(こども)ハイオハヨー(大人)区別なし

オハヨウコ オハヨーゴザイマス/オハヨウ

オハヨーゴザイマス

オハヨーゴザイマス

(オハヨーガンス/ハイオハヨー)区別あり

(年上へ)オハヨー、ハエーナ、ハヨー、メーサマシタカー、メーサメタカー、オハヨーサン。(年下へ)オ、

オハヨー特別の区別はない

オハヨーゴザイマス

オハヨー(年上へと年下の区別なし)

オハヨー

オハヨーゴザイマス。オハヨー。

オハヨー

オハヨー/オハヨー

オハヨーゴザイマス/オハヨウ

オハヨウゴザイマス/オハヨウガンス/オハヨウゴザンス

オハヨー。オハヨーゴザイマス

オハヨー

オハヨー 家族の場合はそれぞれのしきたりにより挨拶も異なっただと思います。

オハヨーゴザイマス、オハヨー

オハヨー

オハヨーゴザイマス。(年上へ、同年へ)オハヨー。(年下へ)

オハヨーゴザイマス・オハヨー

年上にオハヨーゴザイマス 年下にオハヨー
オハヨー・オハヨーゴザイマス
上 オハヨー 下 オハヨーゴザイマス
オハヨーゴザイマス
オハヨーゴザイマス
オハヨー 区別がない

オハヨーゴザイマス(年上に対して) オハヨー(年下に対して)
年上へ オハヨーゴザイマス 年下へ オハヨー
オハヨー
オハヨー
オハヨー
(年上)オハヨーゴザイマス (年下)オハヨー・ハエージャネーカ
主にオハヨー 時にオハヨーサンとも云う
オハヨー・オハヨーゴザイマス
オハヨー・オハヨーゴザイマス
オハヨー/オハヨー 年上年下の区別なし
(オハヨー/オハヨーゴザイマス)

オハヨーゴザンス

(目上から)オハヨー、オハヨーサン。(目下から)オハヨーゴザイマス(家族間のあいさつの場合、ほとんど区

オハヨーゴザイマス

オハヨー/オハヨーゴザイマス

オハヨー。年上へオハヨーゴザイマス。年下へオハヨー

オハヨー。あります、年上はゴザイマス、がつく

オハヨーゴザンス・オハヨー

オハヨーゴザイマス(年上へ)オハヨー。(年下へ)

オハヨー。オハヨーゴザイマス

「オハヨーゴザイマス」「オハヨー」

年下オハヨー年上オハヨーゴザイマス

オハヨーサン(お早ようさま)

オハヨーゴザイマス

オハヨー(年上へ)オハヨーオキトツタン(年下へ)(起きていたの?)

年長 オハヨー・オハヨーゴザイマス

(年上)オハヨーゴザイマス (年下)オハヨー

(年上)オハヨーゴザイマス (年下)オハヨー

オッキタカイ。ウン

(年上)オハヨーゴザイマス (年下)オハヨー、オハヨーサン

オハヨーサン(年下へ) オハヨーゴザイマス(年上へ)

年上へ オハヨーゴザイマス 年下へ オキタカイ

年上 オハヨーゴザイマス 年下 オハヨー

1,4,5,

年上へ オハヨー 年下へ オハヨー 親の返 ウン 子供の返 オハヨー(昔は言わなかった)

オハヨ、サン

母へ・オハヨサーン 子供へ・オハヨウ

(各設問の左から 下吉野地区、市原地区、木滑地区、中宮地区 の順に記録してあります。) オハ

オハヨー

オハヨー、オハヨーサン

オハヨ

「オハヨー」。年上へと年下へとこの言い方区別なし

オハヨサン・オハヨー

オハヨーサン(嫁へ) オハヨーゴザイマス(娘から) オハヨー(息子)

オワヨー・オハヨー ン・アイ

(年上)ハヤイノー (年下)オハヨー・オハヨーサン

オハヨー・ハイオハヨー

オハヨー・オハヨーゴザンス

年上 オキヤシタケ 年下 オキタカ

区別がある 年上へ オハヨーゴザイマス 年下へ オハヨー

オハヨー

オハヨーゴイス

年上 オハヨーゴザイマス 年下 オハヨー

オハヨーゴイス(年上へ) 又は、ハヤイナーヨ(年上へ) ハヤイナ(年下へ) 又は、ハヤイジャン(年下へ)

年上へ オハヨーゴシタ(ゴイスともいう) 年下へ オハヨー

オハヨー

オハヨー 言い方に区別なし
夫に オメ、オキタカエ オチャニシルダヨ 年下 オハヨー
オハヨー・ハイオハヨー
オハヨーワシタ。
(年上へ)オハヨーゴザイマス (年下へ)オハヨー
オハヨー
オハヨー オハヨー
年上へ オハヨーゴザイマス 年下へ オハヨー
オハヨーゴザイマス・オハヨー
(年下から年上)オハヨーゴザイマス (年上から年下)オハヨー
オハヨー(年下へ) オハヨーゴザイマス(年下、年上両方)
オハヨー(区別なし)

年上へは「お早うございます」 年下へは「お早う」
年上へ オハヨーゴザイマス 年下へ オハヨー
年上へ オハヨーゴザイマス その応答 オハヨー 年下へ オハヨー その応答 オハヨー
オハヨーゴザイマス・オハヨー
オハヨー(年下へ) オハヨーゴザイマス(年上へ)
オハヨー オハヨーサン
年上 オハヨーゴザイマス 年下 オハヨー
(◎以下の言葉は時分では使用しないが昔は郡上郡で使っていたものを中心に記した) オハヨーゴザイ
オハヨー オハヨーゴザイマス
オハヨー(年齢によって若干差がある)

特にしない

オハヨー
オハヨー
オハヨウゴザイマス。ハイ オハヨー
オハヨーゴザイマス・オハヨー
オハヨー
年上～年下へ オハヨー 年下～年上へ オハヨーゴザイマス
挨拶 オハヨーゴザイマス(年下から年上へ 丁寧に) 返事 オハヨー 〈年上から年下へ→省略〉
オハヨー 区別なし
オハヨウ
オハヨウ 区別なし
年上がオハヨー年下オハヨーゴザイマス
家族どうしの挨拶はほとんどしない

年上 オハヨーゴザイマス 年下 オハヨー
オハヨー オハヨー
オハヨウゴザイマス ハイ オハヨー
オハヨー 年上から年下へ
オハヨーゴザイマス オハヨーサン オハヨー
オハヨー(年下へ) オハヨーゴザイマス(年上へ)
オハヨー。オハヨーゴザイマス 区別は特になし
年上 オハヨーゴザイマス 年下 オハヨー
年上 オハヨーゴザイマス 同年以下 オハヨー 幼小の者へは、オハヨーサン
年上 オハヨーゴザイマス 年下 オハヨー
オハヨー 又はオハヨーサン 年上、年下の区別はない
年上の人 オハヨーゴザイマス 年下の人 オハヨー
オハヨー 年上 オハヨーゴザイマス
オハヨーサン オハヨー
オハヨー(上下の区別なし)

主人には→オハヨーゴザイマス 息子(学生時代)→オース 娘→オハヨーサン
オハヨー

オハヨーゴザイマス(年上へ) オハヨー(年下へ)
年上オハヨー 年下オハヨーゴザイマス
オハヨー
年上(オハヨーゴザイマス) 年下(オハヨーサン/オハヨー/ハヤイナー)
オハヨー
オハヨーサン ハー
オハヨー オハヨ オハヨーサン (年齢の区別はない)

オハヨー 夫が妻へ オキタゾー
①甲斐沼オハヨー/オハヨー
オハヨーゴザイマス/オハヨーサン オハヨー/ハイオハヨー
オハヨーゴザイマス/オハヨーまたはオハヨーサン
・オハヨー (年上へ)オハヨーゴザイマス/(年下へ)オハヨー
オハヨーサン オハヨー
オハヨウゴザイマス。オハヨウサン
オハヨーゴザイマス、オハヨーサン、オハヨー
年上へ オハヨーゴザイマス 年下へオハヨーorハイ 若い親子 オハヨー オハヨー
年上 オハヨーサン 年下 オハヨー
オハヨーサン
年上へ オハヨーゴザイマス オハヨーサン

年上、オハヨー 年下、ハヤイナー
ミンナ、オハヨー、ミンナ、ハヤイナー
オハヨー(年下)オハヨーサン(年上)ハヤイナー
年上にオハヨーゴザイマス 年下にオハヨ
オハヨウ、オハヨウサン

(オハヨウサン)主人が妻に(オハヨウサン)妻ー主人(オハヨウゴザイマス)子 父母
目上の者が目下に対してオハヨー、オハヨーサン 目下のものが目上に対してオハヨーゴザイマス、オハヨ
オハヨーサン、オハヨー

オハヨ(-)サン
オハヨー。オハヨーゴザイマス(義理の仲の年上の人に対し)

オハヨーゴザイマス/オハヨーサン
オハヨーサン
ハヤイナー 年上オハヨーサン 年下オー
オハヨーサンデス モーオキタンカーハヤイナー
オハヨーサン オハヨー
オハヨー。(区別なし)
年上から下へオハヨー、オハヨーサン 年下から上へオハヨーサン、オハヨーゴザイマス

オハヨー

(年上、年下共通)オハヨー

(年上へ)オハヨーゴザイマス。(年下へ)オハヨー

オハヨーゴザイマス。オハヨー。

「オハヨー・オハヨーサン」――年上から同輩「オハヨーゴザイマス」――下下カラ

オハヨー。区別なし。

(年上)オハヨーゴザイマス。(年下)オハヨー

以前は家族間で朝の挨拶をすることはなく、これが一般化すると案外正確に発音している。

(年上)オハヨーゴザイマス (年下)オハヨーサン

オハヨーゴザイマス。オハヨー。

年上へはオハヨーゴザイマス、年下へはオハヨー

オハヨー。(年上に対して)早(ハヤ)ノー。(年下に対して)早(ハヤ)イナー。

オハヨーサン

オハヨーゴザイマス。オハヨー。

オハヨーゴザイマス。オハヨー。

オハヨーゴザイマス(年上へ)オハヨー(年下へ)

オハヨーゴザイマス/オハヨーサン

オハヨーサン

オハヨーゴザイマス。オハヨーサン。オハヨー。オハヨ。家庭によって、年齢差によって使い分けがされてい

年上へ・・・(オハヨーサン/オハヨー)。年下へ(ハイ/ハイ、オハヨ)

オハヨー、オハヨーゴザイマス。

年上→オハヨーゴザイマス。オハヨーサン。オハヨー。ハイ。年下→オハヨー。

オハヨー

オハヨー/オハヨーサン

オハヨサン、オハヨ

モーオキタカー/オハヨ、オキタンカ/オハヨーイマオキタヨー

昔使われていたこの地独特の方言は殆んど使われていない様に思います。子ども若者は共通語に近

オハヨー

オハヨーサン、オハヨー、オハヨーゴザイマス

オハヨーゴダ(ザ)イマス、オハヨー、オハヨーサン

オハヨーサン

お早ようございます。年下へお早よう。

オハヨー

オハヨーサン、オース。

オハヨー・オハヨーゴザンス・オハヨーサン

オハヨー

ハヤーナー・オハヨーサン

オハヨー(家に年上はなし)

年上へ ハヨーゴザンス 年下へ ハエーナーイヤ

オハヨー・オハヨーサン

オハヨーゴザイマス・オハヨー

オハヨー

オハヨー

年上へ、オハヨーゴザイマス。年下へ、オハヨー、ヨーネタカネ

オハヨーとオハヨーゴザイマス 区別あり。

オハヨー

(年上へ)オハヨーゴザイマス。(年下へ)オハヨー。

年下へ 男 オハヨー 女 オハヨーサン 年上へ (イ)上述のおゝむがえし (ロ)ウン(近親者へ)

オハヨーゴザンシタ!

家族どうし オハヨー オハヨーゴザイマス 幼児には ○○ちゃん オハヨー

オハヨー・オハヨーゴザイマス

オハヨー、オハヨーゴザイマス、ハイ オハヨー

オハヨー。オハヨーゴザイマス。

年上へ→オハヨーゴザイマス。年下へ→オハヨー。

(ハヨーゴザイマス)(オハヨー)

オハヨウゴザイマス・オハヨウ

オハヨー(年上・年下区別ナシ)

年上へは(オハヨーガンス) 年下へは(オハヨー)

年上へ=オハヨーゴザイマス 年下へ=オハヨー

オハヨーゴザイマス/オハヨー オハヨー/オハヨーゴザイマス

オハヨーガンシタ オハヨーアリマス

オハヨー(区別ナシ)

オハヨー

オハヨウ。オハヨウゴザイマス。オハヨウゴザンシタ。

(年上へ)オハヨーサン (年下へ)オハヨー (嫁の場合)オハヨーゴザイマス

オハヨー

オハヨーゴザイマス(年上) 年寄りなどはオハヨウゴダンス オハヨウゴザリマスなどと言った。オハヨー とくにくべつなし
(オハヨー)(オハヨーゴザイマス) 区別あり
オハヨー 年上の場合オハヨーゴザイマス
オハヨー、(父)オトサンオハヨー(母)オカサンオハヨー 年長者 オヂサンオハヨー オバサンオハヨー
(オハヨー、オハヨーサン、オハヨーゴザンス、オハヨーゴザイマス、オハヨーシタ、オハヨース)
オハヨーゴザイマス。 オハヨーゴザンシタ。
オハヨーゴザイマス(年上へ)/オハヨー(年下へ)

オハヨー(年上、年下、区別なし)
オハヨー(年上 ゴザイマスをつける)
息子 オハヨーサン 母 オハヨー 嫁 オハヨーゴザイマス 母 オハヨー
オハヨーゴザイマス(年上)/オハヨー(年下)
オハヨー(年上) オハヨー(年下)
オハヨー オハヨーサン
オハヨー(家族間では、あまり、言いません。)
年上 オハヨーゴザンス オハヨーゴザンシタ/年下 オハヨー
(子)オハヨー(親) ハイ、オハヨー、オハヨーサン
年上へ オハヨーゴザイマス 年下へ オハヨウ
オハヨーゴザイマス、オハヨー、オハヨーシタ

オハヨー ハヤイノー
オハヨー
オハヨー
オハヨー
区別はなし オハヨーゴザンシタ
オハヨー、オハヨーゴザイマス
「オハヨー」(区別なし)
オハヨー。(年上へ) オハヨー、モー、オキタン(年下へ)
オハヨウ

オハヨー 父親が家族に対する挨拶
オハヨーゴザイマス 上→下 オハヨーサン

オハヨーゴザイマス/オハヨー
オハヨー
オハヨー
オハヨーゴザイマス
オハヨーゴザイマス/オハヨー オハヨーサン
オハヨーサン、オハヨーゴザイマス
・オハヨー(年上から年下) ・オハヨーゴザイマス(年下から年上)
オハヨーゴザンシター 年上へ オハヨー 年下へ
オハヨー、オハヨーサン、オハヨーゴザシタ、ヨーネレタカ

オハヨーゴザイマス、オハヨーサン、オハヨー
オハヨー
オハヨー
オハヨー
オハヨー
オハヨウ

オハヨウ
オハヨー
オハヨー
オハヨー
オハヨ。オハヨーサン。

オハヨーゴザイマス、オハヨー。
オハヨーゴザイマス。○○ちゃんオハヨー。
オハヨーゴザイマス、オハヨー、オーキタカヤ。
オハヨー。オハヨーゴザイマス。
オハヨウ、キョウハサムカロゴタルバイ。オーオハヤカネ、サムカンシレンネー。
オハヨーゴザイマス。
オハヨーアナッツアン。

オハヨーゴザイマス。
オハヨー。オハヨーゴザイマス。ハヨザイマス。
ハヨーナー、オハヨーゴジァーマス。
オハヨー。オハヨーゴザイマス。
オハヨーゴザイマス。オハヨー。
オハヨーゴザイマス、オハヨー。
オハヨーゴザイマス。オハヨー。
オハヨー。
オハヨー。オハヨーゴザイマス。
ハヨーゴザイマス。ハヨー。
オハヨー。

オハヨーゴザイマス。オハヨーサン、
オハヨー。オハヨーゴザイマス。
オハヨー。
オハヨーゴザンス。アーオハヨー。

オハヨーゴザイマス、オハヨウゴザイマス。オハヨウ、又はオハヨウサン。
オハヨーゴザイマス。オハヨー(サン)。
オハヨー。ハイハヨー。
オハヨー。
オハヨー。オハヨーゴザイマス。

オキタカ。オキタカンエ。
オハヨー。
オハヨー。オハヨーゴザイマス。
オハヨー、サビーネー。…オハヨー。

オハヨーゴザイマス。
オハヨー。ハイオハヨー。
オハヨー。オハヨーゴザイマス。
オハヨーゴザイマス。オハヨー。オハヨーサン。ハイオハヨー。

ハヨーオキタネ、ハヨセントオスーナルド。
オハヨー、ハエーヨ、ハエーノー。

オハヨーゴザイマス。
オハヨー。
キョウハエレヒヨリガイゴトアツジャンネ。ウンイイゴトアリヤスル。
オハヨーサン。オハヨー。
殆どしない。
オハヨー。オハヨーゴザイマス。
オハヨー。
オハヨーゴザイマス。オハヨー。
オハヨーゴザイマス。ハイザイマス。オハヨー。
オハヨー。オハヨー。
オハヨー。

オハヨー。
オキヤイモンタン。オキタン。
オハヨー。オハヨウゴザイマス。
オハヨーゴザイマース。オハヨ。

メガオサメヤシタカ。オハヨーゴザイマス。ハイオハヨー。
オハヨー。
オハヨーゴザイマス。オハヨー。
オハヨーゴザイマス。オハヨー。
オハヨー。オハヨー。
オハヨーゴザイマス。オハヨー。

スイカマンキャスイ。スイカマンキャヤウガミンシヨロ。
オハヨウ。オハヨウゴザイマス。
オハヨーサン。

ウキンソーチャン。ウキティチャン。
オハヨー。

(2) 早朝訪問の挨拶

質問文: 朝早く、朝食用の味噌汁の味噌がないことに気づいて、隣の家はその味噌を少し

分けて貰いに行くとすれば、どのような挨拶になりますか。

0101	0504	0812	1208	1501	2001	2316	2801-1	3001	3503	3906	4502
0102	0505			1502	2002	2317	2801-2	3002	3504	3907-1	4503
0103	0506			1503	2003		2801-3	3003	3505	3907-2	4504
0104	0507	0901-1	1301	1504	2004		2802	3004	3506	3907-3	4505-1
0105	0508	0901-2	1302	1505	2006	2401	2803	3005	3507	3908	4505-2
0106	0509	0901-3	1303	1506	2007	2402	2804-1	3006	3509		4505-3
0107	0510	0902	1304	1507-1	2008	2403	2804-2	3007-1	3510		4505-4
0108	0511	0903	1305	1507-2	2009	2404	2805	3007-2	3511	4001	4506
0109	0512	0904	1307	1508	2010	2405	2806	3008	3512	4003	4508
0110	0513	0905		1509	2011	2406	2807	3009	3513	4004	4509
0111	0514	0906		1510	2012	2414	2808	3010		4005	4510
0112	0515	0907-1	1401	1511	2013			3011		4006	
0113		0907-2	1402					3012	3601	4007	
0114		0907-3	1403-1					3013	3602	4008	4601-1
	0601	0907-4	1403-2	1601	2101	2501		3014	3603		4601-2
	0602	0908	1404	1602	2102	2502-1,2			3604		4602
0201	0603	0909	1405	1603	2103	2503			3606	4102	4603
0202	0604	0910	1406	1604	2104	2504		3102	3607	4103	4604
0203	0605	0911	1408	1606-1	2105	2505		3103	3608	4104	4605
0204	0606	0912	1409	1606-2	2106	2506	2809	3104	3609	4105-1	4606-1
0205	0607	0913	1410	1607	2108-1	2507	2810	3105	3610	4105-2	4607-1
0206	0608		1411	1608	2108-2	2508		3106	3611	4105-3	4607-2
0207	0609			1609	2109	2509		3107	3612	4105-4	4609
0208	0610	1001		1610	2110	2511	2901	3108		4105-5	4610
0209	0611	1002				2512	2902	3109		4106	4611
0210-1	0612	1003					2903-1	3110	3701	4107	4612
0210-2	0613	1004	1701	2201			2903-2	3111	3702	4108	4613
	0614	1005	1702	2202-1	2601		2904		3703		4614
	0615	1006	1703-1,2,3	2202-2	2602		2905-1		3704		
0301		1007	1704	2203	2603		2905-2	3211	3705	4201	
0302		1008	1705	2204	2604		2906		3706	4202	
0303	0701	1009	1706	2205	2605		2907		3707	4204	4702
0304	0702	1010	1708	2206	2606-1		2908	3301	3708	4205	4703
0305	0703	1011	1709	2207	2606-2		2909	3302	3709	4206	
0306	0704	1012	1710	2208	2606-3		2910	3303			
0307	0705	1013		2210				3305			
0308	0706			2211				3306	3801-1	4301	
	0707		1801	2212		2701		3307	3801-2	4302	
	0708	1101	1802	2213(1,2,3)		2702		3308	3802	4303	
0401	0709	1102	1803			2703		3309	3803	4304	
0402	0710	1103	1804						3804	4305	
0403	0711	1104	1805	2301					3805		
0404	0712	1105	1807	2302				3401	3806		
0405	0713	1106	1808	2303				3402	3807	4401	
0406		1107		2304				3403	3808	4402	
0407		1108		2306		2704		3404	3809	4403	
0408	0801	1109-1	1901-1	2307		2705		3405	3810	4404	
0409	0802	1109-2	1901-2	2308		2706-1		3406	3811	4405	
0410	0803	1110	1902	2309		2706-2		3407		4406	
0411	0804		1903	2310		2706-3		3408		4407	
0412-1	0805	1201	1905	2311		2707-1		3410	3901	4408	
0412-2	0806	1202	1906	2312-1		2707-2		3411	3902	4409	
	0807	1203	1907	2312-2		2708		3412	3903	4410	
	0808	1204	1908	2313		2709			3905-1		
0501	0809	1205	1909	2314		2710			3905-2		4501-1
0502	0810	1206	1910	2315		2711		3501	3905-3		4501-2
0503	0811	1207				2712		3502			

オハヨーゴザイマスアサハヤクカラスミマセンガミソシルノミソヲキラシテシマッタノデチョットワケテモラエマ
アサミタラミソナクナッテイタ、スイマセンガ、スコシカシテグサイ
アサハヤクニスミマセン、ミソガキレタノデショウショウワケテイタダケマセンカ
オハヨーゴザイマス。申しわけありませんが、味噌を切らしてしまったので、少し貸していただけないでしょ
アサハヤクカラスイマセン
アサハヨカラスマンガノミソノナッテシモテノスコシワケテモラエンヤロカ。ハズカシイコトヤガノ。

アサハヤクカラモーシワケアリマセン。デキタラミソオワケテクダサイ。
チョッコシミソチョットタリネーカラカシテケネベガ、カシテクレナイベガ
オハヨーゴザイマス。スミマセンガ、ミソシルノミソガスコシタリナクナリマシタ。スコシワケテクダサイ。
スマネケド、ミソスゴシワゲデケセノ、ユンベカウノワスレデシマッテセ、ホントニスマネマス。
オハヨーゴザイマス
オハヨーアサハヤグカラ、スマネドモミソカシテ

アサハヤクカラ、モーシワケナイドモ、ミソオキラシテイタノデ、ワジカワケテクダサイ。
ゴメンクダセエーオハヨーゴザイマスーケサーミソコナグナッタクエーコノチャワンコサワンズカワケデク

オハヨー！朝の忙しい時悪いけど、ミソコ少しケデケネベガ、ナグナッテラノキツカネガッタノサー
オハヨーサンデス、ケサミソガキレデイダノワスレデシマッテスコシカシテケヘンガ。

オハヨゴス、メヤグダバツテミソカシテケネガ
オハヨーゴシミソキラシタハデアサマハヤグカラダバテスコシワゲデケネガ
イダナ

1
オハヨゴスケサオラノイエデミソキラシテシマッテメーワグダバテヒトカタブンカシテケヘ

アサマツカラハーモーシワゲアナードモミソッコワゲデケナナガベーガ
農村ですので、朝の早いのが普通ということからでしょう。早朝という場合に限った特別のあいさつはみあ
アサハヤグカラ、オモーツサゲナゴザンス。ミソガナクナリヤンシタ。カシテオクリヤンシセ。

ミソッコ、スコシカシテケネヘエ
オハヨーガンス、アサツパラガラモーズラゲネエドモ、ミソカシテケラッセンヤ(クナハリヤンセ)
アノーモーシワゲネガススコシミソワゲデケランヤ
アサハヤクニゴメンネン

オハヨーゴザイマス・アサカラスミマセン
ミソキラステ、ヒトカキブンカシテケライン
アサツパラカラハヤグガラスマネゲッドモ、ミソカシテケライン
オハヨーゴザイマス味噌貸して下さい

オハヨーゴザイマス。ミソガナクナッタノデ、モウシワケナイゲツカシテケサイン
オハイガス、オラエデミソキラシテシマッタノデスコシカリサキスタホダドンブリデシトスヤツカラモツテイガイ

オハヨゴザリス、モースワゲネーゲド、ミソチラストスマッタノデ、ミソスコスカシテケサエン
オハヨーゴザリス、アサツパラガラモーズワゲネーゲントモ、イマツカウミソナグナッタンダンデ、スコシカシ
オハヨー

1
2

オハヨーサン、ハヤシテスマネスナ、ミソコカシウテタモレ
おはえやなんす、みそこきらしてしまたんて、わんづが、かしてけねやしべがー
イダゲーアサマカラワリドモミソッコキラシタンテ、ヒトガダキカシテケランシェー

エダシカ、ミソコスシワゲデケニヤシカ
アサマガラ、モーシワゲネードモ、ミソッコサットガカシテモラエデクテ、キタンシドモ
ナントモ、ショシドモ、ミソコワケテケレ
オハヨーサン、ミソカリニキター
チョットナリサエテクル

オハヤンシ、メドミデケネエベガアー
アサマツパラカラメブガネヤンシ
ハエツト、ナンジガ、ミソコ、カシテケロ
オハヤンシ、アサマガラ、ブジョホーダンシノモ、アノナントガ、ミソコベッコ、カシテモラエネンシベギヤ
アサマカラブジョホダ、ミソコビヤッコネベガ
オハヨー、イツモドーモ、ミソキラシテ、スマナイガ、スコシカシテケネガ

オハヨサン、スコシミソカシテケンネガ
モツケランドモミソネグシツタサゲチョッコリカシテクレネカ。
ネーアサツパラカラワリドモミソシコシワゲデモラエネガノー
ゴメンナサイオハヨーゴザイマスアサハヤクガラモツケダケドミソゴドチントバリワゲデケネガノー
アサゾーデガラ、ネゲーゴドシーサキダドゴダ(デー)又は(ワイ)
オハヨーサン アサハヤクモツケデス

アサツパラガラワルイゲンド、ミソスコシカシテケンネガアヤ。

オハヨーサン・オハヨウゴザイマス
オハヨッスー ナンダテアサオオアラガラ ワレゲントヨー オラエデミソキラシテデヨー モースワケナイゲ、
ワイゲンドスコシワゲデクダンネガイ
オハヨーサマ、アサゲノミソタンニエモンダガラワゲデモラワンニエベガッシー
アッアー・アサ、ハヤグガラ、ワリドモ、ミソ、チートワゲデモラワンネベガ

オハヨーゴザイマス ミソカシテクダサイ・オハヨーゴザイマス ミソカシテクンギガー・オハヨーゴザイマス
ワリゲンチョ スコシミソワケテモランニヤーベカ
オハヨゴス、スマネゲンチョミソワンカカシテクンチェ
オハヨーゴザイマス/アサハヤクカラスミマセンガ/ミソキラシテシマッタノデ/スコシカシテモラエマセンカ/5
ワリゲンドミソチットクツチェクンチェー

オハヨーザイマス、イラツタガシ、カリモノニキヤンシタ
オハヨーサイヤス メイワグダゲンジョ。ミソスコシワゲデクナンシヨ(カシテクナンシヨ)
「アサツパラカラモーシワケネーゲンジョモ、オツユブンダケ、ミソワケテクナンシヨ」
オハヨーサン ミソカシテクンツェ
オハヨーゴザイマス、アサハヤグガラワリーゲンジョミソチットカシテゲロヤ
当地方では考えられない
オハヨー、アサハヤグガラワリィードモオラエノミノナグナツマツタ。モーシワゲネードモチットワゲデクン

オハヨーミソキラシチャッタノデワルイゲドケサタベルブンダゲデイーンダカ°ワケデチョーダイ。
オハヨーミソキラシツタモンダカラカシテオクンナンシヨ
オハヨコザンス、イヤークサーウツカリシテ、オシルノミソキラシチャッタモンダカラ、スコシミソモラエ
オハヨーゴザイマス アサハヤクカラオウカガイシ モーシワケアリマセン オミソオスコシカシテクダサイ
オハヨー、ミソガキレタノデ、カシテクダサイ
オハヨーゴザイマスミソスコシカシテモライマセンカ
オハヨーゴザイマス。モーシワケナイケドミソヲスコシワケテクレマスカ
オハヨーゴザイマス
スマネーカ°ミソアンメーガ
オハヨーゴザイマス、ワルイケントミソカシテクレツケ

オハヨー、ワルイケントヨー、ミソカシテクンナー

オハヨー アサガラワリーゲットモ ミソ スコシ カシテモライツケ
隣家に味噌を借りるようなことは先ずないでしょう。個人意識が強くなり昔とはかわりました。
オハヨーウツカリミソオキラシタノデスコシカシテ
オハヨーチョット味噌カシトゴレ
オハヨーゴザイマスミソオミソオキラシテシマイスコシガシテモライマセンカ
ミソワケテクンネーケ
オハヨーゴザイマス
オハヨーゴザイマススマネキツチットパッカシミソカシテオゴンナンシヨ
オハヨー チット カシテナー
オハヨー少し分けてオゴンナンシヨ
オハヨーゴザイマス・オサムーゴザイマス、チョットミソカシトゴレ
アサツパラカラワリーネー、ミソスコシワゲデモラエル
(ミソキラシチャッタ、カシテ)いれものをさしだす
オハヨーゴザイマス
不明
オハヨーダレカイトカイ

ケサミタラチョーシヨクノミソガナクナツテイタノデスコシワケテクダサイマセンカ

オハヨーゴザイマス、ワリケンドケサウツカリミソガナクナチャタノデスコシカシテクレナイカイ
ちょっとミソがきれちかったんで貸してもらえますか？
オハヨーガンス
ミソカシテ
オハヨーゴザイマス
オハヨーゴザイマス、オミソヲスコシカシテイタダケマスカ
オハヨーゴザイマス
モーシワケネーケドミソスコシカシテクンネーカネナニツカウダネミソシルジャーコノクレーデーネ
アサハヤクカラスイマセン アサツパラカラワリーネー

味噌を切らしてしまったので、少々味噌を分けてもらえますか
ミソガナクナツチャッテサー カシテモラエペーカイ
(オハヨーガンス/ミソクレテクンナンシ)

オハヨーゴザイマス アサツパラカラワリーケンドオツケノミソガナクナツチャンデスコシコシテクレヤスカ
オハヨーゴザイマス、スマンケドネー、ミソチットンペーワケテークイセーチョットキラシチャッタンデーネ
オハヨーゴザイマス オソレイリマスガミソガナクナツタノデスコシワケテクダサイ
設問のようなケースはないが、早朝訪問の場合「アサ、ハヤクツカラ、ワリーネー」
オハヨー、ミソガキレタンデ、クレテクンナイカーイ

オハヨーゴザイマス アサカラカッテナオネガイデスイマセン ミソオキラシチャッタンデ スコシカシテクンネ
オハヨーゴザイマス、スマンケド
ケサノ ミソジルノ ミソガナイカラ アトデナスカラ カシテクンナ
ミソオ キラシタカラ カシテクンナイ
ハヤクカラワリーネー/アサツパラカラモーシワケネー(ワリーガサー)

ゴメンナセーマシ
オハヨーゴザイマウ ミソネーダツケド ワケテクレツカ
オハヨーゴザイマス朝早くスマナイケド味噌を少し貸して下さい

スイマセンガミソヲスコシワケテイタダケマシヨーカ

スマンヤーケン、ミソオスコシカシテモライテヤーダケン。

オハヨーゴザイマス ワリイーケン ミソー カシテー クラツシェー

すみませんが～かしてもらえますか

なし

オハヨーゴザイマス モーシワケアリマセンガ オミソオキラシタノデ スコーシ ワケテ クダサイマセンカ

朝早くからむしんに来たけど味噌を借してくれ

ミソースコシワケテ クダサイマセンカ

ミソガナイニ チーット カシテクレンネー

経験なし

オハヨー ミソオ カイワスレターカラ カシテクンナーヨー

アサツパラカラ モーシワケナイケド ミソカシテー

アサハヤクカラスミマセン ミソガキレマシテネ スイマセンガミソオワケテモラエマセンカ

オハオーゴザイマス ワルイケドサー ワルイケドサー チョットミソカシテクダサイ

オハヨーゴザンス ミソオスコシカリテーダカ

味噌をワケテください ワルイネと先に付ける場合あり

オハヨー アサミタラ ミソガネエーデ タマゲタ チーット カシテ クンナ

現在まで経験なし

オハヨーゴザイマス。アサハヤクカラスイマセン。オミソオスコシワケテイタダケマセンカ。

(オハヨーゴザイマス。スミマセンガ、ミソヲスコシワケテモラエマスカ?)

ワマドニモーシワケネガ、ミソキレダンテ、イッショクブンカシテクダセンシ
アサツパラガラモースカケネドモ、オツヨニツカドオモツタケガ、ミソネグナツタダ。チョットカシテクンツアエ。
ミソオチョットカシテクンナセ
オハヨウゴザンス、オレントトコウツカリデミソカラッポデチョットダケワケテモライタイダガ
オハヨーゴザンス、味ソヲチットクンネーカイ
ゴメンクダサイ

モーシワケナイデモミソカシテクンナイ
ミソキラシテソエ。チットバカリカシテクンネカエ。
チャミューニワリーガノー(モーシャケネー)ミソチットバカワケテクンネカイ
「ココンショ、ワリドモ、ミソチットワケテクンネカイ」「このうちのひと、すみませんが、みそをすこしわけてく

そういったことはこの地域ではあり得ません
アサカラキノドクヤレド、ミソ、スコシワケテクレツシャレ。(朝早く気の毒やれど味噌を少し分けてくれっしや
スコシカシテクレヤー
アレー(感嘆詞)オハヨーゴザイマス。コーユ(こんなに)ハヨー(早く)キテ(来て(しまっ))
オトナリサン オハヨーゴザイマス(用件)・ユウカタマデニ返します チヤア アリガトウ
アサ、ハヨーカラ、ナンデモ ユーテ キマシタケレド、ウチニ、ミソ キライタモンデ、チョッコレ ワケテクダ
オハヨーゴザイマス スイマセンケド ミソカシテマ
アノー、キノドクヤケド チョッコシ ミソワケテ クレツシマイヤ
スイマセン オキトイデルー ミソ チョッコモラエンケ カンニンネ
オハヨー オツケツクローオモタラ オツチャウチニ メソアーナカッタコトイシ メソスコシカシテクサイセ

ミソ チョッコシ カシテクダシケ
キノドクヤケドミソカシテクダサイ

4,5,

キノドクヤケドー ミソ キライタノデ カシテ 返 ナンボデモ
コンニ、オキサンシタケ、ミソ、ヒトカタキ、カシテ、モラエンケ、アンタ、シワシネエ、トキニ、ナンヤ、キンド、
ハヨカラ オハヨーサン。ミソ キレイテン ワスレタガヤ スコシ カシテモラエンヤロカ
オハヨー キノドクヤケド ミソチョッコト カシテモラエンヤロカ、オハヨーサン ワケンネーヨーナイケン
アサ ハヨー から キノドクヤケド 味噌 ナウーなって シモーテ アツタラ スコシ ワケテモラエンヤロ
オハヨーサン アツイ ノ オツケ ノ ミソガ タランノデ チョコット カシテクレヤ

オハヨー ハヨカラスンマセン

オハヨ、ワルイケド、ミソヲスコシカシテチョーダイ

「オハヨーゴザイマス、ミソガアルトオモタガ、ナイノデ、スコシカシテクンナイノ」

オハヨサン、アサハヨカラ ワルイケド ミソキラシンテノー・ワルイケド スコシ ワケテンデノー...

オハヨーゴザイマス、アサハヨカラデスガ...(アサハヨーカラジャガ...)

アサハヨカラワリーケド ミソチョッコシワケテー ワリーネエー

ハヤイナー ダイジナモノヲ ワルイケド

オハヨー・ミソヲキラシタノデ スコシモライニキマシタ

この地方ではきかぬ

オハヨウゴザイス アサカラワルイケドミソヲキラシチャツタカラ スコシ カシトクレ

オハヨーゴザイマス スミマセンガオミソオスコシオカシクダサイ

ワリーネ(ミソ)カシテクンネー

オハヨー、ミソ、キラシチャトーケド、スコシ、クレースケー

ミソヲ ワケテ オクンナツテ

オハヨーゴイス...(几帳面な時の挨拶) ハヤイナーヨ...(ごく親しい間の挨拶)

オハヨーゴイス アサハヤク ワリーケドシ ミソチット モレーテーヨー ミソシルオ ツクラッカト オモ

オハヨー ワリーネエー チョットバカリ ミソカシテクレルケー

アサゲからモーショネテー、ミソがネクナツタからチットでイサケくれてクンネカイ(もらわんネカイ)。(アセ
オハヨーゴザンシタ アサツパラカラワリイードモソ、ミソーキラシチマツタムンデ スコシ カシテ クンネカ
オハオーハヤクワルイナエ
コンナ アサツパラカラ イライ ワリケンドモ ミソ カシテ オクンナヤ。
オミソガ オワッチャツタノデ カシテクダサイ
オハヨウゴワシタ ワリーガ ミソスコシワケテオクンナイ
オハヨーゴザイマス オハヨーゴザイマス
チョットゴムシンニキタケレド、ミソオカシテモラエンカネー
オハヨーゴザイマス アサハヤクカラ モウシワケアリマセン マコトニハズカシイコトデスガ ミソヲカシテク
(まず)ゴメンナイショ(と言って)、オハヨーゴザイマス、オバサマー、スマンケード、ミソガキレチャツタデ、ニ
オハヨーゴザイマス
オハヨー アサツパラカラワリガ ウラ ミソカイタモンデ ワイラ チット ワケテクレンカナー

「朝早うきてすまんけど、味噌切らいとって、ちょっと借してもらえんろか」
オハヨーゴザイマス スマング ミソヲキラシチマツタデ チョット カシテクリヨ
オハヨーゴザイマス、アサツパラカラスマンケンド
オハヨーゴザイマス アサハヨーカラ モーシワケナイ(スマンノー)ケド オミソ チョット カシテクレン?ワ
スマンケド ミソキラカータデ チョビット ワケテモラエンカナ
オハヨー ワルイケド ミソキラシチャタデ コノワンイツパイ カシテヨ
オハヨーゴザイマス
ハヨーカラゴメンシクレ・ハヨーカラ スミマセン・ハヨーカラ スマンコツチャガ
オハヨー スマンケド ミソカシテモラエンカナ・ミソカシクレ・ミソカシテクンサイ
オハヨゴザン スマンケド ミソー スコシカシテンカ コートクノ コロツト ワスレテマツタノデ スンマセン

オハヨーゴザン ミソ ガ オワッチャツターエ ワケテクラツシャア
オハヨースマネーケレド ミソチートカシテクラツシェー
オハヨウデース スマナーケード ミソガチートタリネーカラ カシテクンネエーケエ
オハヨウゴザイマス。ハイ オハヨー
オハヨーゴザイマス スミマセンガ ミソシルノ ミソガナイノデスコシ ワケテクレマセンカ
ワリーケンカシテヤー
アサツパラ カラ ワルイダン オミソオ チート クレテモライタイダン
アサツパラカラワルイネー オッシーノミソナリンクナツタデ チートヨンデチョーダイ
オハヨーゴザイマス スイマセンガ オミソオスコシワケテクダサイ
アサハヤクカラ ワルイヤー
オハヨウゴザイマス
オハヨウゴザイマス 朝食の味噌汁の味噌がないので味噌を少し分けてくれませんか 誠に恐縮で申訳な
ワルイケド、ミソオスコシカシテクレル

オハヨーゴザイマス。アサハヤクワルイネー。オミソガナクナツチ?ツテネ、チョットワケテモラエンカネー。
オハヨーゴザイマス。アサハヤクカラスミマセン。
スミマセンノカリモノニキタダケドノミソアルー?
ゴメン ミス キラシチャツタノデ カシテモラエルー
ミソーチートワケクレンカ、ワケクレンカン
オハヨーゴザイマス アサハヨーワルイネ ミソオチイト ワケテオクレルカン
アサ ハヤクテ ワルイネー。スマンケド チョット ミソ カシクレンカン。 チョード キラシチャツタモンデ。
オハヨーゴザイマス、モーシワケアリマセンガ味噌ヲキラシテシマツタノデスコシカシテクダサイ
オハヨーゴザイマス、オミソオ カイワスレテイマシタ ワルイケド スコシ カシテクダサイ
オハヨーゴザイマス スイマセンガミソオスコシワケテオクレンカネ
アサ ハヨー オジヤマシテ モーシワケナイ
アサハヨカラワルイナ スコシミソオワケテ
カエーテチョーセンカ
スマングミソオチョコツカシテチョーセンカヤ
オハヨーゴゼヤアマス アサハヨカラ エリヤア ハズカシーコト イツテキタケドヨー ミソ キラキヤアテマツ

親しい隣の家→ハヨーカラゴメンナサイ、オミソ スコシ ゴチソーシテ…
オハヨー、ワルイケド、ミソチョット、カシテチョー

オハヨーゴザイマス、アサハヨカラスミマセン、アイニク、ミソキラシテシモテ、ケサノブンダケ、ワケテモラエ
アサハヨーゴメンネ
アサハヤイトコスイマセン、ミソヲチョットカシテモラエマセンヤロカ
オハヨーゴザイマス、アサハヨカラスンマセン、オミソスツカリキラセタノデ、イッカイブン、ヨンデモロエルヤ
△△チャン、オハヨー。アサハヨウカラ、チョットワルイナー。ウチ、ミソキラシテシモテ、カシテクレヘンヤロ
ミソ、カシテチョーダイカ
アサハヨーカラスマンケドヨ、ミソチョットカシテクレンカノー エライスマンケドノー、ミソキラシタンデチョット

オハヨウゴザイマス 朝食の味噌汁の味噌がないので味噌を少し分けてくれませんか 誠に恐縮で申訳な
オハヨーサン。ミソガナクタツテモタデチョットワケテーナ
アサハヨーカラスンマセンナ ミソヲ カイワスレテ ナインヤ チョット ヨンデモラエマセンカ
オハヨーサン、アサハヨウカラウイケドミソスコシモラエンヤローカ
・スマンケドウチミソキラシテシモテン。ユウズーシテモラエンヤロカ。
アサハヨーカラスミマセン。オミソチョットカシテクダサイ。
オハヨウゴザイマス、スミマセンガオミソヲキラシマシタノデスコシオミソヲワケテクダサイ(カシテクダサイ)
ない
オハヨーゴザイマス、アサハヤクカラスイマセン。チョットミソオキラシテシマイマシタノデ スコシワケテモラ
オハヨーサン ウチノミソキタシタサケ、ミソチョットカシテクレンケー
(こんなことは殆んどない例)オハヨーサン、ウカートシテテ、ミソガノウテナー。ノウナツテナーチットワケテ
親しい仲間 オハヨー、ウツカリシトツテ、ミソガナイノヤ、チョットカシテクレナー。普通 オハヨーゴザイ

ハヤーワーノー、スマンケドミソオチヨトキヤーテクンセーナ
ハヤイケド、ミソガタランデー、ワケテクレナー。
ハヤイナー、スマンケド、チョットミソヲワケテーナ
ハヨーカラスンマヘン
ハヨカラ、スンマセン。スマンケド

オハヨウゴザイマス、マコトニモウシワケゴザイマセンガ、オミソハンノカイオキガナクナリマシタノデ、ハズ
現況では設問の状況は起らないので回答は避ける。50年昔であれば、見受けられたと思われ、余程なれ
モーシワケアリマセンケドナ、オミソヲモラワシテクレマセンヤロカ

エライハヨカラスマンケド、ミソガアツタラチョットワケクナルカ
該当なし(当地区ではこの様なことはしない。万一ミソがなかった場合、みそ汁は作らない)

スンマセンガミソチョットカシテクレヘン
オハヨーオマス。ケサ、ミソシルタコトオモタラナ、ミソガキレテアレヘンノデ、スマンケド、チョットワケテモラ
オハヨーサン ~アルケ~
アサノハヨカラスンマヘン。オミソキラシテモテー、チョットカシテオクナハレー
オハヨーサン、チョットミソカシテー
オハヨーサン。アサハヨーニエライワリケド、ミソキラシテモテナイン。チットダケワケテクレヘンカ。
オハヨーサン、チョットミソキラシテンモテヨー、チョットカイショークレヨー。(貸して下さい)(年代は60代以上

ミソカ〇キレタンヤニ、チョットカシテクレテヤナイカ
スマンケド、ミソガナインデ、ピット(少し)ダケワケテナー
オハヨーゴザイマス、ミソシルショーオモタラ、ミソキラシテシモーテ、スマンケド、スコシワケテナー。
オハヨーゴザイマス。アサミソシルヲツクロトオモツテミソヲミマシタラ、スツカリミソヲキラシテイマシタ。マ
「ワルイケドオミソガキレテシモーテ、チョットダケワケテモラエンヤロカ」年輩者

オハヨーゴザシテ、ミソキラシマシテナー。スコシワケテナー。
スマセンガ、ミソヲショーショーカシテクダサイ
以前は各戸で醸造しており、塩分を多くして、だいたい3年目(3年味噌)を使うのが常識だからこのような事
オハヨーサン、ナントスマンケド、ミソオチットワケテクレチャナイカ。スマンナー。オーケニ。(オーキニ)

オハヨーゴザイマス、チョットスマンケド、ミソガキレタノデスコシダケカシトクレ。

オハヨーゴザイマス。アサハヨーカラスミマセンノヤケド、ミソヲチョットダケワケテクレテナイヤロカ

オハヨーゴザイマス。ハヤイノー
チョットスマンケゾミソカシテンケー
ハヨーカラスマンナー。
アサハヨカラスイマセン
アサハヨーカラスンマヘンナー。ムリタノミニキマシテン。オミソスコシワケテモライマヘンカ

アサハヨーカラスンマセン、チョットオミソカシテクレヘンカ。
ソーチョスマセンガ、オミソヲカシテクダサイ
(今はその様な事は有りません)もし有ればスマンガ、アサメシノミソオクレ
(ハヨーカラスマンガ、ミソシルノミソワケテクレンカイノー)
オハヨーゴザイマス。スマンノヨー、ミソシルタコートオモータラミソカウノワスレトツタンサ、イッペンブンカシ

○オハヨーゴザイマス。ワルインヤケドヨオ、チョットオミソ、ワケテモラエヤンカエ？お早うございます。申し
ソウチョウカラオジヤマシマス
オハヨーサン、スマヘンケドチョットオミソカシテオクレヨ
スマンケドヨー、ウチヤミソワノナツタンデチョイト、カイトクレンカイ
オハヨーチョットミソキレタンヤケドワケテクレンカー
アサハヨカラワリケド、ミソカイトヨー。ホラモツテカンセ。

チートミソカイト
スマンケドミソクレンカー
オハヨーゴダ(ザ)イマス、スコシオミソイタダケマセンカ。オネガイシマス。オハヨーオミソスコシワケテー。
オハヨーサン、チートミソタランノデカイトクレンコ
すみません、みそすこし貸して下さい
スマンノー、チョットミソカシテクレンカン
ハヨカラスマンノー

オハヨーゴザイマス ミソガタリンケー カシテモラエンカー
ハヨーカラスミマセンガ ミソヲ チートバカシカシテツカンセンカ
スママセンケド ミソ ワケテ(カシテ) モラエンカナ
アサトウカラ スミマセンガ ミソカシテーナ
アサトーカラ スマンケード イマミリヤー ミソガナーナツトルダガ マタ カーテキテモドスケー ミソヲチー
アサマトウカラダケドゥ ナント ミソ カシテーナー
エライ スマンケド ミソヲキラシタケー チート カシテーナー
オハヨーゴザイマス
アサハヨカラムシンキマシタワー
オハヨーゴザイマス・アサカラゴムリナオネガイニアガリマシタ

ナントーカラサワガセテスマンノジャガ、ミソオキラシテシモタンデ、チートカシチャークレンサレンカーノ。

オハヨーゴザイマス。ハヨーカラスイマセン。ミソシルシヨーオモータラミソガナカッタンジャー。チョット、カシ
オハヨー、アサゴハンノミソシルノミソガミテトルツタンジャ チョビット カシテチョーデー
朝食用の味噌を当日隣家に借りにゆくことはあり得ない。無ければ食べないだけだが。 ハツカシーハナ
ハヨーカラ、スマンガ ミソー チート(チョビット)、ワケテ(カシテ) ツカーサエ(セエ)
オハヨーゴザンス！何と(ナント)、チョビットダキ、ミソーワケツツカーサランカ！オツーショーオモータラ、
※懇意な家でも最近は設例のようなことはありません。
スママセン 味噌ヲキラシテイテ オカリデキマセンカ
オハヨーゴザイマス ミソオキラシタノデ スコーシカシテツカーサイ。

アサトーカラ、ゴモシンニ キタンデスガ チート ミソオ カシテ ツカーサイヤ。
オハヨーゴジャー(zya)マス。ハヨーカラスミマセンノー。
(ハヨーガンシタ、スマンガミソーチートカシテモラワリヤースマーカ)
オハヨウゴザイマス アサハヨースミマセンガミソオキラシタケンチョットカシテモラエンカー
オハヨーゴザイマス。アサハヨカラスミマセンガ、ミソガキレチオルケンチョット、カシチョクレー
(ミソヲチートカシンサイヤー)
オハヨウーゴザイマス(ゴメンツカーサイ)、アサハヨーカラゴモシンオユーンデスガノ、ケサミリヤーミソガナ
オハヨーゴザマス、トーカラ、スママセンガ、ミソオー、チイト、カーチャー、モラエマセンカ、コーチ、キツリヤ
ミソヲ チイト カシチャー クレンサランカ
オハヨーゴザイマス アサハヨウカラ ゴムシンニキマシタガ
アサハヨーカラ、スママセンガ ミソオカウノー ワスレトツタンデ チート ミソオ カシテクレンサラツカイ

オハヨウゴザイマス。オハヨウゴザンシタ。
アサ、ハヨーカラ、ゴメンナサイマセ アサ、ハヨーカラ、ゴメンサンセ(70~80歳以上の女性の場合)

アサハヨーカラスミマセンガ、ミソオワケテイタダケマセンカ
(男) ゴメンサンセ。ウチノミソガキレタノイノ。チートワケテクマイノ。 (女) ゴメンナサイマセ。ウチノミ
トーカラ(早くから)スミマセンガ 味噌を少しワケテチョウーダイ(またはクダサイ 昔しは ゴクチョウ スミ
ハヨーカラスミマセン ミソーチョット カシテモラエマセンカ
(オハヨーゴザイマス)ソーチョーカラスミマセン(同伴)
朝早くからスミマセン味噌を買うのお忘れて、けさの味噌汁の味噌を少しワケテイタダケナイデショウカ
スマンケドミソヲチョットカシテオクレノ、
(アサトーカラ マコトニスマセンガ ミソオスコーシバツカリ カシテモラエンデショウカ。)
スコシワケテイタダケマセンカ。
オハヨーゴザイマス、アサハヨーカラゴムシンニキマシタ。 ミソーキラシテシモーテ、スコーシワケテオクレ

オハヨーゴザイマス、アサハヨカラスマンケド、ミソシルツクロートオモタラオミソガナインヨ、スマンケド。
オハヨウゴザイマス
アサハヨーカラ ゴメンヨ ワルイケド オミソスコーシ カシテクレヘンデ
オハヨーゴザイマス アサハヨーカラ アイスマンケド、オミソガ タランケン カシテクレヘンデ
スマンケド、ミソスコーシ ワケテクレンデカイ
オハヨーサン オミソ チョッピリ カシテ クレンカヨ
スマンケド、チョット、ミソカシテクレルカ
オヒナツタカノー キノクナケド オミソ ナインジャケド カシテクレルカエ
オハヨーゴザイマス、 アサハヨーカラスマンケド、オミソガキレタンヨー ワルイケドチョットカシテクレデー
オハヨーゴザイマス、 アサハヨーカラスミマセンガ、オミソスコシカシテクレマセンカ。
シマンケド、ミソオカシテクレルカエ。

オキトシナー オルシナー オハヨーサン
アサハヤクニ スミマセン。アサゴハンニ オミソシルヲ ツクルノニ オミソガキレテテ、 イツカイブン ワケ
チョットスマンケドミソカシテクレルカイノ
アサ ハヨーカラ ゴメンノ。ミソシル ツクツジョツテ、ミソガタリンノヤー チョット ワケテモラエンカイナ。
オハヨーゴザンシタ、スマンケド ミソオワケテイタ
オハヨーゴザイマス、スンマセンガ
わかりません。
アサ ハヨカラ ゴメンナ。オモソガ ナシンナツタンデ ワルイケド チョット ワケテ ホシイン ヤケド
オハヨウ、ハヨカラスマンケド チョットミソカシテクレルヤロカ

アサハヨーカラスミマセンガミソヲショウショウワケテモラエマイカ
スマンケド
アサハヨーカラスンマヘン。
オハヨー。アサカラスマンケドオミソスコシカシテクレルカネ
ハヨーカラスンマセン/ワリンジャケド
スマンガミソオチートワケテクレルカナ
オハヨーゴザイマス
アサハヨウカラ/スマンナーミソガナシニナツトルンジャガ ワケテモラエンジャロカ
アサハヨースミマセン、ミソシルスコシモラエンカナ
オハヨーアサトーカラスマンノ、ミソオキラシテ、ネーガヨ。チョットデイイケンワケテモラエンカイノ。
オハヨーゴザンシタ味噌ガタランノデ少少オカリデキマヘンカ
ミソガキレタケン、カシテヤンナハイヤ

オハヨーサン、ミソヲチットバァクレンカネ、ハヨーカラスマンケド
ミソガナイナツタキンチットカイテクレルロウカ
アサハヨースマンケド、オミソガチットタラザツタキカマーザツタラチットカシテヤ
オトーチャンガキノーカイモノオワスレテキテケサノマニアワンノジガミソオチョットカシトーセ
ミソワケテヤ

オハヨーゴザイマス。アサハヤク、スミマセンガオミソスコシカシテクレマセンカ
オミソヲキラシタチャガチイト(少し)カシテクリヤ。オミソガアルトオモチヨッタラナイガチャガチイトカシテクレ
アサハヨカラスマンケドコウタミソガキレチヨルガチヨットカシテクレ
チヨットスマンガミソカシテヤ
オミソチートクレンカイ。

ミソオショウショウワケテツカアサイ。
ゴメンクダサーイ、アサハヨカラサワガセテスマンケドミソバオワンイッパイカシチヨクレ。
オイデルデ、オイデマスカ、オハヨーゴザイマスハヨカラスマンアンアタナ、チャットミソヲキラシチヨルキチ
ハヨカラスマンマセン、ミソオキラシチヨッタキチットバカリカシテクレナイ。
シモウタカノ、キョーハドゲンスルノー。キョーハチヨトヨウンアルケンデイケアーニハイカレンゴタル。
ゴメンバッテンミソバチーットカシテクレンネ。
オリメスカ、モーシモーシ。

ミソシルツクイカケタバッテミソノタランケンカシテクレンカイ、スマンバッテ。
スマンバッテンミソバスコシワケテクレンエ。
ハヨナーミソシルン、ミソ、チーットタランケン、チーイトバツカリミソバワケチクレンカイ。
チョードミソノキレトツケンチヨットカシトツテクンシャイ。チョードミソノキレトツケンチヨットカシトツテクレンネ。
オハヨーゴザイマス。オリマスカ。
オハヨーゴザイマス。オルー。オルヤー。
イワレンドンミソバチカーットバカイキヤーテクイゴザンミヤーカ。
オルナー。アサハヨーカードンカ。
オハヨーアサハヨウーカラスミマセン、ミソバキラシテシモーテサイスコシデヨカケンカシテクウシャイ。
ハヨーカーラスミマセンミソバカシテクンシャイ、カシテオクンシャイ。
アサハヨカラゴメンバッテンミソノノーナツタケンスコーシカシテクンシャイ。

スミマセンガ、ミソオキラシマシタノデカシテクダサイ。
オハヨーゴザイマス、ミソバキヤーテクレヤッセ。
アサツパラカラスンマッセンドン、ミソバチーットキヤーテクンナッセー。ナー。
アサハヨーカー、ホンニキノドクカイドン、ミソバチットバツカイ、キヤテクイゴザイ。
アサハヨーカーラスマンバッテンミソババチーットカシテクルッターナカノー

ゴメンクダハリマッセ、オハヨウゴザイマス。キノウミソバカイソコネタケンキヤーチクダハリマッセ。チーット
ミソバチットワケテハイヨ。
オハヨーゴザイマス。オンナハルカ。
オゴメーン、オハヨーゴザイマス。スマンバッテンチーットミソオワケチクレンナ。あるいはワケチオクレ。
オハヨーゴザイマス、スンマッセンガミソパーキラシタケンチヨットカシテクレマッセンカー。ハイハイモドサン

アサツパラカラスマンケドミソチットカシチヨクレ。
オハヨーゴザイマス、イイテンキデス、タイヘンスミマセンガ、オミソヲスコシワケテイタダキマセンデショール
タイソウスミマセンガミソオスコシ分ケテ下サイ。
スマンケドミソオチットワケチクレンカイ。

オハヨーゴザイマス。アサツパラカラゴムシンニキマシタ。チットーミスカシチモラエンジャローカ。
エレスマンコツチャケドミスーチットカーケーチクザンセ。
オハヨーゴザイマス、スマンケド味噌オカシテクレンナー。
アサハヨカラスイマセン。

朝ツパラカラスマンケドミスーチットカシチエクレンカエレームシンジャケンド。
ハエーノームシンガアツチエキタケド、タットミスーキラシタモンジャキカシチエモラエンカノー。

スマセンガミソバチョットワケテクレンノー。
オハヨウゴザイマス、スマセンガミソヲチョコーツカシテクダレンドカイ？
ヨウイアサハヨカラエレスマンケンド味噌汁ヲタコトモタラ味噌ガネエトジャガスマンケンドカシテヤランドカ。
オハヨサンミソワケテクンナイ。
オハヨーオリアヨーエライスマンケンドミソチットワケテモラワレンドカイトムテキタツチャガ。イーワノーモツ。
オハヨー、アサハヨーカラエライスマンケンド。
アサパチカラミソノムシンニキタバイ。
アサハヨーカラスミマセン。
アサハヨカラスマンコツジャヒドンミソオチットカセツタモンサンカ。
アサハヨカラゴメンネミソオキラシタカイカシテクンナイ。
ミソガネトーヨナ、チョコツカシネ。

オハヨーアサカラヤイモスバツテミソキレカシモイターアンマイヤイモスバツテキヤーテクイヤイモーセ。
味噌バチットワケテクイヤイモセ。味噌バチットワケテクイヤレ。
ミソガナカゴーヒンナッタージャガ、チットカツシャンカ。
ゴメンナンセエー。ゴメンクダサーイ。オハヨーゴザイマス。
ハヨカラスンモハンドンミソオチットクイヤハンドカイ。
オハヨウゴザイマス。アサハヨカラゲンネコツゴワンドン、ミソガキレチョンサオチットオガシャツタモハンカ。
オハヨウ。
オハヨウゴザイマス、アサハヨカラスンモハンドンミソオカシテクイヤジャンドカイ。ミソオキラシテシモテスン
オハヨーゴザイマス、サンカアサイナシタナー、スツモハンドンミソオキレケテシモモシテチットバツカイオカ
スンモハンドアサハヨカラタノンミヤゲゴツシケキモシタ、ゴットオキカアカイモンニキタ。
ミソオチットバツカイワケツクレンナ。
キュウヤウガミシヨウランミスクワヌネンカナ、ナーリックワワーテクリシヨウラン。

サーレイヒューウワヨカテンキデロヤ、ドウカシーガキヤーブタン、ミシュネワキテタボラランド、
ミシュウビヤーワイティタバーリタンディ。

キヤーイラー、カラーチトウラーシン、セーランガヤー。
ソースヌチリティ、ウヒグワーンソースグワーイラーシミソーレー。

(3) 朝、家を出るときの挨拶

質問文: 朝、家を出掛けるとき、玄関先で見送りの家族に向かって、どのような挨拶のこ

とばを言いますか。

0101	0504	0812	1208	1501	2001	2316	2801-1	3001	3503	3906	4502
0102	0505			1502	2002	2317	2801-2	3002	3504	3907-1	4503
0103	0506			1503	2003		2801-3	3003	3505	3907-2	4504
0104	0507	0901-1	1301	1504	2004		2802	3004	3506	3907-3	4505-1
0105	0508	0901-2	1302	1505	2006	2401	2803	3005	3507	3908	4505-2
0106	0509	0901-3	1303	1506	2007	2402	2804-1	3006	3509		4505-3
0107	0510	0902	1304	1507-1	2008	2403	2804-2	3007-1	3510		4505-4
0108	0511	0903	1305	1507-2	2009	2404	2805	3007-2	3511	4001	4506
0109	0512	0904	1307	1508	2010	2405	2806	3008	3512	4003	4508
0110	0513	0905		1509	2011	2406	2807	3009	3513	4004	4509
0111	0514	0906		1510	2012	2414	2808	3010		4005	4510
0112	0515	0907-	1401	1511	2013			3011		4006	
0113		0907-1	1402					3012	3601	4007	
0114		0907-2	1403-			2501		3013	3602	4008	4601-1
	0601	0907-3	1403-	1601	2101	2502-1,2		3014	3603		4601-2
	0602	0908	1404	1602	2102	2503			3604		4602
0201	0603	0909	1405	1603	2103	2504			3606	4102	4603
0202	0604	0910	1406	1604	2104	2505		3102	3607	4103	4604
0203	0605	0911	1408	1606-1	2105	2506		3103	3608	4104	4605
0204	0606	0912	1409	1606-2	2106	2507	2809	3104	3609	4105-1	4606-1
0205	0607	0913	1410	1607	2108-1	2508	2810	3105	3610	4105-2	4607-1
0206	0608		1411	1608	2108-2	2509		3106	3611	4105-3	4607-2
0207	0609			1609	2109	2510		3107	3612	4105-4	4609
0208	0610	1001		1610	2110	2511	2901	3108		4105-5	4610
0209	0611	1002				2512	2902	3109		4106	4611
0210-1	0612	1003					2903-1	3110	3701	4107	4612
0210-2	0613	1004	1701	2201			2903-2	3111	3702	4108	4613
	0614	1005	1702	2202-1	2601	2904	2904		3703		4614
	0615	1006	1703-1,2,3	2202-2	2602	2905-1			3704		
0301		1007	1704	2203	2603	2905-2		3211	3705	4201	
0302		1008	1705	2204	2604	2906			3706	4202	
0303	0701	1009	1706	2205	2605	2907			3707	4204	4702
0304	0702	1010	1708	2206	2606-1	2908		3301	3708	4205	4703
0305	0703	1011	1709	2207	2606-2	2909		3302	3709	4206	
0306	0704	1012	1710	2208	2606-3	2910		3303			
0307	0705	1013		2210				3305			
0308	0706			2211				3306	3801-1	4301	
	0707		1801	2212	2701			3307	3801-2	4302	
	0708	1101	1802	2213(1,2,3)	2702			3308	3802	4303	
0401	0709	1102	1803		2703			3309	3803	4304	
0402	0710	1103	1804						3804	4305	
0403	0711	1104	1805	2301					3805		
0404	0712	1105	1807	2302				3401	3806		
0405	0713	1106	1808	2303				3402	3807	4401	
0406		1107		2304				3403	3808	4402	
0407		1108		2306	2704			3404	3809	4403	
0408	0801	1109-1	1901-1	2307	2705			3405	3810	4404	
0409	0802	1109-2	1901-2	2308	2706-1			3406	3811	4405	
0410	0803	1110	1902	2309	2706-2			3407		4406	
0411	0804		1903	2310	2706-3			3408		4407	
0412-1	0805	1201	1905	2311	2707-1			3410	3901	4408	
0412-2	0806	1202	1906	2312-1	2707-2			3411	3902	4409	
	0807	1203	1907	2312-2	2708			3412	3903	4410	
	0808	1204	1908	2313	2709				3905-1		
0501	0809	1205	1909	2314	2710				3905-2		
0502	0810	1206	1910	2315	2711			3501	3905-3	4501-1	
0503	0811	1207			2712			3502		4501-2	

イッテキマース
イッテキス
イッテキマース
イッテキマス
イッテキマース
イッテマイリマス。イッテキマース。イッテクルゾ
イッテキマース
イッテマイリマス
イッテキマース
イッテキマス
エッテクルエ
イッテキマス
スタラエッテクルド。イッテマイリマス。

イッテクドー
男：ヘダラオラエッテクルエ女：ワアエッテクルシカエ(ケ)(カエはケに近い)
イッテキマース・イッテクルスケ
イッテキマス
イッテキマース

セバイッテクル
イッテクルヨ
ヘバイグ
イッテキマス
ソーシレバイッテクルジャ

イッテクツチヨ
エッテキマス。ンデアエッテクスデア
イッテキマース

イッテクルジェ
イッテクツカラ、イッテマイリマス
エッテキヤース
イッテクツカラ

イッテマイリマス・イッテキマース
イッテクルヨ
イッテクツカラ
イッテキマス

イッテキマス・イッテマイリマス
イッテクルゾ・イッテキマス

ウンデワ、イッテクツゾー。
イッテクツカンナイ・イッテメーリス
イッテクツカンネ

マズ、エッテクルド
えってくるんてー
ヒバマヂナ、子にアチコチミネデチャチャドイゲハー

エツテクルドー・イッテキマス
エツテクル
オレ、エツテクルガラナ
イッテクルー
エテクルカラナ

エツテクル(対目下)エツテキマース(対目上)
エツテクルガラナ
エテ、クル
エツテクルド・エグド・アドキチケデナ
エツテクル
イッテキマース・イッテクル・イッテマイリマス

イッテキマース・イッテクル
イッテクツサゲナ
イッテクルデ。
エテクルノー
ウツテクツゾー
ハジャーイッテクンゾー
シタバイッテクツサゲ

イッテキマース・イッテクツサゲナ・イッテクツゾ
イッテクツカラナ
イッテキマース
ソデーアイッテクツカラ・イッテマイリマス
イッテキマース
イッテキマース エツテクツカラナ ホンジャエツテクツカラナ、ホンジャ
イッテキマス・イッテクツカラ

イッテクツカラー
イッテクツソ
エツテクツカラ
イッテキマース
イッテキマス

年下には(どどこに)イッテクンゾ・年上にはイッテキチャンス
(目上)「ジャーイッテクツカナンス」「イッテクンゾー」(下に対して)
夫「ソんジャーイッテクンゾ」
イッテキマス
ホンジャイッテグツカラ
イッテキマース
男: イッテクル、女: イッテキマス

イッテクットー・イグゾー・イッテクツカラー
イッテキマース
イッテマイリマース
イッテマイリマス
イッテキマース
イッテキマース
イッテキマース
イッテマイリマス
イッテクット
イッテクルヨ

イッテキマース、イッテクンノー、イッテキマス

イッテキマース
イッテキマース。
イッテキマース
イッテクツツオ
ソレデワイッテキマース
イッテキマース
イッテキマス
イッテキマス、オダノミシマス。ホンジャマズイッテキマス
イッテキマース/キーツケテナー
イッテキマース

ホンジャイッテキマス
(イッテキマス)
イッテクツカンネ とか イッテキマス
イッテクルヨ
イッテクツカンナイ

イッテクルヨまたはイッテキマス

イッテキマース、イッテマイリマス
イッテマイリマース
イッテキマース、イッテクラー
イッテキマース
イッテキマース
イッテマイリマス、イッテキマス
イッテキマス(大人どうし)イッテクルヨ(大人が小人に)
イッテキマース
イッテマイリマス、イッテキマス、イッテクルヨ、デカケルヨ、ソレジャー

イッテマイリマス
イッテキマス イッテマイリマス
(イッテキヤンス)

イッテキマース、イッテクルヨ、イッテクツカンネ
ソンジャーイッテクルヨー
イッテマイリマス
イッテキマス/イッテクルヨ
イッテクルネーORイッテクンネー

イッテマイリマス。イッテマイリマシタ。イッテキマス。イッテキマシタ。
イッテマイリマース
イッテクルヨ
イッテキマス
イッテクルゼ/イッテクルヨ/イッテキマース

イッテクツカンナ
イッテクルヨー
イッテキマス

イッテマイリマス、イッテキマス オネガイシマス、タノムヨ
イッテキマース
イッテクツカンネ

イッテキマース・イッテマイリマス

イッテクルヨ
イッテキマース
イッテキマース
イッテマイリマス
イッテクルヨ
イッテ クロジヨ

イッテマイリマス
イッテクルヨ 子供 イッテキマス
イッテキマース・ハイ イッテラツシャーイ
イッテクルヨ
イッテキマース・イッテクルヨ
イッテキマス・イッテクル
イッテキマス
イッテキマース・イッテマイリマス
イッテキマース・イッテクルネ・イッテマイリマース
イッテキマス
(イッテキマース/イッテクルヨ)

イッテキース
イッテクツツエー。イッテクツツオー。イッテキマース。
イッテクルド
イッテキマス/イツテクルゾ
イッテクルゼ、イッテクラ
イッテキマス

イッテクルデーノ
エッテキマス。
イッテクルゼ、イッテキマス
「イッテクルゼ」「いってきます」

イッテキマス
イツテクルゾ(行ってくるぞ)
イッテキマス
イッテクツチャ(きます)(「チャ」は接尾語)
イッテキマース アトタノムネ ヒノシマツ キツケテネ(キツケニヤ)
イッテクルゾ
イッテキマス
イッテクルゾ
イッテクル ソンナラ
イッテクルワイ・イッテクルチャー。(子供は)イッテキマス

イッテクルワケ
イッテキマス
4,5,
イクワー
大人 ホンナ、イッテクルワ 子供 イッテキマス
イッテキマース
イッテクラワ・イッテクルワ、ホンナ イッテクルワ、ホンナラ イッテクルワ、イッテクルワ・イッテキ
ソツジャイッテクルワー、火サマ ダイジニ シテクレヤ
イッテクルカラナ イッテクルワ ヒノマダジ シトケヤ

イッテキマース
イッテキマース
「イッテクルデーノ」
イッテキマース・イッテクルデーノ
イッテキマース
ホンナラ イッテキルネー・イッテキマース
イッテキマス

イッテキマース
イッテクル・イッテキマス・イッテクルヨ
イッテクルヨ
イッテキマス(血族の家族) イッテマイリマス(嫁さんや同居の人)
イッテクルヨ(イッテクルヨー)
イッテキマース・イッテクルヨ
イッテクルヨー
イッテクルヨ
ホンジャー イッテクラーナ
ジャー ○○ヘイッテクルヨ(イッテクルカラネ)

アチャ イッテクラ・ソソジャナ
イッテクルゼ ルスータノムゼ
イッテクルヨ
イッテクドイ
イッテキマース イッテクルヨー(親から子へ)
ジャー イッテクルヨ
イッテキマス
イッテキマース
イッテクルヨ
(大人)イッテクルデナ (こども)イッテキマース
イッテキマス・イッテマイリマス
イッテクルデ(大人) イッテキマース(子ども)

「行ってくるさ」「行ってくるえな」

イッテクルダヨー
大人が大人へ イッテクルワヤ・イッテクルヨ・デカケルヨ 大人が子供へ イッテクルヨ・イッテクルゾ
イッテキマス
イッテキマース
イッテキマース チャイッテクルワ
イッテキマース
イッテキマース・イッテクルデ・イッテクルゾ(一部の男性)
子ども…イッテキマース 大人…イッテクルワイ・イッテクルゼ・イッテクルゾ
イッテクルゾ

イッテクルヨ
イッテクルヨ
イッテクルヨ
イッテキマース
イッテマイリマス
イッテクルヨ
イッテクルゾー
イッテキマース・イッテクルゾ・イッテクルゼ 〈前文は女性、後文二つハ男性〉
イッテキマス
イッテクルゾ
イッテクルヨ
イッテマイリマース
特になし

イッテキマース
イッテキマース
イッテキマース
イッテキマース
イッテマイリマス イッテキマス デカケルデナー・ゾン・ゾヤ イッテクル・ゾン・ワン
イッテキマース
イッテマイリマス。 イッテキマース。
1、イッテキマース 主人の場合2、イッテクルヨ
イッテキマス
イッテキマース
イッテキマース
イッテクルカナー・イッテクルゾ
イーッテクルデナン
ソソナライッテクルデヨー
イッテキマース

イッテクルデヨー・タノミマス
イッテキマース

イッテクルデナ／イッテキマース
イッテキマース
イッテクルワ／イッテキマス
イッテキマス／イッテクルハ
イッテクルワナ イッテクルデナ
イッテキマス
イッテキマース イテクルヨー

夫から妻へ。 イッテイクルゾ イッテクルゾヨ
イッテクルデオ
イッテキマス
イッテクルワ イクワー
・イッテクルワ
イッテキマース
イッテキマス
イッテキマース、イッテマイリマス
イッテキマス
女 ホナ、イテクルワー。 男 ホナ、イテクンデヨー
イテキマス
イッテキマス

イッテクルワ
イッテクルカラ、キオツケテ、クレヨ
イッテクルワ、イッテクルデヨ
イッテキマース
イクワ、イッテクルワ、イキマスワ、イッテクルデ

(今日も一日がんばって働いてキマ)(イッテキマース)続けて一桁目と二桁目
目上の者 イッテクルワ 目下の者 イッテキマース・イッテキマス
ホナ、イッテクルワー

ホナ、イテクン(ル)デ
イッテクル 年上の人に対しては、イッテマイリマス

イッテクルワ
イテクルワ
イテクル
コレカライッテキマース
イッテキマース、イッテクルデー
ホナ、イッテクラエー。
老人はイッテクラエをよくつかう。イッテキマス

イッテキマス
ホンナラ(それでは)イッテクルデ。イッテキマス。
イッテキマス orホンナライッテクルワ
イッテキマス。イッテクルカラ、ルスヲタノム。
「イッテキマース」

イッテキマース。
イッテクルワ。イッテキマース。
イキテクルケー。
イッテキマース。イッテクルデ。イッテクラア。

イッテキマス。イッテクルデナー。
イッテキマス

イッテキマス。イッテクルワ。
イッテクルベー
イッテキマース。イッテクルワー。
イッテキマース
イッテクルワ

イッテキマス
イッテクルワ
イッテキマース、ソシタライッテクルワ、イッテクルヨ、イクヨー
(イッテキマース/イッテクルワ)
イッテクルワ。イッテクルゾー。

年下イッテキマス/年上ハイ 同じぐらいの年イッテクラヨ/ウン・オイ・イッチヨイデ 色々イッテキマス/イッ
イッテキマス
イテクラヨ/イテクルヨ
イテキマス/イテクライ/イテクラ/
イッテクラ/イッテキマス
イテキマス/イテクラヨ/イッテマイリマス

ソソジャイテクラ
イッテクラヨ
イッテキマス。イッテマイリマス。デワイッテクルヨ。
イテクルヨ(女)イテクラヨ(男)
チョット()へ行ってくるヨ
イッテクルワ
ソレジャ、イッテクルデヨー

イッテキマース・イッテクルケ・デルケ・イクケー
イッテクルケーナー
イッテクルゼ
イッテキマス
フンナーイクケーナー・イキテクルケーナーイヤ・フンナーイキテクルゼ
チョット イッテクルケー
イクゾー・イッテキマース
イッテクルケー・イッテクルワ・イッテクルケーナー
イッテクーケ
イッテキマス

ソイジャーイッテクルデ

イッテキマス、orイッテクルデ。
イッテキマース
イッテカエリマス
イッテクルゾ、イッテクルデー イッテクルヨ イッテキマース
イッテクラー！
イテキマス イッテキマス
イッテキマース
ソソナラ イテクルデ、イッテキマス。

ヘージャー イッテクルケーノ。
イッテキマース。イッテクルケー。
(イッテキマース)(セエジーイッテクルデー)
イッテキマス
イッテクルケンノー、
(イッテクルデー)
ホレンジャーイッテクルケーノ
イッテキマス。
ホイジャー イッテ クルケーノー
イッテキマス
イッテクルケーノー

イッテキマスデー。
イッテキマース(一般的には) イッテクルカラ(夫婦間の場合)

イッテクルヨ
イッチキマス イッチクルケーノ
イッテキマス。イッテクル。イッテマイリマス。 ◎老人 行ってくるから ノンタ(ね)(ます)
イッテキマース
(イッテキマース)(イッテクルヨー)
イッテキマス イッテマイリマス
イッテキマス、(父が家族に)イッテクルゾー
(イッテキマース、イッテクルゾ)
ソレジャー、イッテキマス。
イッテキマース/イッテクルケーノ

ホナイッテキマス
イッテキマース
イテクルケンナ
イッテキマス
イッテクルヨ、イクヨー、イッテキマスー
イッテクルデー
イテクルケンノー。
イテクルゾヨ イテクルワノ イテクルケンノー
ジャイッテキマス イッテクルワナー イッテクルケンナー
イッテキマス、
イテクルケンナ、イテキマス、

イッテキマース イッテクルワナ
イッテキマース
イテクルデー
イッテキマース。イッテクルケン。
イッテクルワナ
イッテキマース
「イッテキマース」
イテ キマス。
イッテクルワ

イッテクルヨー
イテコーワイ
イテコーワイ
イテコオワイ/イッテキマス
イッテキマース
イッテキマース
イッテキマース
イテコー/イテコーワエ/イッテコーワイ
イッテコーワイ
〇〇エ、イッテクルケンノー。
イッテクルヨ
イッツテキマス、イッテクルゼ、イッテクルゾ

イッテクルキニ、イッテクラー
ホンナライテクルキ
イテクルゾネ
イッテキマース
ゾンナライテクルケーノ
イッテキマス

イッテキマス、イッテラッシャイ
イッテキマス。イッテクルゾ。イッテクラエ。
イテクラヤー
イッテクルゾ

イッテキマース。
イッテキマス。
ホナイッチクルド、イッチクッキナ
イテクー。イッテキマース。
イッテクルバイ、ヒノヨウジンバ、ヨーットシトツテクレニヤンバイ。
イッテクルケンネ。
イッテ克蘭モ、イッテクルバンモ、イッテクツタンノーイッテクツゾー。

イッテキマス。イッテラッシャイ、キオツケテ。
イッテキマス。イッテクルケン。
イタチクルケン。ソイジャーイクケン。
イッテキマース。イッテクルケン。
イッテクツケン。
イタテクツケンノー。イタテクツネー。
イッテマイリマース。
イタチクルケンナー。イタチクルバイ。
イッテキマース、イタテクツケン。
イターテクツバイ。イクバイ。ガツコウヘイターテクツバイ。
イッテキマース。

イッテキマス。イッテマイリマス。
イッテクルセンナ。イッテクルヨ。
イッテクルケン。
アイバーイタテクルケンノー。
イタテクツターノー

イッテキマース。ジャイッテクルケン。
イッテキマース。
イテクルバイ。イテクルバイタ。
イッテクルゾ。イッテキマス。
イッテクルヨーキョウハオツーナルカンシレンゾー。イッテキマス。

ソナ、イチクルデ。
イッテキマース。
イテクルド。
イッテキマース。イッテクルキネ。

イッチクルゾー。イッチクルキノー。
イチェクルデー。
イッテクルデー。
イッテキマス。イッテクルデ。

ホンナライチェクルキ。
イチェクラー。イクドー。デカクルキ。イチェキマース。

ソナライツテキマス。
イツテキマース。イツチキマース。
ヨオイテクツド…オイオイ。
イツテクルバイ。
イツテキマス。イツテクルワ。イテクツド。
ソナライツテクルワネ。
イテクルヨー。
イツテキマス。
イタテクツデナ。イタツキヒデナ。
イツテクルワ。イツテキマース。
イテクルワ。

イタテクイデーヨー。
イタテクイデー。
イタークツデナ。
ソイジャ。イタツクツデ。イタツキモンデ。イタテキモソ。イツテキマース。
イタキモースデ。
イタツキモンデーマトンシャキオツケヤイヨー。イタツクツデナー。
イタツキモンデ。
イツテキマース。イタテクツデ。
イツテキマス。イタツキモンデ。
イタツクツデネ。
イタツクツデ。
イジキョウロ。イジキバテキョウロイー。
イジキャヲロ。
イジフィ、イジキャーブラ。
イジキュンドー。

イジカイー、イジキャーイラ。
ンジ、クーイー。

IV. W.Viereck 博士による言語地図の解釈技術の提供について

平成 16 年 11 月 16 日に、ドイツのバンベルク大学教授 W.Viereck 博士が広島大学で講演及び学術交流を行う計画が持ち込まれた。旧知の人である。現在、ヨーロッパの地理言語学会の会長であり、かつ、ヨーロッパ言語地図の指揮を執る中心的な学者である。ヨーロッパ地理言語学の泰斗と言って良い。もう、十二年もの長きにわたり、ヨーロッパ言語地図の主幹を務めている。それだけ、ヨーロッパの諸学者からの信望が厚いということである。いろいろな意見の人がいても、それらをまとめ上げていく力量を持った人だと言うことが出来る。

いつも笑みを絶やさず、穏和を心がける人徳者である。方言の研究者には、我慢強い人が多い。彼も辛抱強いところがある。じっと我慢して、耳を傾け、聞き入るところがある。敏感なのだが、大らかさを前面に出す。

私は、データの整理に多忙で、平成 15,16 年度には、国際的な学会での発表が叶わなかった。そこで、彼が、言語地図の解釈についての講演と学術交流を持ち掛けて来られたことを歓迎することにしたのである。

テーマは、「なぜ蝶はバタフライと呼ばれるのか?」という魅力的なものであった。さすがに、題目の付け方にも、場数を踏んだ学者の神髄が伺い知れて有益であった。

彼は、バンベルク大学で 6 人のスタッフを指導して、ヨーロッパ言語地図のセンターを運営している。ヨーロッパの全土が、彼の指示に従うのだから、力量もさることながら、知徳にも勝れていなくてはならないことは明白である。ヨーロッパ言語地図の解釈ができるということは、少なくとも、多言語使用が可能な人だということである。マルチ言語人間でなくては、ヨーロッパの言語地図の解釈は手に負えないからである。歴史と文化と宗教と民族との織りなす複雑な棲み分けについて、深い理解を持っておられた。スケールの大きな発言には、吸い込まれる魅力があった。かつ、今回のような発想法への視点は、兼ねてから「あいさつ表現儀礼」の地図で試行してきた方法と同じなので、共感する点が多かった。

私は「あいさつ表現儀礼」地図の解釈で発想法に関心を持っている。W.Viereck 博士も、蝶の命名心理に、宗教的な発想法を見出している。そして、ヨーロッパの言語層に幾層かの文化史を解釈していた。恐らく、民族の移動とも重ねて考えられる裏付けが存するのであろう。言語事象の存在を確認しつつ、大胆に言語史を構想していくところは、見事であった。

以下に、彼が当日に、読み上げた英文原稿を掲げる。日本では、まだ、音韻法則に従って、事象の類音牽引だとか類推変化だとか言って、言語地理学に拘っているけれども、彼は、もっと自由に思索の翼を羽ばたかせている。そんな自由な飛翔の姿が特に印象的であった。

彼も私も、ともに、地理言語学、GEOLINGUISTICS の colleague なのである。

Chasing Butterflies: Why is a Butterfly called Butterfly?

Wolfgang Viereck

1. The butterfly in popular religious beliefs

The second edition of the *Oxford English Dictionary* informs its readers that the reason of the name *butterfly* for "an insect belonging to any of those diurnal species of lepidoptera, or scaly-winged flies, which have knobbed antennae, and carry their wings erect when at rest" is unknown. The *OED* continues: "Wedgewood [in his *Dictionary of English etymology* published between 1859 and 1865] points out a Dutch synonym *boterschijte* in Kilian, which suggests that the insect was so called from the appearance of its excrement. Moreover, the *OED* documents *butterfly* in Old English (*buttorfléoze*) and refers to identical expressions in Dutch (*botervlieg*) and modern German (*butterfliege*), expressions now obsolete in both languages.

The editors of the *OED* can be helped in this respect. Rescue comes from earlier popular religious beliefs where butterflies played a prominent role. Like no other animal the butterfly appears destined as the outward image of the soul. In the same way that the butterfly develops from the aurelia, the soul develops from the dead body. As a soul animal the butterfly was for the ancients a symbol of immortality. Already on Etruscan scarabei of the 5th century the butterfly is the image of the soul. In antiquity one finds this insect everywhere on sarcophagi.

The concept of the soul butterfly is present throughout the Middle Ages down to modern times. Occasionally the notion assumes a Christian colouring. The development of the aurelia into a butterfly was compared with the teaching of the Resurrection. That is why one finds butterflies occasionally on tombs of Christians. This practice, however, would seem to have been taken over from the prehistorical pagan period. The white butterfly was and still is the symbol of innocence. In Ireland, to give one example, one takes the white butterfly for the

soul of a dead person that is on the way to paradise. Similar popular beliefs still exist in other parts of the world.

Relics of totemism are still to be found in connection with butterflies. In Samoa butterflies are venerated as a god and names of butterflies also point to totemism: in Rhaeto-Romance and in Russian the butterfly is called *mammadonna* and *babočka/babuška* respectively, i.e. 'grandmother'.

Closely connected with the animistic role of the butterflies is their significance as fairies or witches, i.e. their anthropomorphic designations. These abound in European languages. We find, for instance, hobgoblin names for butterfly in Italian *farfarello* or French *farfardet*, both closely connected with *farfalla* 'butterfly'. *Witch* in Scotland is a name for a moth and there are many names for a butterfly in Germany such as *Milchdieb*, *Milchstehler*, *Molkendieb*, meaning 'thief of milk'. And with this we return to the question raised in the title of this paper. Especially in the Germanic area the belief was widespread that witches in the form of butterflies stole milk and butter. Compounds with *butter-* occur most often, such as English *butterfly*, German *Butterfliege* and Dutch *botervlieg*, *botervogel*, but also *boterwif* and *boterhex*, expressions that clearly show the belief in witches.

Referring, as I did, to kinship and anthropomorphic designations for the butterfly is one thing, to put them in some kind of structure another. This is hardly possible by looking only at one language or a few at best. We need more data from a much larger area and, consequently, from many more languages in order to come up with convincing results, and it is here that the European linguistic atlas comes into play.

2. Some background information

The *Atlas Linguarum Europae* (ALE) has been in existence for over a quarter century now. Recently fascicle 6 of volume I appeared (Viereck 2002), fascicle 7 is with the publisher and the manuscripts of fascicle 8 are now being prepared for publication. The ALE can be called a linguistic atlas of the fourth generation, being preceded by regional and national atlases as well as by atlases of

language groups.¹ Atlases of the fifth type, i.e. on entire language families such as Indo-European, or on the final type, namely a world linguistic atlas, do not exist as yet. The ALE is the first continental linguistic atlas. Its frontiers are neither political nor linguistic but simply geographic.² The choice of the continent has nothing to do with Eurocentrism but only follows from the present state of research.

The linguistic situation in Europe is quite complex. No fewer than six language families are present here: Altaic, Basque, Indo-European, Caucasian, Semitic and Uralic. In these language families altogether 22 language groups, such as Germanic and Romance, can be counted. These, in turn, consist of many individual languages. It thus becomes apparent that the demands on the scholars to interpret the heterogeneous data collected in 2,631 localities from Iceland to the Ural mountains are very high indeed.

The ALE is, primarily, an interpretative word atlas. It uses both traditional and innovative methods. Among the former onomasiology and semasiology must be mentioned. Further below I shall deal with one such notion. Motivational mapping, however, is an innovative kind of interpreting geolexical data. It goes beyond an interest in etymology and asks for the causes, the motives in designating certain objects. Only in a large-scale project such as the ALE can this approach be successfully pursued. In national, let alone regional linguistic atlases, the area is too small for the approach to be productive. This may be one reason why it has aroused so little interest prior to the ALE. Another may be seen in de Saussure's dominance in modern linguistics. The arbitrariness of the linguistic sign, important as it is for the functional aspect of language, left hardly any room for the genetic aspect of language, i.e. for the serious study of motivations. Seen more narrowly, however, the motivation of a linguistic sign is not in opposition to its arbitrariness, as the choice of a certain motive itself is not obligatory.

The latter-mentioned aspects point to the past and it comes as no surprise that insights into the ethnolinguistic origins of Europe are also expected from the ALE. This is a most lively and controversially debated field at present where archeologists and geneticists join forces with linguists as the works of Renfrew (1987), Cavalli-Sforza & Ammerman (1984), Sokal et al. (1992) as well as of Gamkrelidze & Ivanov (1995) reveal.³ In the Uralic area the Continuity Theory, first advanced by archeologists then by linguists, seems now accepted by the majority of the specialists. According to

this theory Uralic peoples and their languages have lived in their present historical territories since the Mesolithic Age.⁴ Alinei (1996) adopts a similar approach for Indo-European arguing that there has never been an Indo-European invasion and that Indo-European languages have followed the same diffusion pattern as the Uralic languages.⁵

As regards the ALE, insights into Europe's cultural past follow less from loanwords and from reconstructed roots,⁶ although the project also has important contributions to its credit in these two areas, but rather from motivations in so far as they are transparent. I will draw mainly on ALE data but also on my own research in illustrating Europe's cultural history.

3. Cultural history and religion

As religion is the basis of every culture, the frame of reference is the history of religions. The religions' historian Donini (1977, 1984) has convincingly shown that in a classless society everything is natural and supernatural at the same time. The distinction between 'sacred' and 'profane' came later. As any class of realia such as plants, animals and natural phenomena including planets is magic, they thus have a magico-religious character whose earliest form manifests itself in totemism, in totemic relationships with various classes of realia. In primitive societies this is still observable today.⁷ This relationship assumes different manifestations as will be shown later.

The first to have proved that modern folk literature preserves very ancient myths and conceptions was Propp (1946/1987). His insights as well as Riegler's (1937/2000) are of great importance in interpreting the dialectal data. These data show that the cultural history of Europe is not made up of random elements and events but follows a unified, well-structured pattern where three separated layers can be distinguished.

3.1. The Christian/Muslim layer

The layer that can be recognized and dated most easily belongs to history, namely to Christianity and Islam. As this is the most recent level, it also occurs most frequently in the data. Within this layer Christian motivations appear much more often than Muslim ones, thus mirroring the difference in the areal spread of the two religions in Europe.

Among animals, designations of the smallest and weakest pig of a litter can be mentioned in this category. In England and Wales apart from *Daniel*, *Anthony(-pig)* was elicited, sometimes as *Tanthony*, a wrong separation of *Saint Anthony*. He was the patron saint of swineherds to whom the smallest pig of each litter was usually vowed.

The butterfly,⁸ too, is Christianized in Europe, mainly in the South, as 'little angel,' 'little Easter,' 'the pope's wife', but also in Finland as 'Brigit's bird.' Also the lady-bird yields a rich harvest everywhere in Europe. Most commonly a Christian or Islamic religious being or notion is associated with another animal, such as a bird (cf. English *lady-bird*), a hen (Danish *marihøne*, French *poulette au bon Dieu*, Catalan *gallineta de la Mare de Deu*), a cow (English *lady-cow* or *cow-lady*, French *vache à Dieu*, Italian *vacchetta della Madonna*), an ox (Spanish *buey de Dios*, Romanian *boul-popei*) or a beetle (German *Marienkäfer*, English *lady-bug*). The religious being or notion can be 'God' (Spanish *arca de Dios* 'God's chest'), 'angel' (Breton *elik doue* 'God's little angel'), Jesus (Swedish *Jesu vallflicka* 'Jesus' shepherd'), ('Virgin) Mary' (Swedish *jungfru marias nyckelpiga* 'Virgin Mary's key servant,' Italian *anima della Madonna* 'soul of the Holy Virgin,' French *bête de la Vierge* 'animal of the Holy Virgin') or the names of saints such as, in Italy, *S. Martino*, *S. Gioani*, *S. Nicolà*, in France, *Saint Jean*, *Saint Jacques*, *Sainte Catherine* and, in Spain, *San Antón*. In the Muslim area we find 'Allah,' 'mosque' and 'Fatímah', the name of Mohammed's daughter.⁹

For plants the magico-religious motivations are more numerous. The pansy (*Viola tricolor*) may be called *Heiliges Dreifaltigkeitsblümchen* ('Holy Trinity flower') in German. The daffodil (*Narcissus Pseudo-Narcissus*) is *Saint Peter's bell* in Wales, and *Saint Peter's herb* is an expression for the cowslip (*Primula veris*) in parts of England. Very many plant-names in the British Isles occur with the motivation 'devil' as the EDD, s.v. 'devil' II. 2 reveals. The great reedmace, *Typholia latifolia*, is attested with 'holy,' as is the Glastonbury thorn, *Crataegus Oxyacantha*, whereas the dandelion, *Leontodon Taraxacum*, and the rose-root, *Rhodiola rosea*, show a motivation with 'priest' in Britain¹⁰ and the woolly-headed thistle, *Carduus eriophorus*, one with 'friar' there.¹¹

Natural phenomena as well as planets also testify to a Christianization and Islamization in Europe. The classic example in the ALE is the rainbow—and not only for the most recent level but for the whole geolexical stratigraphy. Everywhere in Europe we find compounds with, e.g., 'belt,' 'bow,'

'bridge,' 'ribbon,' 'ring' plus a religious motivation such as 'God's belt,' 'Noah's bow,' 'St. Barnaby's crown' or 'Allah's bow.' Once the basic structure of the classificatory system had been worked out, it became clear that the rainbow had been considered sacred by European peoples and that with the advent of the new religions lexical innovations were coined expressing the same relationship that had existed earlier.¹² Also the moon once had a religious veneration, still discernible in Hungarian *istenkalácsa* ('God's cake').¹³ German *Herr Mond* as a form of address belongs to a pre-Christian cult.¹⁴

3.2. The prehistoric layers

Within the prehistoric period two levels can be distinguished, one characterized by 'supernatural,' 'superhuman' pagan figures and, leaving anthropomorphism, the other by still earlier zoomorphic and kinship representations. The basic structure has remained the same from prehistoric to historic times.

3.2.1. The zoomorphic layer

In the most archaic layer that can be distinguished, i.e. the zoomorphic and totemic layer characteristic of egalitarian societies, the realia investigated appear in the form of either an animal or a kinship name.

Starting with supernatural, magico-religious beings, an appropriate example would be the last corn sheaf cut at harvesting into which the vegetation demon, it was believed, retreated.¹⁵ In Ireland we find *granny* ('grandmother') and in German *Mutter* ('mother') and 'old grandmother' as designations for the last corn sheaf. Animal names are also attested for the last corn sheaf: *girria* ('hare'), *hare's bite/sheaf/seat/tail*, *cow*, *hog*, *piardóg* ('crayfish'), *rabbit* and *swallow* occur in Ireland and many more are recorded in Germany (cf. Beitzl 1933/2000).

Coming to animals, Riegler (1937/2000) had already interpreted wild animals and insects as relics of a totemistic view of the universe in which they would be our closest relatives. This relationship, similar to kinship, is consequently expressed by kinship terms. Propp (1946/1987) notes that the totem animal in its original form is embodied by the 'mother' and by matrilinear kin. This is

indeed what we most often find in European dialects.¹⁶ Many kinship names were recorded for the lady-bird: 'grandmother' in, e.g., Polish, Russian, Serbian and Croatian, 'mother' in, e.g., Romanian, Belorussian, 'aunt' in German and Italian, 'bride and spouse' in, e.g., Turkish, Albanian, Italian, 'sister-in-law' in Bulgarian. 'Grandfather' occurs in Swedish and Maltese and 'uncle' in Albanian.

The butterfly as a relative appears as 'grandmother' in Rhaeto-Romance *mammadonna*, in Russian *babočka* as well as in other Slavic languages, as 'mother' in German and Sardinian and as '(grand)father' in the Uralic area.

Kinship names for the weasel abound: ('little')'bride' is attested, e.g., in Turkish, Bulgarian, Romanian, Italian, Greek, Albanian and German, 'godmother' in, e.g., Galician and Spanish (*comadreja*), 'daughter-in-law' in Portuguese, Occitan, Italian, Turkish and Hungarian, 'mother' in England¹⁷ and 'godfather' in German.

Many more examples of this type can be cited. Thus the bear is called 'mother,' 'father' and 'grandfather' by Turkic and Tartar peoples and 'dear grandfather' by the Swedes. The Hungarians call it 'godfather' and the Lapps 'clever father.' The rabbit is 'brother' in English. The fox appears as 'godfather' in German (*vaddermann voß* in Low German or *Herr gevatter* in High German) and as *mon cousin* in French. The French word *parent* 'relative' is a name for cuckoo in that language, and the toad is called *großmudder* 'grandmother' in Low German.

It must be interpreted as a sign of prehistoric totemism when tribes or their leaders were given names of animals. The leaders of the Jutes *Hengist* ('stallion') and *Horsa* ('horse') or the leader of the Goths *Berige* ('bear') are cases in point, as are the Germanic *Wylfingas* ('wolf'), the Italic *Hirpi* (from Latin *hirpus* 'wolf') and the *Piceni* (from Latin *picus* 'woodpecker').

Compared with animals, plants do not play the same role in totemism. Some plants are given kinship names, others are associated with animals. The pansy (*Viola tricolor*) is called *bratky* ('brother and sister') in the Ukraine. For England the EDD lists many plant names with, e.g., the motivation 'pig,' 'fox,' 'goat,' 'toad,' 'cat' and 'horse,' where, however, the magico-religious belief is not always clear.

As to natural phenomena and planets, the moon is called 'grandfather' in Nenets and thunder is called 'father' and 'grandfather' in the Finno-Ugric area. These relationships are clearly totemic. In

this class of realia animals occur rather often. For the rainbow we have 'dragon,' 'snake,' 'ox,' 'cow,' 'fox,' 'drinker'¹⁸ in many European languages and dialects. Other zoomorphic representations appear with thunder, namely 'dragon' and 'serpent' and with lightning ('whale' and 'dolphin'). Mist is associated with the 'fox' and the 'wolf' in France and Germany, the 'eagle' with storms in Northern Europe and the 'cat' with the air trembling with heat (in parts of Germany).

3.2.2. The anthropomorphic layer

This middle layer, both pre-Christian/pre-Islamic and post-zoomorphic, is characterized by anthropomorphic representations. The same notions that provided examples for the other layers can be drawn upon here.

Animals provide quite a number of magico-religious names. For the weasel there is 'fairy' in English, 'witch' in French, 'Diana' in Sardinian, 'demoiselle' in German and 'domestic genius' in Russian.¹⁹ The lady-bird is associated with the Finno-Ugrian god *Ukko* (the Old Man) and in Frisian with the elf *Puken* ('puck'). The butterfly appears in Austria as 'the forest elf'. The grasshopper may be 'pregnant mother' and 'lady' in Italian and 'demoiselle' in French. The motivation for the smallest pig in the litter in Ireland is 'fairy' (*sióg* and *siabhra*). The same motivation is attested in England for the glow-worm, while 'witch' is noted there for the swallow.

As for plants, the motivation 'fairy' occurs in England for the *Primula veris*, 'witch' in English dialects for *Pyrus Aucuparia*, *Leontodon Taraxacum* and *Digitalis purpurea*. Furthermore, the EDD notes 'Jupiter' for *Sempervivum tectorum*.

For the supernatural powers such as the corn spirit we also encounter anthropomorphic motivations such as, in Ireland, *carlin*, *seanbhean* (both meaning 'Old Woman'), *old maid*, (*old*) *hag*, *cailleach* ('old hag,' also meaning 'witch'). A mythical 'Old Man' is widespread in Germany, as is a mythical 'Old Woman' (cf. Beitzl 1933/2000).²⁰

Among natural phenomena and planets, the rainbow has anthropomorphic representations everywhere in Europe. In the Turkic area they are associated with *Tängri*, in the Uralic area with *Ukko* and *Tiermes*, in the Indo-European area with *Laume* (in the Baltic region), *Iris*, 'Old Woman' (in the Romance region), often together with 'bow,' 'belt' or 'ribbon.' For thunder as well as for lightning

one encounters Germanic Thorr, Lithuanian Perkunas and the Finno-Ugric Ukko. Names for cloud can be motivated by 'Old Man,' as in Swedish. For the moon we find 'Old Man' in the Nenets area and 'hoary Old Man' in Ostiac.

4. Conclusion

In the process of the cultural development of Europe we thus find recurrent structural patterns: the same reality was first given kinship and zoomorphic names to be followed by anthropomorphic names²¹ and finally by Christian and Islamic names – and this across all language and dialectal borders. While dating the last-mentioned layer is unproblematic, Alinei assumes

that dating the anthropomorphic representations of reality is connected with socially stratified societies, typical of the *Metal Age*, while zoomorphic and kinship representations are connected with more primitive societies of the *Stone Age*.

More precisely, and also from a glottogenetic point of view, kinship names used for family relations would obviously exist already before magico-religious thinking began (some time in Middle and Upper Paleolithic, when the first forms of burial appear). Then we would need to know something like totemism, in the Upper Paleolithic, to allow the attribution of kinship names to animals (and less frequently to plants and other realia), and those of animals to other referents. The frequent attribution of magico-religious and kinship names to insects can be explained by their central role in traditional feeding (1997, 27).

Also designations for bread (cf. Viereck 2000), for names of children's games (cf. Viereck 2003) and for names of diseases (cf. W. Viereck & K. Viereck 1999) follow the same pattern. Let me just mention the disease that appeared, most unfortunately, almost daily in the press not long ago, namely *Bacillus anthracis* or *anthrax*. In Serbian and Croatian either a taboo word is used, 'the evil', or anthrax is connected with an animal, a demon thought to inflict the disease, namely a wolf or a sheep. Later *anthrax* had anthropomorphic names like the English *elf cake* or Czech *Bozek* (the name of a god). Again later we find for *anthrax* attested *heiliges Feuer* ('holy fire') in German and *holy fire* in English, both parallel to Latin *sacer ignis*. Or there are in the historical period expressions like 'St.

Anthony's revenge' or 'St. John's revenge' for *anthrax*. The saints took over certain traditional functions of their predecessors and were thought to be responsible not only for healing diseases but also for inflicting them on those who were disobedient – a genuine pre-Christian thought.

As this last example clearly shows, the three periods mentioned, of course, do not end and begin abruptly. Each one of them lasted for thousands of years. Archaeological finds show that also between the Stone Age and the Metal Age there were fluid transitions and that anthropomorphic representations also from the Neolithic Age were found (Müller-Karpe 1998). That the transitions and overlaps between the pagan and Christian layers can be documented much better is due to their being much closer to our time. Up to the early 4th century A.D. the early Christian church was an underground church and it took many centuries until the Christian faith had penetrated everywhere in Europe. Only in the 8th century A.D. was the *Indiculus superstitionum et paganiarum* written in either Fulda or Mainz with instructions how to deal with pagan cults, spells and fortune-telling (Müller-Kaspar 1996, 2, 419).

With new religious beliefs a wave of new designations followed, yet the old conceptions often remained the same. To take just one example out of many:

When Christianity came to Britain, the bright yellow flowers of the plants in the *Hypericum* family that had been associated with the golden brightness of Baldur the sun-god came to be called St. John's wort, as Baldur's Day became St. John's Day. The plant continued to be thought a cure for wounds and on St. John's Eve good Christians wore a sprig of it to ward off evil spirits and especially to protect themselves against the stray thunderbolts of the gods (Ashley 1974, 116).

St. John's Day is the Christian equivalent of the summer solstice, one of the most important events in prehistoric times. In the early Christian period pagan thought was alive and well. However, examples of this can easily be found today: The initials of Caspar/Kaspar + Melchior + Balthasar + the year are still written on the entrance doors of people's houses in Catholic areas in Germany, in Italy and in Poland on Epiphany, January 6, to protect the people from evil of any kind – the explanation, sometimes advanced, that this custom refers to the biblical passage "Christus mansionem benedicat"

rather than to the three holy kings is highly improbable. This possibility is not even alluded to in such reference works as Erich – Beitzl (1981) – and, to mention a final example, small pictures of Christopher are hung up by car drivers as a protection in many countries, such as Ukraine and Germany. Apparently Enlightenment had no effect on people's piety.

The ALE is naturally based on European dialects. The adopted motivational approach has revealed some important pieces in the mosaic of the cultural development of Europe. Their implications, no doubt, transcend the frontiers of the European continent. In the light of the complementary nature of world cultures it would be highly desirable if the picture were complemented by insights gained about other cultures.²²

NOTES

¹ On the origins of geolinguistics cf. Viereck (1973).

² Nevertheless its set-up is basically national. At present there are 39 states of importance in Europe, but altogether 70 peoples live on the continent. As a compromise the ALE has 47 national committees. The number of peoples is still much higher. Whether and, if so, how they are represented in the project depends on how the states treat their minorities. On the wider and lesser used languages in Europe and the statuses of the latter, cf. the maps of Escarré's International Center for Ethnical Minorities and Nations in Barcelona and those in Goebel 1997.

³ There is no room to discuss such vast problems here. For a linguistic criticism of Renfrew's views cf. Meid (1989); for a criticism of Linguistic Paleontology cf. Alinei (1991). In this connection mention should also be made of the—heavily criticized—nostratic theory (on which see, e.g. Shevoroshkin 1989a, 1989b, 1990, 1992), of the typology of linguistic universals, and of the *Sprachbünde*.

⁴ Cf., e.g., the contributions in *Fennoscandia archeologica* 4 (1987), 6 (1989), Sammallahti (1995) and Siiriäinen (1995).

⁵ Mallory's map (1989, 144) is quite revealing in this context. It presents some of the solutions to the Indo-European homeland problem proposed since 1960.

⁶ Loanwords usually belong to the historical period and are thus too young. Reconstructed roots involve very early periods but are usually motivationally opaque and thus not very revealing for a cultural analysis.

⁷ See, e.g., Beth (1936/2000) and Markey (1983,1985). There are, of course, more classes of realia. For names of diseases cf. W. Viereck & K. Viereck 1999, for names of bread cf. Viereck 2000 and for names of children's games cf. Viereck 2003. The model used was the same as that presented here.

⁸ Cf. Dutch *botervlieg*, German *Butterfliege*. The OED surprisingly notes "The reason of the name is unknown" (s. v. 'butterfly'). In the Germanic area the belief was widespread that witches in the appearance of butterflies stole butter, milk and cream. Compounds with *butter-* occur most often. Dutch *boterhex*, *boterwif* clearly point to the belief in witches.

⁹ See the long lists in Barros Ferreira/Alinei (1990) also with regard to other motivations.

¹⁰ This is also true of some animal names (cf. EDD, s.v. 'priest' 3).

¹¹ Ashley (1974) provides additional plant names of the British Isles (and not only for the Christian layer). Alinei (1997) found basically the same motivations in Italy and provides many examples.

¹² See Alinei (1983).

¹³ The investigator labeled this form as 'humorous' and thus modern, which, of course, it is not.

¹⁴ Similarly the address in German *Frau Sonne*. With regard to the sun Tuailon notes: "Il est sans doute regrettable que le genre ne soit pas indiqué; cette donnée aurait peut-être, en domaine germanique du moins, montré quelques régions qui donnent au soleil un autre genre que celui de la langue nationale" (1983, 5). Also for the moon the gender in the various languages was not noted. Cf. fn. 22.

¹⁵ See also Frazer, Vols. 5,1 and 5,2 (1913/1990) and Beitzl (1933/2000) on this notion.

¹⁶ That women played a central role also in other parts of the world is attested, e.g., by rock paintings in Namibia in Africa where women are depicted in scenes that suggest a ritual or ceremonial background. A matriarchal social order still exists today in, e.g., Micronesia where only women may own land. Despite a US influence of over half a century an animistic religion is still to be found there among the older population.

¹⁷ Cf. Old English *béomodor* 'beemother.'

¹⁸ On dating the rainbow as a 'drinking animal' cf. Alinei (1997). In addition it is worth mentioning that the rainbow as a drinking animal is attested also beyond Europe in Japan and in China. In Chinese culture it is a double-headed dragon drinking water on both sides of the river.

¹⁹ Taboo motivations also belong here, as Italian *domnola* 'little woman' or French *belette* 'little beautiful woman,' both names for the weasel.

²⁰ On Slavic *baba* ('Old Woman')-formations cf. Alinei (1988).

²¹ Leo Frobenius, the founder of cultural morphology, noted already in 1929, 248 ff.: "...daß einer Periode des Anthropomorphismus eine ältere der Tieranpassung vorangegangen sein müsse" [...that a period of anthropomorphism must have been preceded by an older one of zoomorphism].

²² I am thinking of work similar to that by Frobenius who, in 1929, was concerned with the gender of the sun and the moon and presented three cosmogonic groups with insightful maps world-wide in which the sun and the moon were linked with 'man and wife,' with 'brother and sister' and with 'twin brothers.' The last-mentioned was to him the oldest view of life. Unfortunately, some of Frobenius' interpretations were tied to the prevailing thoughts of the time and can thus not be accepted.

REFERENCES

- Alinei, Mario. "Arc-en-ciel," *Atlas Linguarum Europae*. Vol. 1 - *Commentaires*. Premier Fascicule. Assen: Von Gorcum, 1983, 47-80.
- Alinei, Mario. "Slavic *baba* and other 'Old Women' in European dialects. A semantic comparison," *Wokół Języka*, 1988, 41-51.
- Alinei, Mario. "New hypotheses on the linguistic situation of Europe: The contribution of semantics and dialectology," *Quaderni di Semantica*, 12, 2 (1991), 187-203.
- Alinei, Mario. *Origini delle Lingue d'Europa*. Vol. 1: *La Teoria della Continuità*. Bologna: Il Mulino, 1996.
- Alinei, Mario. "Magico-religious motivation in European Dialects: A Contribution to *archeolinguistics*," *Dialectologia et Geolinguistica*, 5 (1997), 3-30.
- Ashley, Leonard R. N. "Uncommon names for common plants: The onomastics of native and wild plants of the British Isles," *Names*, 22 (1974), 111-128.
- Bächtold-Stäubli, Hanns & Eduard Hoffmann-Krayer (eds.). *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*, 10 Vols. Berlin: de Gruyter 1927 – 1942, rep. 2000.
- Barros Ferreria, Manuel & Mario Alinei. "Coccinelle," *Atlas Linguarum Europae*. Vol. I - *Commentaires*. Quatrième Fascicule. Assen: Van Gorcum, 1990, 99-196.
- Beitl, R. "Korndämonen," in Bächtold-Stäubli, Vol. 5, 1933/2000, 250-314.
- Benkő, Loránd. *Etymologisches Wörterbuch des Ungarischen*. Budapest: Akadémiai Kiadó, 1993-1997.
- Beth, K. "Totemismus," in Bächtold-Stäubli, Vol. 8, 1937/2000, 1034-1046.
- Brunner, Hellmut et al. (eds.) "Grab", in *Lexikon Alte Kulturen*. Mannheim: Meyers Lexikonverlag, 2 (1993), 119-123.
- Çabej, Eqrem. *Studime gjuhësore*. Vol. 1 Prishtinë: Rilindja, 1975-1977.
- Çabej, Eqrem. *Studime etimologjike në fushë të shqipës*. Vol 4. Tiranë: Akad. e Shkencave e RPS të Shqipërisë, 1996.
- Cavalli-Sforza, Luigi & Albert J. Ammerman. *The Neolithic Transition and the Genetics of Populations of Europe*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1984.
- Cihac, Alexandre de. *Dictionnaire d'etymologie daco-romane*. Osnabrück: Biblio Verlag, 1978 [1879].
- Ciorănescu, Alexandru. *Dicționarul Etimologic al Limbii Române*. București: Saeculum 2002.
- Corominas, Joan. *Diccionario crítico etimológico de la lengua castellana*. Bern: Francke, 1954.
- Dee, James H. *Lexicon of Latin Derivatives in Italian, Spanish, French and English: A Synoptic Etymological Thesaurus with Full Indices of Each Language*. 2 vols. (Alpha-Omega Reihe A, 190/1, 190/2). Hildesheim: Olms-Weidmann, 1997.
- Donini, Ambrogio. *Enciclopedia delle religioni*. Milan: Teti, 1977.
- Donini, Ambrogio. *Lineamenti de storia delle religioni*. Rome: Editori Riuniti, 1984.

- EDD = Wright, Joseph. *The English Dialect Dictionary*. 6 Vols. London: Henry Frowde, 1989-1905.
- Erich, Oswald A. & Richard Beitzl. *Wörterbuch der deutschen Volkskunde*, 3rd ed. Stuttgart: Kröner 1974, rep. 1981.
- Fennoscandia archeologica*, 4 (1987) and 6 (1989).
- Falk, Hjalmar & Alf Torp. *Wortschatz der germanischen Spracheinheit* (unaltered reprint of the 4th ed. Göttingen 1909; originally published as August Fick, *Vergleichendes Wörterbuch der indogermanischen Sprachen, Teil 3.*) Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1979.
- Fraenkel, Ernst. *Litauisches etymologisches Wörterbuch*. 2 Vols. Heidelberg: Winter and Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1962-1965.
- Frazer, James G. *The Golden Bough. A Study in Magic and Religion*. 13 Vols. London: Macmillan, 1913/1990 (rep. of 3rd ed.).
- Frisk, Hjalmar. *Griechisches etymologisches Wörterbuch* (Indogermanische Bibliothek. Zweite Reihe: Wörterbücher). Heidelberg: Winter, 1954-1972.
- Frobenius, Leo. *Monumenta Terrarum. Der Geist über den Erdteilen*, 2nd ed. of *Festlandkultur*. Frankfurt: Buchverlag, 1929.
- Gamkrelidze, Thomas V. & Vjaceslav V. Ivanov. *Indo-European and the Indo-Europeans*. 2 Vols. Berlin: de Gruyter, 1995 [English translation of *Indoevropskij jazyky indoevrupejcy*. 2 Vols. Tbilisi, 1984].
- Goebel, Hans. "Sprachkarten / Linguistic Maps / Cartes linguistiques," *Kontaktlinguistik/ Contact Linguistics/Linguistique de contact*. Vol. 2. Berlin: de Gruyter, 1997.
- Hofmann, J. B. *Etymologisches Wörterbuch des Griechischen*. München: Oldenburg, 1950.
- Janich, Nina & Albrecht Greule (eds.) *Sprachkulturen in Europa. Ein internationales Handbuch*. Tübingen: Narr, 2002.
- Kammerer-Grothaus, Helke. "Grabbauten", in Hubert Cancik et al. (eds.) *Der neue Pauly. Enzyklopädie der Antike*. Stuttgart: Metzler, 4 (1998), 1173-1178.
- Kiliari, Angelika. "Sprachliche Heterogenität im griechischen Sprachraum", *Sociolinguistica*, 16 (2002), 110-117.
- Kluge, Friedrich. *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. Prepared by Elmar Seebold. 24th ed. Berlin: de Gruyter, 2002.
- Koivulehto, Jorma. "Vanhimmista germaanista lainakosketuksista ja niiden ikäämisestä", *Virittäjä: Kotikielen seuran aikakauslehti*, 1976, 33-47.
- Kühnel, Helmut. *Wörterbuch des Baskischen*. Wiesbaden: Reichert, 1999.
- Kulonen, Ulla-Maija. *Suomen sanojen alkuperä: etymologinen sanakirja*. Vol. 1: A-K. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, 1992.
- Löpelmann, Martin. *Etymologisches Wörterbuch der baskischen Sprache. Dialekte von Lebourd bis Nieder-Navarra und La Soule*. Berlin: Mouton de Gruyter, 1968.
- Machado, José Pedro. *Dicionário etimológico da língua portuguesa*. Lisbon: Livros Horizonte, 1977.

- Mägiste, Julius. *Estonisches etymologisches Wörterbuch*. Helsinki: Helsingin Yliopiston Monistuspalvelu, 1982-1983.
- Mallory, J. P. *In Search of the Indo-Europeans: Language, Archeology and Myth*. London: Thames & Hudson, 1989.
- Markey, Thomas L. "Personal Names and Naming among the Fox: Totemic Typology," *Quaderni di Semantica*, 4 (1983), 367-394.
- Meid, Wolfgang. *Archäologie und Sprachwissenschaft: Kritisches zu neueren Hypothesen der Ausbreitung der Indogermanen*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft, 1989.
- Meyer, Gustav. *Etymologisches Wörterbuch der albanesischen Sprache*. (Reprint of the original edition Straßburg 1891.) Leipzig: Zentralantiquariat der DDR, 1982.
- Meyer-Lübke, Wilhelm. *Romanisches etymologisches Wörterbuch*. Reprint of the completely revised 3rd edition Heidelberg 1935. (Sammlung romanischer Elementar- und Handbücher, Reihe 3, 3.) Heidelberg: Winter, 1972.
- Müller-Karpe, Hermann. *Grundzüge früher Menschheitsgeschichte*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1998. 5 Vols.
- Müller-Kaspar, Ulrike. *Handbuch des Aberglaubens*. Wien: Tosa, 1996. 3 Vols.
- Müller-Wille, Michael. "Grab", in Robert-Henri Bautier et al. (eds.), *Lexikon des Mittelalters*. München: Artemis, 4 (1989), 1621-1628.
- Naso, Alessandro & Friedhelm Prayon. "Grabbauten", in Hubert Cancik et al. (eds.) *Der neue Pauly. Enzyklopädie der Antike*. Stuttgart: Metzler, 4 (1998), 1179-1185.
- OED = *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. prep. by J.A. Simpson & E.S.C. Weiner. Oxford: Clarendon Press, 1989. 20 Vols.
- Orel, Vladimir E. *Albanian Etymological Dictionary*. Leiden: Brill, 1998.
- Pfeifer, Wolfgang. *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*, 3rd unabridged ed. München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1997.
- Pingel, Volker. "Grabbauten", in Hubert Cancik et al. (eds.) *Der neue Pauly. Enzyklopädie der Antike*. Stuttgart: Metzler, 4 (1998), 1185.
- Pokorny, Julius. *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*. Bern: Francke, 1959, 1969.
- Propp, Vladimir. *Die historischen Wurzeln des Zaubermärchens*. Munich: Hanser, 1987. [German translation of *Istoričeskie korni volšebnoj skazki*. Leningrad, 1946].
- Puşcariu, Sextil. *Etymologisches Wörterbuch der rumänischen Sprache: Lateinisches Element mit Berücksichtigung aller romanischen Sprachen*, 2nd ed. Heidelberg: Winter, 1975.
- Renfrew, Colin. *Archeology and Language: The Puzzle of Indo-European Origins*. London: Cape, 1987.
- Riegler, R. "Tiergestalt" and "Tiernamen," in Bächtold-Stäubli, Vol. 8, 1937/2000, 819-842 and 863-901.

- Rix, Helmut & Martin Kümmel. *Lexikon der indogermanischen Verben. Die Wurzeln und ihre Primärstambildungen*, 2nd extended and improved edition. Wiesbaden: Reichert, 2001.
- Rolle, Renate & Petro Tolocko. *Archäologisches Wörterbuch. Deutsch, Russisch, Weißrussisch, Ukrainisch, Englisch*. (Hamburger Werkstattreihe zur Archäologie, Band 3.) Hamburg: LIT, 1998.
- Sammallahti, Pekka. "Language and roots," *Congressus Octavus Internationalis Fenno-Ugristarum*. Jyväskylä, 1995, 143-153.
- Semrau, Richard & Riitta-Inkeri Rump. *Langenscheidts Universal-Wörterbuch Finnisch. Finnisch - Deutsch, Deutsch - Finnisch*, 2nd ed. Berlin: Langenscheidt, 1981.
- Shevoroshkin, Vitaly V. (ed.). *Restructuring Languages and Cultures*. Bochum: Brockmeyer, 1989a.
- Shevoroshkin, Vitaly V. (ed.). *Explorations in Language Macrofamilies*. Bochum: Brockmeyer, 1989b.
- Shevoroshkin, Vitaly V. (ed.). *Proto-languages and Proto-cultures*. Bochum: Brockmeyer, 1990.
- Shevoroshkin, Vitaly V. (ed.). *Nostratic, Dene-Caucasian, Austric, and Amerind*. Bochum: Brockmeyer, 1992.
- Siiriäinen, Ari. "Recent trends in Finnish archeology," *Congressus Octavus Internationalis Fenno-Ugristarum*. Jyväskylä, 1995, 183-189.
- Sokal, Robert R., Neal L. Oden & Barbara A. Thomson, "Origins of the Indo-Europeans: Genetic Evidence," *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 89 (1992), 7669-7673.
- Steuerwald, Karl. *Deutsch - Türkisches Wörterbuch. Almanca - Türkçe Sözlük*, 2nd ed. Wiesbaden: Harrassowitz, 1987.
- Steuerwald, Karl. *Türkisch - Deutsches Wörterbuch. Türkçe - Almanca Sözlük*, 2nd ed. Wiesbaden: Harrassowitz, 1988.
- Tuailon, Gaston. "Soleil," *Atlas Linguarum Europae*. Vol. I - *Commentaires*. Premier Fascicule. Assen: Van Gorcum, 1983, 3-8.
- Vasmer, Max. *Russisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter, 1950-1959.
- Vendryes, J. *Lexique Etymologique de l'Irlandais Ancien*. TU. Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies and Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, 1978.
- Viereck, Wolfgang. "The growth of dialectology," *Journal of English Linguistics*, 7 (1973), 69-86.
- Viereck, Wolfgang. "The *Atlas Linguarum Europae* and its insights into the cultural history of Europe", in Jesse Levitt, Leonard R.N. Ashley & Wayne H. Finke (eds.), *Language & Communication in the New Century*. East Rockaway, NY: Cummings & Hathaway, 1998, 7-16.
- Viereck, Wolfgang. "Bemerkungen zur Kulturgeschichte Europas", *Posvećeno Pavlu Iviću. Južnoslovenski filolog*, 56 (2000), 1331-1342.
- Viereck, Wolfgang (ed.). *Atlas Linguarum Europae*. Volume I, sixième fascicule: *Commentaires and Cartes*. Rom: Istituto Poligrafico e Zecca dello Stato, 2002.

- Viereck, Wolfgang. "Der *Atlas Linguarum Europae* und seine Einsichten in die Kulturgeschichte Europas", *Historični seminar 4. Zbornik predavanj 2001-2003*. Ljubljana: ZRC SAZU, Založba, ZRC 2003, 119-130.
- Viereck, Wolfgang. "Laboristo, Arbeiter, ouvrier, workman, rabočij, obrero, operaio – etimologija kaj semantika rimarkigoj pri la plurlingveco de Eŭropo", *Scienca Revuo* 3/2004, 115-130.
- Viereck, Wolfgang & Matthias Goldammer. "Ouvrier, Arbeiter, workman, rabočij, obrero, operaio", in Brigitte L.M. Bauer & Georges-Jean Pinault (eds.), *Language in Time and Space. A Festschrift for Werner Winter on the Occasion of his 80th Birthday*. Berlin: de Gruyter 2003, 405-417.
- Viereck, Wolfgang & Karin Viereck. " 'Die seltzamen namen all'. Zu einigen Ergebnissen des Forschungsprojekts *Atlas Linguarum Europae*", in Eun Kim, Erwin Schadel & Uwe Voigt (eds.), *Aktive Gelassenheit: Festschrift für Heinrich Beck zum 70. Geburtstag*. Frankfurt: Peter Lang, 1999, 711-723.
- Völkl, Sigrid Darinka. "Die Sprachensituation nach dem Zerfall Jugoslawiens", in Ingeborg Ohnheiser, Manfred Kienpointner & Helmut Kalb (eds.), *Sprachen in Europa: Sprachsituation und Sprachpolitik in europäischen Ländern*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft, 1999, 319-334.
- Wade, Terence. *Russian etymological dictionary*. Bristol: Bristol Classical Press, 1999.
- Walde, Alois. *Lateinisches etymologisches Wörterbuch*, 3rd ed. by Johann B. Hofmann (Indogermanische Bibliothek. Zweite Reihe: Wörterbücher.) Heidelberg: Winter, 1930-1956.
- Wolf, Siegmund A. *Großes Wörterbuch der Zigeunersprache (romani tšiw): Wortschatz deutscher und anderer europäischer Zigeunerndialekte*. Mannheim: Bibliographisches Institut, 1960.

V. 今後の課題

日本では、まだ、社会言語学にのみ人々の関心が集中していて、その他への発展が見られない。はみだして叩かれるのを恐れている風情さえ感じられる。残念ながら、地理言語学が育っていない。ヨーロッパやアメリカでは、地理言語学会が出来ていて、既に四十年の歴史が積み重ねられているのに、日本では、言語地理学に留まっている。しかも、方言分布と国語資料との突き合わせに終始していて、本格的な地理的要因に基づいた言語史の解釈を目指すことへの意気込みが見えない。従来型の言語地理学なのである。

勿論、欧米でも、社会言語学は盛んである。言語の変種を研究する営みは、もともと、個人差が人間の宿命であり、それゆえに尊重されてきたことと無関係ではない。日本でも欧米でも、社会言語学が非常に盛んである。何でもかんでも、社会言語学と言ってしまふところがある。地理的な変異を問題とする事実についてさえ、社会言語学の領域でものを言おうとする。自分が古い型の方言研究では無いと言いたいために、社会言語学が専門だと言う人も少なくない。複雑に絡み合っていて、見かけ上の上着変わりに、社会言語学を使用する風情が見えたりする。

たとえば、言語共時態の地理的変異を通時態として GIS で問題にする時においてさえ、地理言語学と言えは済むところを、社会言語学の枠を広げた領域のこととして説明しがちである。地理的な広がりや、当然、歴史的な観点で問題としなくてはならない。社会言語学の基本は、空間ではなく、時間の斉一と社会位相の解明である。社会は規律や規範やしきたりや性差、階層、年齢差などの変種が関わるので、それらのカラクリを課題にする。

しかし、史的な変遷は、もともと社会言語学の問題ではない。歴史的な視点を導入してこなかったからである。歴史観は、比較言語学や言語地理学が専門にしてきたからである。それについてのわきまえがなくなったのであろうか。それとも、基本的な姿勢が流行にしがみつこうとしているのか、社会言語学と言いながら、地理的な歴史研究を漠然と行っているのは、奇妙な感じがする。全ての言語研究を、社会言語学と称しては、厳密性を欠かないか、と質問したくなる。

それらの境界を意識して越境しようとしているのなら、改めて考えることは可能である。ただし、先にも引用したが、Trudgill 氏は、二十年前に、社会言語学の限界を指摘して、言語地理学との融合が必要だと述べている。日本では、まだ、Trudgill 氏の認識のレベルにまで到達していないのであろう。

日本の多くの研究者が、言語地理学や社会言語学にしがみついている姿は、私にとっては滑稽に見える。欧米では、言語地理学を唱える人は、もはやいない。日本の方言研究者は、「言語地理学」、「方言地理学」を守ろうとして頑張っている、苔むした岩場に、しがみついているように見える。振り落とされることを恐れているのであろうか。

たとえば、グロットグラムが糸魚川沿いでは実験が可能だったけれども、東海道で成功するためには無い。直線にしか伝播の方向が無い場合しか、適用が出来ないはずである。一級の山脈や河川の走る日本では、適用が可能な場合もあるかも知れない。ところが、年齢差の興味から、地理的な必然性を考えないものが多い。方言の伝播は、簡単ではない。

ドイツやフランスのように言語地理学の先進国では、グロットグラムは当てはまらない。四方八方に開かれた土地では、方言の放射状の伝播が予想される。伝播の道は、無限である。グロットグラムで、単純に一本の直線を引いて、これを地理的変化だと仮定する安直さは、世界では、通用しない。グロットグラムは、限りなく単純で日本国内の入門期教材なのである。筆者は、年層差の言語地図を作り、十年毎に同じ地域の言語地図を何度も繰り返して調査して、隔年変化を実証してきた。社会言語学を言語地理学の中に既に早くから取り込んで研究してきた。こういう取り組みは、世界にはあまり、多くない。だから、欧米の地理言語学と筆者の地理言語学との間にも完全な相違がある。

むしろ、筆者の方法は、地理言語学と言うよりは、更に次の段階のもの、つまり、「地勢人勢方言学」と言った方が適切なのではないか、と考えるようになっている。この用語は、筆者の造語である。地勢人勢方言学とは、地域における政治的、経済的、文化的、地勢的な要因によって、言語が変化する法則を発見する科学である。それが、世界の全ての文明に適用可能かどうかを検討する課題が存することになる。ヨーロッパの地理言語学は、多言語地理言語学に近い。アメリカの地理言語学は、社会言語学に近い。しかし、筆者の地勢人勢方言学は、それらの中間である。

結論:

今後の地勢人勢方言学、または地理言語学は、従来の言語地理学に現在の社会言語学の知見を融合させ、環境の中で方言共時態の言語動態を史的観点で見定めていくことが大切である。そのような方針で、あいさつ表現儀礼全国地図の解釈を試行していきたいと考えている。

平成 15 年度～平成 16 年度 科学研究費 (基盤研究(C)(2))

『あいさつ表現儀礼全国地図』の解釈研究及び国際交流

An Interpretation of Courtesy Atlas in Japanese Greetings and International Exchange

研究成果報告書

A Report of the Results on the Study

研究課題番号: 15520291

発行日: 平成 17 年 5 月 25 日

May 25th, 2005

研究代表者: 江 端 義 夫 (広島大学大学院教育学研究科)

Yoshio Ebata (Graduate School of Education)

739-8524 広島県東広島市鏡山 1-1-1

1-1-1, Kagamiyama, Higashi-Hiroshima City, Japan, 739-8524

Tel, Fax, 082-424-6789, e-mail, ebata@hiroshima-u.ac.jp

印刷: 株式会社 ニシキプリント

printed by Nishiki Print Corporation